

れ良兵良民としての龜鑑である。此の如き有爲の士を而かも聖戰の初期に表へるは洵に痛惜痛恨の至りである。然かし士は百戦功なき瓦全を耻づ。氏や二十五歳を一期として華北の華と散りしと雖其の赫々の武勳は青史に輝き其の忠勇義烈至誠の行爲は勇名と共に千載に語り傳へられ。忠魂は不滅に生き護國の神と仰がれて神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族に尊き光と佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 坂 和 利

#### 擲彈筒分隊長としての北相攻撃に指揮適切難局を打開す

氏は栃木縣那須郡親園村の人にして母をミサと云ひ大正四年八月十四日に生れ未だ獨身であつた。己むを得ざる家庭の事情の爲幼時より祖父利三郎の養育を受けて成人した。資性温順にして孝心深く又不屈不撓の氣概に富み勤勉努力の模範青年として郷黨の信頼を受けて居た。昭和三年三月親園尋常小學校を卒業後親園公民學校に通學し同校卒業後は家庭に在りて農業に精勵する傍ら青年訓練所に學び在學間無缺席成績亦極めて優秀にして縣當局よりも表彰せられた。氏は萬能選手と賞揚され各種競技場に出場して名聲を擧げ殊に走高跳に於ては縣下青年團運動會に新記録を遺して居る程である。昭和十一年一月現役兵として宇都宮聯隊へ入營し成績優秀殊に銃劍術に於て卓越せる技能を有し第二種徽章を附與された。翌十二年四月下士官候補者に採用せられ益々其手腕を發揚し將來を矚目されて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月坂西部隊に屬し成島中隊の擲彈筒分隊長として勇躍征途に就いた。北支到着後暫く北平

西方西苑附近の警備に服し九月十四日には永定河々畔の戰闘に参加したが敵の猛射を浴びながら氏は率先敵前渡河を敢行し直ちに胡林南方地區の敵陣地を攻撃した。敵は既設陣地に據り頑強に抵抗したが氏は克く沈着敵重火器の位置を確認して有効適切に之を制壓し以て所屬中隊の戰闘を容易ならしめ續いて同夜午後九時より南公由の敵を夜襲し翌十五日拂曉之を占領するに至つた。



永定河畔の戰闘に勝利を得たる所屬部隊は敵を急追し九月十五日午後拒馬河北岸地區に進出し同河南岸の堅壘北相附近の堅壘に對し攻撃を準備した。所屬第二大隊は第一次渡河部隊として午後三時三十分行動を起し強行渡河を敢行するに至つたが氏の所屬第六中隊は大隊豫備隊であつた。拒馬河は急流にして水深胸に達し對岸の敵は此處を先途と猛射を浴びせ來り遺憾ながら我軍の死傷續出河中に斃るる者河岸に取りつき死傷する者數知れず悲壯慘烈目もあてられなかつた。此時所屬中隊長成島中尉は怒髮天を厲き獨斷第一線に火力を増かせんと欲し渡河を敢行し部下中隊を第八中隊の左翼に散開せしめた。氏は第一線左小隊内に在りて逸早く射撃位置を占め左前方に活躍中の敵重火器を發見して之を小隊長に報告すると共に自ら擲彈筒を取りて之に致命的大打撃を與へ以て小隊の攻撃前進を誘起し更に活動中の目標を求めて之を制壓した。斯くて所屬中隊は北相陣地の一角たる楊家屯の敵陣地を占領した。中隊が同地確保後隣接の敵陣地亦動搖の徴を認むるや益々要點に對し擲彈筒の威力を發揚したが惜いかな其際右胸部及後頭部に貫通銃創を受け其場に打倒れた。部下は

けつけて「分隊長殿しつかりして下さい敵の陣地は直ぐ前です」と云ひ力をつけたが出血甚だしく次第に氣息奄々たる中にも「天皇陛下萬歳」を叫び「あとを頼む」の一語を名残とし悲壯の戦死を遂げた。

氏や至誠報國の念燃ゆるが如く進んで下士官候補者を志願し常に修養怠らず學術科に精進して指揮統御要を得一度び聖戦に参加するや率先垂範萬難を克服し又劍電彈雨の裡に従容部下を激勵し適時適切に擲彈筒の威力を發揚せしめ以て中隊戦勝に重要な素因を與へた。寔に是れ中隊幹部の模範にして又皇軍歩兵の精華でもあつた。噫臨終のまぎわまでも重責を忘れずあとを頼むの一語何ぞそれ悲壯なるや。斯る忠勇義烈の士を喪へるは轉た哀悼に堪へずと雖も氏の功績たるや其芳名と共に皇軍戦史に輝き其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 齋藤 武

#### 忠實勇敢なる連絡兵死に臨み勸諭を奉唱す

氏は栃木縣那須郡金田村の人にして亡父を要一母をナカと云ひ明治四十四年五月二十三日生れで妻初恵との間に未だ子はなかつた。資性温順にして勤勉責任觀念の旺盛なる人であつた。大正十五年三月金田尋常小學校を卒業在校間は學業の成績良好にして級友の信望厚かつた。其の後は父母を扶けて家業に従ひ二年後青年訓練所に入所四ヶ年間殆んど無缺席學術の成績亦優秀他生の模範であつた。昭和七年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し十二月歩兵上等兵

に進級し初年兵掛を命ぜられ其の教育終るや滿洲事變に出動し齊々哈爾、克山に駐屯馬占山討伐にも参加し或は戦後の治安維持に任じ其の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり在營二年四月昭和九年五月内地歸還の上善行證書下士官適任證書を附與せられて滿期除隊した。其の後は家業に従事し又選ばれて青年團市野澤副支部長及在郷軍人分會市野澤副班長となり郷土の中堅として活躍し分團分會の發展に貢献せし所多く又昭和十一年四月より金田青年學校指導員を囑託せられ郷土青年の指導誘掖に任ずるや責任觀念旺盛にして一日の缺勤もなく熱心努力し指導嚴格にして反面慈愛に富み率先垂範郷土青年の訓育に寄與せし所尠くなかつた。



支那事變起るや間もなく應召し坂西部隊眞木隊に編入せられ第三小隊連絡係として昭和十二年八月二十六日勇躍征途に就いた。其の出陣に當り「再び諸君に逢へるかどうか判らないが私は今度大命に依り出征し思ふ存分御國の爲めに働く覺悟です」と青年學校生徒に告別の辭を述べて出發した。又青年學校には記念金を家兄には記念品を遺して形見となし妻に遺せし紙包には氏の命に依り戦死後開封

せしところ遺髪が封じてあつた。願へば氏多く語らざるも言外に一死奉公生還を期せざる牢固たる決意ありしを窺はるゝ次第である。北支戦線到着後所屬隊は九月十三日迄榆垵鎮南方永定河の警備に任じた。此の時氏は或は傳令として各哨所の連絡に努め或は自ら偵察に任ずる等克く小隊長を輔佐し特に十一日夜敵の逆襲に際しては剛膽勇敢熾烈なる敵彈下而かも暗夜正面四千米に亘る警戒区域内の各哨所と連絡し小隊長の命令を傳達し以て其の警戒を完からしめた。次いで九月二

十二日東釜山附近の追撃戦に際しては第三小隊は尖兵となり中隊の前方三百米を前進せしが急迫間常に中隊との連絡に大なる努力を拂ひ其の連絡を確保し又下柴口南方無名高地に於て敵と遭遇するや敵の有力なる重火器掃射地帯を勇敢に馳驅し小隊長の命を分隊長に傳へ又確實に小隊長の報告を中隊長に傳達し爾後中隊展開して攻撃に移るや更に活躍して連絡を確保し逐次敵に近迫し愈々小隊突撃を起すや小隊長と共に勇敢に敵中に突入し敵の占據せる高地を奪取して確保し引續き小隊長に跟随して敵を追撃し熱誠以て小隊長を輔佐し其の戦闘指導を容易ならしめた。

九月二十一日中隊は妨上占領後直ちに右に第三小隊左に第一小隊を第一線となし王谷莊附近大冊河渡河點を占領した。此の時氏は四周暗黒而かも敵の射撃は熾烈を極めたる中に分小隊長間を往來して小隊長命令を分隊長に傳へ其の間敵情に就てい刻々小隊長に報告する等洵に涙ぐまじき活躍を爲した。斯くして所屬中隊は二十二日午前二時大隊の右第一線として王谷莊堡北側の陣地向ひ夜襲の爲め前進を開始した。然るに敵の重機關銃は猛射を浴びせ來り夜間とは云へ敵は豫てより豫定準備ありし事とて我が死傷者相次いで生じ爲めに隊列も亂れんとする状況であつた。先頭に小隊長に隨行しありし氏は敵弾を冒して東奔西走連絡を確保し小隊長の部下掌握を援助して遂に大冊河を渡河した。同河は幅百米餘水深胸に達し河中には水雷其の他の障礙物が敷設せられてあつた。氏は之等障礙物を排除しつゝ勇敢に渡河し敵岸に達した。然るに敵陣地前には一帯に鐵條網が設けられ我が鐵條網破壊班は直ちに挺進して之が破壊に任じたが氏も又戰友と共に直前の破壊に任じた。此の間小隊内二、三の分隊長も敵弾に倒れた。之を知つた氏は小隊長に報告すると共に進んで分隊長に代り附近の兵を糾合指揮し小隊長の號令と共に鐵條網を通過し敵前四、五十米の所に達し突撃準備の爲め猛烈に敵に射撃を浴びせ其の最高調に達するや小隊長の號令に敢然敵陣地に突入すべく立つた其の刹那敵の一彈腹部を貫通し氏は倒れた。然かし氣丈の氏は重傷の身を起し氣息奄々たる中に軍人に賜はつたる勅諭の五ヶ條を奉唱して再び伏したる儘竟

に壯烈なる戦死を遂げた。

因に氏の亡父は日露戦争に出征して武勳を樹て長兄一氏は騎兵上等兵第三兄は工兵上等兵義兄石井郡治氏は歩兵一等兵にて出征中弟末吉氏も本年甲種合格といふ譽れの一家である。

氏は曩に滿洲事變に功あり叙勳の御沙汰を拜し歸りて郷に入るや各種修養機關の中樞となりて貢獻せし所尠ならず。今次再び出陣し選ばれて小隊長の傳令となるや素より一死奉公の覺悟其の忠誠の進る所彈雨の下勇敢剛膽其の職責に邁進し其の突撃に際しては勇猛果敢或は障礙物を排除し或は分隊長なき兵を指揮する等只管小隊長を輔佐し小隊長の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に死期迫るも眷々 聖諭を奉體し從容として瞑目す。眞に軍人の鑑と謂ふべきである。嗚呼氏應召以來漸く一ヶ月にして華北の華と散る洵に痛惜の感に堪へず。然れども士は百戦功なき瓦全を耻づ。氏の一生は短かゝりしも誠に光輝ある生涯であつた。其の累次の聖戦に樹てたる赫々の武勳は青史に輝き千載に誦はれ其の英靈は不滅に生き護國の神と祀られ尙も皇猷を扶翼し奉り又遺族一家の上に加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 北野 政一

### 勇敢積極的にして克く斥候の重任を全うす

氏は兵庫縣美方郡温泉町の人にして父を幾造母をゆきと稱し明治四十一年一月二十日生れにして未だ獨身であつた。性豪爽にして敢爲而かも義務心に厚く責任觀念の盛であつた事は郷黨の間にも亦軍隊に於ける上官僚友にも一様に知られて

居た。徴兵として鳥取歩兵第四十聯隊に入營し熱心精勵上等兵に進み除隊の際は下士官適任證書をも授けられた。支那事變勃發するや氏は昭和十二年八月應召し長野部隊に編入せられ勇躍北支に出征した。當時大陸の酷暑は膚を灼くが如く加ふるに連日の豪雨は到る所出水し道路は泥濘膝を没する状況にて進軍の困苦は到底想像も及ばぬ許りであつたが氏は一意奉公の念に燃え常に凛然として隊中の基幹をなした。斯くして所屬隊は九月初旬馬廠攻撃の爲め先づ其の前哨陣地とも謂ふべき敵陣地に對し攻撃を準備したのである。此の時氏の



形の偵察を努めた。特に中隊長は前方にある楊莊子及康莊子附近の敵情並に地形殊に其の附近にある水濠の状態が將來敵を攻撃する爲め極めて重大なる關係あるに鑑み九月四日小林少尉の指揮する一組の將校斥候に此の重大なる偵察任務を授けた。此の時氏の技量性格が斥候として適任である事を熟知しある少尉は氏を其の一員として選拔し共に勇んで榮ある任務に出發した。然るに此の附近一帯は常述の如き氾濫地帯にて濁水腰に達し行動頗る困難であつたが氏は常に斥候の先頭に立つて斥候長を庇護輔佐しつゝ前進した。漸くにして康莊子附近の敵陣地と豫想する地點に近づき偵察をなしたが敵もさるもの巧妙なる偽装を施し爲に容易に其の陣地の細部を知る事が出来ない。そこで氏は斥候長の命により一等兵山本秋義氏を率ゐて更に濁水中を潜行し巧みに村落に近づき漸くにして敵陣地の細部に重輕機關銃のある位置迄も詳細に偵知した。然るに敵は此の時始めて氏等の近接を知りてか突如として猛烈なる射撃を浴びせて來た。此の時氏は

惜しくも忽ち身に數彈を受け鮮血絨衣を染めて歩行さへ不可能に立到つたが敵前眞近くして救急の策を施す餘猶もなく且は又自ら速に情況を斥候長に報告するの必要を痛感し痛手を抑へつゝ奮然山本一等兵に助けられつゝ再び濁水中を潜行して斥候長の許に歸來し詳細情況を報告し有力なる資料を提供した。此の時已に氏の受けたる重傷は出血愈々甚しく斥候長への報告を終るや其の責任を果したる喜びに莞爾として瞑目し眞に悲壯なる戦死を遂げた。

凡そ戦鬪の勝利は指揮統帥の卓越と將兵一致よく其の本分を盡し任務の爲めには斃れて後止む責任觀念如何に存する事は勿論である。而して戦鬪指揮を適切ならしむる爲めに其の敵情地形を明かにする事が先決要件である。馬廠前哨陣地に對する攻撃に於て氏等が死を以て敢行せる偵察の結果は正に我が軍戦勝の途を拓いたものであつて其の豪膽にして沈毅、勇敢にして而かも細心なる行動と身重傷を受けながら斥候長の許迄歸來し親しく重要なる報告を了して斃れし旺盛なる責任觀念と崇高なる義務心は正に皇國軍人の勳鑑である。斯くの如き勇士を聖戦の初期に喪ひし事は洵に痛惜の極みであるが氏が樹てたる武勳は赫々として皇軍戦史に輝き其の勇名は千載に誦はれ其の忠魂は不滅に生き護國の神と仰がれ其の靈徳は皇國並に遺族一家の上に教き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 三村平吉

行宮南苑攻撃に堅忍不拔輕機の威力を發揚して苦境を打開す

氏は新潟縣北蒲原郡金塚村の人にして亡父を喜三郎母をアトと云ひ明治四十四年四月二十二日生れで未だ獨身であつ

た。資性濃厚真面目にして克く他兵を善導し幹部の信望厚く又同僚の信頼を一身に集めてゐた。大正三年三月金塚尋常高等小學校を又昭和二年三月縣立中條農學校を卒業し昭和七年一月徴兵として新發田歩兵聯隊に入營在隊中軍務に精勵成績優秀にして上等兵に進級し同八年七月歸休除隊となつた。其の後昭和十年八月より朝鮮總督府專賣局廣梁灣出張所に勤務し同十二年六月雇員を命ぜられた。



支那事變起るや早速應召鯉登部隊第十中隊に編入せられ第二小隊第三分隊輕機關銃手として昭和十二年七月十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後七月二十六日郎坊附近の戦場に際しては所屬隊は該地警備中隊應援の爲め二十五日夜半天津出發翌二十六日朝郎坊到着第一線となり敵を攻撃し午前八時敵は潰走するに至つた。次で所屬隊は翌二十七日南苑の敵攻撃の目的を以て列車に依り北平南方八里の北上黃村に下車し夫れより徒歩にて急進せしが午後三時半頃敵は南苑の更に南方行宮に陣地を占領しありて我が前進を阻止せしを以て我が前衛たる第一大隊は直ちに之に對し攻撃を開始した。氏の所屬中隊は續いて第一大隊の左に増加を命ぜられ午後四時攻撃を開始せしが敵は機關銃迫撃砲其他を以て我を猛射し又銃眼掩蓋を有する陣地に據りて頑強に抵抗し爲めに我が部隊は死傷者續出するに至りしも猛烈に攻撃を繼續し激戰實に三時間半にして午後七時三十分頃さしも頑強に抵抗せる敵を撃退することを得た。此の間氏は中隊の左第一線小隊左翼分隊にあつて丈餘の高梁畑と豆畑の爲め行動困難加ふるに炎熱灼くが如く而かも敵の銃砲弾は間斷なく附近に落達炸裂する

中を萬難を排し左翼分隊として敵の右翼に向ひ攻勢鉤形をとりつゝ迅速果敢に行動し且常に敵情に注意して有利なる目標を捉へ沈着克く分隊長の指揮に従ひ正確なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ逐次敵に近迫して中隊愈々突撃に移るや氏は分隊の眞先に立ちて勇敢に敵陣地に突入機を失せず所在の敵に猛火を浴びせて多大の損害を與へ以て小隊の攻撃奏功に貢献せし所甚大であつた。斯くして所屬隊は遂に行宮を攻略し翌二十八日愈々所期の目標たる南苑の敵を攻撃すべく前進し氏の所屬中隊は尖兵中隊となり午前五時行宮出發途中敵の敗殘兵の射撃を受けつゝ先づ展開線たる三合莊に向ひ午前七時三十分同地に到着するを得た。而して聯隊展開するや氏の中隊は聯隊の豫備隊となり午前八時三十分約一時間に亘る我が飛行機の爆撃と砲兵の射撃を待つて軍旗と共に攻撃前進を開始した。戰場は高梁丈餘に伸び通視連絡頗る困難加ふるに敵は高さ四米餘の土壁に據り深さ二米以上の外壕を廻らし頑強に抵抗し我が全線に向ひ銃砲を猛射せるを以て我は第一線のみならず到る處死傷者續出するに至りしがかゝる慘烈の中に於て氏は克く沈着して敵情を監視すると共に軍旗の守護に任じつゝ前進し午後零時過ぎ正面の敵逐次退却の色見ゆるや中隊は軍旗と共に第一線に出で敵兵營西南側土壁に向ひ突入し該地を占領した。此の突撃に際し氏は分隊の先頭に在りて勇猛果敢土壁に上りしが其の刹那無念敵の迫撃砲彈近く落下炸裂し附近にありし戰友數名と共に氏も頭部及右肩胛部に破片創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦陣に立つや彈雨の下勇敢沈着歩兵小隊の重要火器たる輕機關銃の射手として常に正確なる射撃を實施し以て小隊の攻撃を容易ならしめ皇軍輕機の精銳を發揮して遺憾なかつた。是れ實に職責の存する所身命を君國に捧げ斃れて後已む忠誠の發露と謂ふべきである。斯かる勇士の緒戦に於て散華せしは惜みても尙餘りある所であるが開戰勢頭傲慢不遜の敵を膺懲して玉碎したる赫々の武勳は千載の下青史に輝き其の芳名は萬古に謳はれ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し遺族に加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍砲兵伍長勳八等功七級 宮本勝太郎

#### 悲壯優秀なる敵襲を受け死を以て火砲を護る

氏は兵庫縣城崎郡國府村の人にして亡父を仲藏亡母をカツと云ひ大正四年一月十日に生れ未だ獨身であつた。性温良にして義務心篤く小學校を卒業後は家業に従事し昭和十一年一月姫路野砲兵聯隊に入營し成績優秀にして同十二月上等兵に進級した。

支那事變起るや赤木部隊上月中隊第一分隊の二番砲手として昭和十二年八月勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後は出水地帯或は泥濘車輪を没する悪路に悩まされながらも百折不撓強行軍を續けて戦線に進出し八月下旬より津浦沿線の攻撃開始せらるゝや氏の所屬中隊は長瀬支隊に配屬せられ三間房小王莊附近の戦闘に参加したが氏は沈着正確なる照準を以て中隊長の意圖の如く有効なる射弾を送り歩兵部隊の攻撃を容易ならしめ遺憾なく其優秀な射撃技術を發揮した。

九月下旬滄縣附近攻撃の際は第一分隊に屬して不眠不休分隊長を輔佐してよくその任務を遂行し續いて敗敵を追うて德縣に向ひ十月一日未明北霞口北方約千二百米の十二里口に達せし時俄然前方に銃聲の響くを聞いた。是れ運河に依り前送中の我が大隊彈藥輸送船を敵が襲撃せし銃聲であつた。茲に於て所屬中隊長は第一分隊をして前方約五百米の疎林外に放列を布置し之を撃退すべき事を命じたが此附近の道路は泥濘甚だしく火砲の推進極めて困難であつた。然かし氏は克く分隊長を輔佐し人馬協力必死の努力を以て遂に所命の疎林外に進出して放列布置を終るや千二百米の直接照準を以て最も急

速なる射撃を開始し爾後引續き之に猛射を加へた。我が輸送船團を射撃中なりし敵は我が猛射を受くるや忽ち左右に分進し凹地其他の地形を利用し逐次我に對し包圍の態勢を取りつつ勇敢に前進して來た。生憎此砲兵隊には掩護歩兵をき全く砲兵隊自體を以て防戦するの外は途もなかつた。所屬中隊長は第二分隊以下の火砲をも第一分隊の左方に放列を布置せしめんとしたが第二分隊は辛じて進入を終りたるも第三分隊は疎林内に於て輓索切斷の爲其場に放列を布置し第四分隊は



其の場に放列を布置し専ら中隊段列の警備に當て以て四周より襲撃し來る敵に對する戰闘部署を執らしむるに至つた。天明となり敵狀を觀察すれば少くも千名を下らざる大敵にして異様の突撃喇叭を吹奏しつつ勇猛に肉迫して來るのであつた。氏の分隊は正確迅速なる猛射を以て敵に多大の損害を與へつゝあつたが早や砲側の彈藥を射耗し且泥濘の爲彈藥の補給意に任せず剩さへ先刻來の猛射に依り藥筒の抽出さへ屢々故障を生ずるに至つた。他分隊とても亦同じ運命に陥りしを以て中隊長は將兵一同を起立せしめ遙かに宮城に向ひ萬歳を奉唱し暫時黙禱に次で水筒の水を分ち全員火砲と共に斃るべ

き決意を固めさせた。ああ何たる悲壯の光景ぞや。敵は新手を替へつつ尙も餓虎の如く押し寄せ來る。味方は或は信管廻を或は照準棍を持ちたるまま無念の最期を遂ぐるあり自衛の小銃分隊員の如きは壯烈なる白兵戦に移り敵數十名を刺殺したりとは云へ群がり來る新手のため相前後して敵の手榴彈や小銃彈に噎れ果てた。中隊長も既に右脚に銃創を受けたが足を引摺り乍らも戦砲隊を指揮して奮闘したが敵彈數發を身に受けて壯烈なる戦死を遂げた。氏は最早や是れ迄と最後の照

準中右眼に爆創を受けたが之に怯まず左眼を以て照準を行ひしが敵兵咫尺に迫り来るや眼鏡を離脱して傍の運河に投じ銃剣を抜く手も見せず群がる敵中に突進して敵兵數名を屠つた。然かし此時不幸敵彈の爲右側胸部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は以上の如く悲惨の戦闘を續けたが幸にして残れる兵員は遂に敵をして火砲には一指だも觸れしむる事なく之を撃退するを得た。是れ全く天佑神助と氏等の尊き犠牲の賜物であつた。

氏や成績優秀にして特に選ばれて二番砲手の重職を擔當せしめられ克く精度良好なる射弾に依り中隊戦闘に貢献せる所甚大であつた。而かも幾多の難局に遭遇して不屈不撓常に分隊の中堅となりて分隊長を輔佐し不幸にして中隊が豫期せざる苦闘に陥るも沈着剛膽己が職分に邁進し身を以て火砲を死守せるは正に皇軍砲兵の本領を發揚して遺憾なく定に軍人の總鑑たるものと云ふべきである。ああ斯る忠誠勇武の士を喪へるは痛惜禁ずる能はずと雖其功績たるや皇軍彈史に光彩を放ち其名は傳へて後世に芳ばしく其不滅の英靈は護國の神と祀られ其神靈や尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るるであらう。

氏は戦死の日砲兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 清水長七

#### 職責遂行の示範、輕機關銃と運命を偕にす

氏は群馬縣邑樂郡大箇野村の人にして父を留藏母をたけと云ひ大正三年八月十五日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚而かも機敏にして進取の氣象に富み獨立不羈の志堅く小遣錢は悉く書籍購入の資となし毎夜深更まで勉學してゐた。又家

業たる農事に關しても頗る精勵なるのみならず常に進歩改善に努め其耕耘の進捗と云ひ其成果といひ遙かに近隣の壯者を凌駕してゐた。昭和二年三月大箇野尋常高等小學校を卒業したが在校中は成績優秀品行方正にして善行多く高等科卒業まで年々優等賞を授けられた。引續き青年學校に入校自奮自動心身の鍛練に留意し其結果教練の成績は特に優秀であつた。昭和十年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營し熱心勉勵其の年十二上等兵に進級し選ばれて旅團司令部の當番長となり七ヶ月に亘る服務間精勵の故を以て當時の旅團長より揮毫を與へられ其後將校集會所當番長として五ヶ月間勤務し除隊に際しては善行證書下士官適任證書を附與せられた。

支那事變起るや間もなく應召森田部隊糸日谷隊に編入せられ第三小隊第二分隊輕機關銃手として昭和十二年八月十四日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十二日より十四日に亘る永定河畔胡家門村附近の戦闘に際しては永定河の渡河戦闘並に門村附近の夜間戦闘に参加し九月十五日拒馬河畔東茨村附近の戦闘に際しては所屬小隊は尖兵となりて前進し敵に接近して中隊攻撃展開するや其右第一線小隊内にありて終始勇敢に適時有効なる射撃を爲し小隊の攻撃奏功に貢献せる所多大であつた。次で九月十六日は平漢線東側地區望海庄附近の戦闘及殘敵掃蕩に引續き翌十七日には東管領附近の戦闘に次で九月十八日より二十日に亘りては平漢線西側地區高里店姥村附近の戦闘に参加し彈雨の下殊に迫撃砲彈雨飛する中を勇敢に前進し適時適切有効なる射撃を以て敵に多大の損害を與へ之を制壓し毎戦小隊の攻撃奏功に與かつて力あつた。

九月二十一日より二十二日に亘る大冊河畔黃村附近の戦闘に際しては中隊は二十一日午後六時より行動を起し所屬小隊は中隊の左第一線となり二十二日午前十時二十分より戦闘を開始した。氏は有効なる射撃を以て攻撃を容易ならしめつゝ勇敢に敵に近迫し間もなく敵の警戒陣地を突破し續いて敵の猛火を冒して本陣地に向ひ攻撃前進するや敵兵約百名逆襲し來りしを以て氏は分隊長及彈藥手一名と共に約十五米左前方に急進して最も適切なる陣地を占め逆襲部隊に猛射を浴せ多

大の損害を與へつゝありしが其際氏は左前膊に貫通銃創を蒙るに至つた。然し剛氣の氏は戦機は一瞬の射撃中絶をも許さずと見其の身の負傷にも屈せず右前方にありて逆襲部隊の攻撃を支援しつゝある敵機關銃に目標を變換し有效なる射撃を以て之を制壓しつゝありしが残念にも射撃しつゝある輕機關銃は暫くして敵彈の爲破壊せられ次で分隊長負傷し續いて氏も亦無念左頭部右下顎部に敵彈を受けて竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや良民出で、軍隊に入るや良兵其戦陣に立つや一同賞讃的であつた。即ち勇猛果敢小隊戦闘の重要兵器たる輕機關銃射手として奮戦力闘皇軍輕機の特鋭を發揮して遺憾なかつた。殊に戦機の重きを知りて傷つくも屈せず終に愛銃と運命を惜にす。其壯烈鬼神を哭かしむとも云ふべきであつた。是皆氏が忠誠の進る所實に輕機關銃手の鑑とすべきである。氏今や大冊河畔に大和櫻と散華せしも毎戦氏の樹てたる赫々の武勳と職責遂行の示範とは千載の下青史に輝き不滅の英魂は護國の神となり後世永遠萬民に仰がれ神靈尙も皇國を護り佑を遺族の將來に垂るゝであらう。氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級 塩見 勇  
歩兵砲目標偵察斥候として剛膽敵陣近く潜行有利の報告を齎らして殞る

氏は岡山縣吉備郡新本村の人にして父を丈太郎母を小里と云ひ大正三年三月二十日生れで未だ獨身であつた。資性温厚快活英邁にして親に對し孝心殊に厚かつた。昭和二年三月新本尋常高等小學校を卒業し引續き新本公民學校に入り同六年三月卒業尙引續き新本青年訓練所に入所し同九年三月其の課程を修了した。而して此間家業たる農業に精勵して居た。昭

和十年六月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵其成績優秀にして上等兵に進級し同十一年十二月歸隊除隊した。

支那事變起るや間もなく應召し森本部隊歩兵砲中隊に編入せられ第二小隊第二分隊の砲手として昭和十二年八月十九日勇躍征途に就き九月四日北支蘆溝橋に於て所屬部隊に追及し爾後酷暑を冒しあらゆる困苦缺乏に耐へ只管保定攻撃の時期



到來を待ちしが所屬隊は愈々十四日夜半より之が總攻撃の爲良郷を出發し暗夜膝を没する泥濘の難路を強行軍し十五日午後三時頃房山東北方約二里四世庄附近の敵を驅逐し次で翌十六日黎明更に行動を開始するや忽ち高粱を掠めて飛來する敵彈は逐次身邊を襲ひ砲の車輛或は防楯に數發命中するの状況を呈するに至つた。而して午前七時頃中隊は砲煙彈雨の中を東瓜吃庄北側敵陣地前二百米附近に進出したるも高粱の爲通視を妨げられ射撃意の如くならなかつた。此の時氏は中隊長より部下一名を率ひて目標偵察並に射界清掃の任務を受けたが此頃難攻不落と恃める敵主陣地一帯より撃ち出す銃砲彈は愈々激しく彼我の砲聲天地に轟き爲に地軸も裂くるやの感があつた。然し氏は篠つく如き敵彈を物ともせず勇躍任に就き勇敢にも敵を目視し得る敵前百米の所にまで進出し射界の清掃に努めつゝ敵情を偵察しありしが忽ち大隊の正面を猛射しつゝある敵の自動火器を發見し機を失することなく直ちに同行の高石一等兵をして之を中隊長に報告せしめ總て射界の清掃終りて中隊長の許に至り敵主陣地を指示しつゝ敵に近迫して偵察目撃し得たる状況を逐一報告して曰く「中隊長殿今撃



つ迫撃砲はあの柳の後ろにあり又左の高梁の切れ目に見ゆる土饅頭はトウチカにして敵の機關銃はあの中より第一線を猛射して居ります。その後ろに續く壕内には密集せる敵が前進しつゝあります」と仔細に互り報告しつゝありしが其の報告終るや終らざるに無念敵の一弾は氏の鐵兜を射貫き額を貫通し敵方を指しながら其場に倒れ竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し中隊は此有利且貴重なる報告に基き敵に猛射を加へて逐次制壓し中隊長以下若干の死傷者を生じたるも遂に夕暗迫る頃さしも頑強を極はめし敵陣地を奪取することを得た。

氏は選ばれて歩兵砲の最も重要な射撃目標の偵察に赴くや猛火の下挺身而かも剛膽沈着仔細に敵情を見隊長の鶴首し、て知らんと欲せる重要目標を逐一報告して餘蘊なかつた。かくの如きは氏の天性英邁なりしに依るとは云へ然かし盡忠報國の大義より發せる旺盛なる職責觀念の顯現と云ふべく參戰劈頭の散華は痛惜盡きざるも一戰玉碎して以て重大使命を完了したる其赫々の武勳は千載に輝き其芳名は萬古に流れて盡きざるべく亦其の英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に遺族の將來に導き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 廣田 幸一

#### 勇敢なる通信手重傷を負ひ尙保護を完うして瘞る

氏は兵庫縣赤穂郡鞍居村の人にして父を馬治母をまつ江と云ひ明治四十一年十月九日生で妻しづ子との間に美佐子、重子、美津子の三女がある。資性正直一途にして犠牲的精神に富み責任觀念旺盛であつた。大正十二年三月上郡尋常高等小

學校卒業後農業に従事し副業として蠶業及木炭製造業を営んでゐた。昭和四年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして翌五年一月上等兵に進級し特に劍術に長じ賞狀を授けられ同年七月善行證書を附與せられて歸隊除隊した。其後鞍居村青年訓練所教練指導員となり居村青年の教育に盡瘁し同十年家事の都合により退任したが更に居村在郷軍人分會班長に推され分會發達の爲貢獻せる所尠くなかつた。



支那事變起るや昭和十二年八月二十日沼田部隊に應召迫撃砲第四大隊に編入せられ通信手として同月三十一日勇躍征途に就いた。中支戦線到着後九月八日月浦鎮附近の戦闘に際しては大隊通信班豫備班長であつたが終始他班の勤務を援助し敵火の下に保線に従事し九月十三日より二十七日に亘る羅店鎮附近の戦闘に際しては稍健康を害しありし爲休養を勧めしも氏は頑として聞入れず苦痛を忍びて通信班員として自己の任務を遂行し特に九月二十一、二十二日羅店鎮南側地區の敵陣地攻撃に際し迫撃砲大隊が歩兵〇〇聯隊に協力して戦闘するや氏は通信手として敵前至近の距離に雨下する彈丸の下勇

敢に行動し所屬大隊本部より適時歩兵第二大隊本部間に通信網を構成し歩兵と迫撃砲隊との協同戦闘を緊密ならしむることを得た。讀いて九月二十八日より十月九日に亘りては月浦鎮附近に於て。十月十日より二十三日に亘りては劉家行附近に於て警戒其他の諸勤務に従事し該地附近警備の任務を完うし十月二十四日より二十六日に亘る大場鎮附近の戦闘に際しては二十四日は豫備班長として塙里宅に位置し塙里宅より蘇家宅に至る間の大隊電話網保線に任じ翌二十五日は迫撃砲大

隊が蘇家宅に陣地を占領し観測所を施宅東方三百米に選定し歩兵第三大隊の戦闘に協力して走馬塘南岸の敵に對し攻撃するや當時砲目距離千米観目距離三百米の近距離にて激戦なりしが爲敵の重砲弾は屢々本部附近に落下し爲に電話線の切斷せらるゝこと頻繁であつたが氏は彈雨の中を意に介せず電話線に沿ひて疾驅前進し切斷箇所を搜索偵知し機を失せずが接続を爲し保線を完うし通話の繼續に奮闘した。此勇敢大膽なる行動に依り戦機一刻の猶豫も許さざる時機に歩兵と迫撃砲との協力戦闘を緊密ならしめた其の功績は偉大なるものであつた。

次で翌二十六日には第二構成班通信手三番として班長松原上等兵の指揮下に大隊通信班の架設せし電話網の保線に任せしが午前八時頃迫撃砲大隊観測所を西崙灣に推進し陸港、鐘港、張家橋の敵を攻撃するや氏は朝來率先して屢々電話線の保線に活躍せしが午後三時頃大隊観測所西方四百米の附近に於て敵彈の爲電話線斷線するや氏は保線の命を受け雨下する敵火を冒して勇躍馳驅して斷線箇所を搜索し漸く之を發見して接続中惜しくも腹部及右前膊部に貫通銃創を受け其場に倒れた。然かし剛氣の氏は之に屈せず完全に其保線を終へた。斯くて氏は收容せられ手當を受けたが何分重傷にて死期刻々迫り氣息奄々たる中に戦友に對し「自分にかまはず任務に働いて呉れ」と述べ幽すかに萬歳を口にしつゝ午後四時四十分竟に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏や郷に在りては一村の中堅たり。出でゝ軍に従ふや良民良兵たるの實を發揮し病むも屈せず猛火も意に介せず歩砲協同戦闘の命脈たる通信線の完保に活躍して戦機を逸せざらしめ而かも死に瀕して一言私事に及ばず心頭唯只任務あるのみであつた。其責任觀念の旺盛なる感嘆の外なく職責の存する所身命を君國に捧げ盡れて後已む忠誠の發露と謂ふべきである。嗚呼氏惜しくも江南の華と散つた。然れども其重要使命を果したる赫々の武勳は千載青史に輝き不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も出でゝは聖戰を守護すると同時に入りては愛兒の多幸を加護して已まぬことであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 森山利明

#### 剛膽慧敏の擲彈高手、所屬分隊の危急を救つて玉碎す

氏は長野縣東筑摩郡日向村の人にして父を定邦母をとくのと云ひ大正二年十一月三十日生れで未だ獨身であつた。資性質實剛健にして孝心深く弟妹にもやさしかつた。昭和二年三月日向小學校を卒業後長野縣坂北實科中學校へ入學し同四年三月同校卒業爾後家庭に在りて農業に精勵して居た。幼少より軍隊生活に憧がれ昭和七年十二月現役志願兵として獨立守備歩兵第四大隊へ入營し同八年四月第三次三角地帯の討伐に参加して各地の戦闘に勳功を奏し同年十二月には第十二大隊に轉屬して掖河梨樹嶺密山等の警備に任じ克く積極的に任務を遂行し功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり優秀なる成績を以て滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遼山部隊に屬し恒吉中隊第三小隊擲彈高手として勇躍北支戰線へ出動した。北支到着後所屬中隊は軍兵站監部の直轄部隊として豐臺及長辛店附近の警備に任じ氏は殘敵蠢動物情騒然たる情況下に剛膽沈着克く諸種の警戒勤務を完遂した。爾後所屬中隊は九月二十五日以來京漢線に沿ひ鐵道輸送に依り沙河北岸地區に進出し同月二十七日午後三時半頃より新樂附近小趙村の敵陣地を攻撃するに至つた。敵は部落の圍壁に據り水濠をめぐらし我が軍の接近に伴ひ猛射を浴びせ來り頑強に抵抗した。中隊は一進一止敵前約二百米に接近するや敵彈益々熾烈を極め死傷者も漸く増加したが氏は更に怯まず愈々沈着正確なる射撃を以て敵の重火器を逐次に制壓し或は之を撲滅して所屬中隊の戦闘

を容易ならしめ以て翌二十八日午前五時同部を占領するに至らしめた。

翌二十九日より十月五日に亘る間は沙河南岸地區に於ける警戒並に架橋掩護に任じ更に洮沱河の河川偵察の斥候要員となり敵の猛射を意とせず勇敢に行動し以て斥候長をして重要資料を報告せしめ又渡河材料の蒐集に従事する等常に業に先んじ積極的に任務を完了した。斯くて十月八日所屬部隊は洮沱河の敵前渡河を敢行したが氏は其間對岸敵陣地よりの猛射



を浴びつつ或は斥候として或は歩哨として勤務し或は擲弾筒を以て對岸の監視部隊を制壓し以て所屬部隊の渡河を容易ならしめ遂に決然渡河して敵陣地を占領するに至つた。

所屬田鎖大隊は十月十一日以来石家莊元氏及び順德附近に殘敵を掃蕩し同月十七日朝來の強行軍を以て十數里を突破し光祿鎮驛北方二軒の地點に到達し光祿鎮驛附近の敵陣地に對し攻撃を準備した。所屬中隊は中央第一線所屬小隊は中隊の左第一線となり夜襲の隊形を整へ中隊は光祿鎮驛を一舉奪取すべき命令を受けた。午後十一時月皎々として中天に懸り人馬黙々として接敵行動を起した。當面の

敵約三千は列車を仕立て逃げ仕度をなし驛附近には敵兵のさわめきが獨り靜肅を破るのみにして全く我が接近を氣付かずに居た。併し敵前二百米に接近するや竟に敵の發覺する所となり全線一齊に猛射を浴びた。されど我が軍は一發も發射する事なく敵前百米に接近した。やがて突撃命令一下氏の分隊は小隊の右翼に増加を命ぜられた。氏は猛烈なる彈雨の中を壕を超え敗退する敵を背後より刺殺或は射殺しつつ驛を目がけて奮進中突如家屋のかけから飛出した約二ヶ分隊の敵より

逆襲を受け見る／＼所屬分隊は危殆に瀕した。此時氏は地物を利用して敵の横合より群がる敵中に突入し其三四名を刺殺した。敵は周章狼狽爲す所を知らず忽ち算を亂して潰走した。今や氏は鐵道線路を躍り越え驛に突入せんとする一刹那不幸敵彈の爲頭部及胸部を打貫かれ其場に倒れた。戰友は氏を抱き起し確かりせ！と止血繃帯を施せば氏は「今だ今だ早く驛を」の一語を名残とし壯烈なる戦死を遂げた。而して所屬部隊は氏等の尊き犠牲に依り其夜午前零時二十分光祿鎮驛を完全に占領確保することを得た。

氏や曩に滿洲事變に赫々たる武功を奏し今次亦聖戦に参加するや選ばれて擲弾筒手の重任を課せられ各戦克く其卓越せる射撃技能を發揚して戦勝の獲得に重大なる素因を與へた。又剛膽慧敏屢々斥候として重要資料を蒐集して部隊戦闘に確乎たる憑據を與へ或は不期の難局に處して部隊の危急を救ふ等洵に是れ皇軍歩兵の精銳にして一般軍人の龜鑑であつた。然るに今や斯の有爲精悍なる勇士を喪ひしは眞に痛惜禁ずる能はざる所であるが氏の功績たるや所屬隊をして北支快速部隊として勇名を轟かせ皇軍戦史に特筆せらるべきものにして其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 鈴木 傳

困難なる戦況下に傳令の任務を果し且奮戦中上官の身代となる

氏は神奈川県都筑郡二俣川村の人にして父を傳藏母をトヨと稱し明治三十九年八月二十四日に生れ妻マサとの間にアヤ

子、岑生、玲子、範子の四愛兒がある。氏は資性剛毅快活にして責任觀念最も旺盛であつた。大正十年三月小學校高等科を卒業後は専ら父母に仕へ汝々として農業に従事し又青年團に入團して體力の向上と徳操の練磨に精進してゐたが大正十三年一月現役志願兵として近衛歩兵第一聯隊に入隊し翌十四年十一月除隊となつて歸郷するや益々家業に勵み忽ち郷黨上下の敬愛する處となり青年團役員に推され次で昭和十年一月支部長となつた。又養蠶實行組合農事實行組合副組合長消防

組小頭在郷軍人分會班長其他村自治行政等に參與して献身的に盡瘁し各方面に貢献する處多かつたので幾多の感謝狀や記念品等を授與された。



昭和七年三月後備役勤務演習のため近衛歩兵第三聯隊に入隊し成績優秀にて歩兵上等兵に進級した。支那事變勃發するや昭和十二年九月應召し伊佐部隊浦野機關銃中隊に屬し勇躍中支方面の征途に就いた。中支上陸後氏は機關銃中隊指揮班員として十月四日より陸家橋張宅附近攻撃に参加した。陸家橋附近敵陣地前は水濘多く攻撃部隊行動の困難は勿論相互の協同連絡は動々もすれば絶たれんとする狀況であつた。我は地の利を得ず殊に敵の火力は極めて熾烈を極め各部隊長の部下の指揮掌握は容易ならざるものがあつた。此の間氏は猛烈なる敵火の危険をも顧みず東奔西走勇敢に行動して中隊長の命令意圖を各小隊に傳達し其連絡を確保し中隊長の指揮掌握を容易ならしめ次で十月八日中隊が朱宅南方地區に轉戦するや敵は既設陣地を恃み近代武器を配して必死の抵抗をなし其敵火は陣地前を掃射し物凄きまでに熾烈を極め殊に惡天候の爲め泥濘到る處田圃の如き状態を呈し而

も敵と至近距離に近迫せるを以て行動極めて困難となりしにも拘はらず氏は任務以外に何物も無きが如く從容として彈雨を冒し敏活確實に連絡の重任に服し中隊の行動をして少しも錯誤を生ぜしめなかつた。斯くて愈々敵陣地に接近し敵と交戦中竟に白兵戦を惹起するに至つた。中隊長は大聲叱呼率先中隊の先頭に起ち愛刀を揮つて敵陣地に突入した。此の瞬間氏は隊長危険なりと身を躍らして中隊長の前方に出で衆敵と格闘し竟に壯烈極まる戦死を遂げたのであつた。

顧みれば氏は中隊長の股肱として命令傳達や部隊間の連絡に任じて居たが所謂上海戦線の激戦中常に身を挺して難に赴き死線を超越して一意自己責務の遂行に邁進し以て中隊長の指揮を容易ならしめたばかりで無く其勇敢なる行動は一般の志氣を鼓舞し戦果を有利に導いた其功績は偉大なるものである。殊に中隊長を庇護し進んで矢面に立ちし犠牲的精神こそは崇高なる軍人精神を遺憾なく發露したものである。其後氏の所屬部隊は軍司令官より感狀を附與されたが氏の尊き犠牲も其重要な礎石を成して居ることを忘れてはならぬ。今や颯爽たる雄姿に接する能はずと雖其功績は江南戦史に輝き其英靈は尙も護國の神として皇國を守護し又一家の守護神として一家就中愛兒等の將來に尊き加護を垂るゝことであらう。因に嚴父傳藏氏は日露戦役に参加し勳八等を賜はつた勇士であり戦死の報に接し満足氣に小さい時からきかん坊であつたから夭折した長男の分まで働いてくれた事と思ひますと又妻女は愛兒を靈前に坐らせ行賞の榮譽を奉告し皇恩に感謝しつゝ亡き夫も草葉のかけに厚き皇恩に感泣して居ることとせうと語つたと云ふことである。舉家皇恩を感謝し奉る信念態度は亦統後國民の模範たるものと轉た景仰に堪へない。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 杉下 淺一

#### 壯烈勇敢再度鐵條網を破壊して東花園陣頭に玉碎す

氏は兵庫縣宍粟郡菅野村の人にして父を治平母をてふと云ひ明治四十五年二月十九日其の長男として生れ未だ獨身で二弟四妹がある。性温厚而かも剛膽職務に忠實にして上長を敬ひ同輩に信にして上下の信望篤かつた。大正十五年三月菅野小學校高等科を卒業し。爾後家庭にあつて専心家事の手傳をなし傍ら青年訓練所に入り良好なる成績を以て其の課程を修了した。

昭和八年一月現役兵として歩兵第四十聯隊に入營し熱心軍務に勉勵し成績良好であつた。當時滿洲事變尙熾まず間もなく所屬隊と共に滿洲に派遣せられ北滿各地の警備に或は匪賊討伐に参加し其の間歩兵上等兵に進み翌九年五月凱旋歸還し功に依り勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり同年十一月三十日善行證書を附與せられ歸隊除隊した。氏は銃劍術に長じ銃劍術競技會に屢々賞状を受けた。除隊後は尼崎市住友金屬工業株式會社従業員として誠實熱心に勤務して居た。

昭和十二年七月支那事變勃發するや八月應召長野部隊藤井隊に編入せられ勇躍征途に就いた。而して北支に上陸するや該地方一帯は連日稀有の豪雨に河川は氾濫し道路は泥濘膝を没し我が軍の作戰行動の困難は名狀し難きものがあつた。然かし所屬隊將兵は其等の困難を克服し泥濘飢餓を忍び連日連夜敗殘の敵を掃蕩しつゝ難行軍を続け九月十日には流河鎮を十三日には興濟鎮を占領し二十日涿州に進出して滄州の攻撃を準備した。此の間氏は危険と勞苦を顧みず終始分隊長を輔佐し進んで難局に當り克く其の任を完うした。

斯くして所屬長野部隊は二十一日夜人合庄の敵陣地を夜襲し激戦の上二十二日拂曉之を奪取し續いて二十三日夜滄州主

陣地たる東花園姚官屯の堅陣に夜襲を敢行した。之等敵陣地は長時日を費し堅固に構築せられ其の前面には鐵條網を廻らし深さ二米餘幅數米に及ぶ水濘横はり巧みに側防機關を配置し敵が難攻不落と誇つて居たものである。従つて之が晝間攻撃は至難にして徒らに我が損害を招くのみなる事を考慮し部隊長は竟に夜襲に決したのであつた。斯くて所屬部隊は二十三日午後六時三十分行動を開始した。此の時氏の屬する藤井中隊は部隊の最右翼第一線として東花園に向つて前進した。



當時敵は我が方に向ひ盛に銃砲火を注いで居たが此の時氏は株本一等兵と共に選ばれて敵の第一鐵條網破壊の重任を命ぜられ夜暗敵の猛火を冒して匍匐潛行し遂に鐵條網内に入り鐵線を切断し見事通路を開設した事は一は天佑一は氏等兩人の勇敢機敏なる働き賜物であつた。斯くして中隊は遂に敵の第一鐵條網の線を通過し茲に中隊長小隊長は兩氏が其の重任を果して尙無事なるに涙を流して喜んだのであつた。然かし敵の第二鐵條網は尙前方百米附近にあり兩氏は續いて之が破壊に前進した。此の鐵條網破壊の爲めには部隊長より吉武工兵少尉以下工兵五勇士が派遣せられ兩氏が其の線に到着したる時は二十四日午前三時三十分頃て五勇士が正に爆破した時であつた。氏は之と協力して尙我が部隊の通過を容易ならしむる如く切開きに努めた。敵は我が爆破に其の附近に火力を集中し特に手榴彈の雨を降らし暗夜に其の炸裂の火光は眼も目映ゆきばかりであつた。鐵條網爆破と共に所屬隊は怒濤の如く突撃前進して來た。其の刹那敵の手榴彈破片は氏の後頭部に命中し惜しくも壯烈なる戦死を遂げ吉武少尉以下工兵五勇士も竟に名譽の戦死を遂げた。而して所屬中隊は其の破壊

口より敵陣地に突入し奮戦格闘激戦の後中隊長藤井中尉以下十二氏の勇士を喪ひ二十餘名の重軽傷者を出したが東天白む午前六時頃東花園の敵陣を奪取し續いて殘敵を掃蕩し同日夕滄州をば安全に攻略確保するに至つた。

氏の戦死後北井中隊長代理より遺族に宛てたる書信によれば氏重傷を負ふて倒るゝや頭部の重傷に口既に語る能はざるも口唇を動かさし氣息奄々たる裡に幽かに口中萬歳を唱ふるものゝ如く靜かに瞑目したとの事である。噫氏現役兵として陸軍に身を投ずるや熱心精勵間もなく滿洲に出動し幾多の功績を樹て、叙勳の御沙汰を拜し更に今次事變に出征して偉勳を奏す。就中滄州攻撃に最も至難とする鐵條網破壊の選に預かりし事は如何に中隊長が氏を信賴しありしかを證するものにして此の如き重任は眞に忠勇義烈皇國の爲めには家を忘れ身を捨て、一死奉公の誠に燃ゆる者にして甫めて能くし得る處である。今や聖戦の初期斯かる勇士を喪へるは洵に痛惜の極みである。然かし士の戦場に臨むや元より生還を期せず而かも百戦功なき瓦全を耻づ。氏や北支戰場に在つて僅かに月餘竟に滄州城頭の華と散りしも氏の鐵條網破壊は所屬中隊戦勝の素因を爲したるものにして其の赫々の武勳は皇軍戦史に輝き其の芳名と共に千載に語り傳へられ其英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り遺族に尙も佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 末藤 重

#### 職責遂行の範南苑攻撃に偉勳を奏して殞る

氏は岡山縣赤磐郡佐伯北村の人にして父を千十郎母を秀野と云ひ大正四年三月三十一日生れで未だ獨身であつた。資性

濃厚眞面目にして責任觀念旺盛業の愛敬を受けてゐた。雅の道に達し冠附句昇の俊秀にして冠句春秋社赤磐支社の一員で幾多の作句あり。昭和五年佐伯北尋常高等小學校卒業同年三月青年訓練所の課程を修了し同年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營翌十一年六月第一回に精勳章を附與せられ同年十二月上等兵に進級同日伍長勤務を命ぜられた。學術共に優秀にして上下の信賴厚く下士官志願を勧められたること一再ならずしも都合あつて志願せず同十二年六月善行證書及下

士官適任證書を附與せられて歸休除隊した。在隊間は特に劍術に長じ劍術第一種徽章を附與せられた。



支那事變起るや間もなく應召南雲部隊第三機關銃隊に編入第二小隊第四分隊射手として昭和十二年七月十七日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後當初唐山及天津の警備に任じたりしが七月二十六日風雲急を告げ其の夜列車に依り天津出發北平に向つて前進途中急に行宮に向ふこととなり同日午後十一時黃村驛に下車し南苑攻撃の爲め尖兵中隊たる第九中隊に配屬せられ二十七日午後零時五十分旅團の最先頭に在りて前進を起した。此の日無風にして氣温百四十餘度灼くが如き炎熱を冒し高粱繁る間道を南苑に向つて前進した。途中前方に派遣せる斥候の報告に依り敵は行宮南方高地に陣地を占領しあるを知り尖兵中隊は直ちに展開攻撃を準備した。敵陣地前は丈餘の高梁畑にして深さ胸を没する水濘を以て廻らし重軽機關銃迫撃砲等を配備して堅固に陣地を構築してゐた。氏は攻撃開始と共に敵彈雨下する中を勇敢に射撃陣地に進入し沈着正確なる射撃に依り有効なる射弾を以て敵自動火器を制壓し以て第九中隊の攻撃前進を援助し逐次射撃陣地

を推進して敵に近迫し適時敵の自動火器を求めて制壓し遂に第九中隊が敵陣地に突撃するや機關銃隊は勇敢に前進し其の陣内戦闘に緊密なる協力を爲し以て敵陣地占領を容易ならしめた。

翌二十八日には南苑攻撃の爲め午前四時三十分行動を起し午前八時四十五分戦闘を開始した。氏は終始勇敢機敏に行動し沈着精密なる照準と的確なる観測とに依り精度極めて良好なる射撃を以て敵を制壓しつゝ第一線歩兵の前進に伴ひ敵前百米附近に進出して射撃陣地を占領した。恰も此の時敵陣地の左突角より友軍を猛射しつゝある敵機關銃を發見した氏は直ちに之を分隊長に報告し之と同時に二番銃手と協力して此の敵機關銃制壓に適當有利なる陣地に進出し迅速に射撃を開始した。此の射撃は命中頗る良好之が爲め第一線歩兵は突撃の機会を得遂に突撃を敢行することを得た。然るに敵は我が機關銃目がけて猛射を浴びせ來り無念其の一弾は氏の胸部を貫通し其の場に倒るゝに至つた。然し剛氣の氏は之に屈せず尙も射撃を繼續せんとせしが傷重く身體の自由を失ひ數分の後氣息奄々たる裡に 天皇陛下の萬歳を口にしつゝ竟に午前十一時五十分壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し部隊は氏等の奮戦に依り午後零時三十分さしも頑強に抵抗せる南苑の敵陣地を奪取することを得た。

氏の戦陣に立つや彈雨の下勇敢沈着不屈不撓歩兵の重要火器たる重機關銃の射手として照準正確觀測的確常に命中精度良好なる射撃を以て敵を制壓し其の心膽を奪ひ皇軍機關銃の精銳を發揮して遺憾なかつた。殊に傷くも屈せず射撃を繼續せんとす。實にかくの如きは職責の存するところ身を君國に捧げ斃れて尙も已まざる軍人精神の發露忠誠の顯現と謂ふべきである。開戦間もなく氏の如き忠勇の士を喪ふ痛恨盡きずと雖も士の戦場に臨むや百戦功なき瓦全を愧ぢ一戦玉碎名を遺すに如かず。實に開戦劈頭行宮南苑の一戦に於て傲慢不遜の敵を完膚なく膺懲したる赫々の武勳と職責遂行の示範とは千載の下青史に輝き其の芳名は萬古に流れて盡きぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍工兵伍長勳八等功七級 菅原才助

#### 沈勇寡黙の體手、敵前漕渡に成功せる後職に殉す

氏は鹿兒島縣出水郡出水町の人にして父を山下岩藏母をマツと云ひ明治四十一年十一月二十日に生れ菅原家の養子となり亡養父を末彦養母をルコと稱し妻ツギとの間には未だ愛子は授からなかつた。性寡黙謹嚴にして孝心極めて深く又人に親切にして業務に忠實なりし爲め村民の信頼も厚かつた。大正十年三月出水小學校尋常科を卒業後鍛冶職に弟子入り爾來其の職に精勵し逐年顯著なる進歩を見せて居た。昭和四年一月現役兵として工兵隊へ入營し優良なる成績を挙げ工兵上等兵を以て除隊し其の後家業の傍らに郷軍人分會の役員青年訓練所指導員及消防組長に就任し率先垂範村内公共團體の爲めに盡力して成績を挙げ益々郷黨の敬愛を受くるに至つた。

支那事變起るや昭和十二年九月中旬應召南部隊に屬し勇躍北支戦線へ出征した。北支到着後は幾多の困苦缺乏に堪へ常に志氣潑刺進んで難局に當つて居たが十月六日より約二週間に亘り德州東方地區に於て水路輸送作業に従事し門橋舟長として晝夜兼行克く任務に邁進し以て軍の諸要求を充足した。

十二月十八日より濟南北方に於ける黄河の敵前渡河戦に参加するに至つたが氏の所屬區隊は渡河作業隊長横山中佐の隸下に屬し下流作業隊として同月二十二日午後六時より行動を起した。氏は架橋器材工兵監視隊員として器材の整理及交付を完了せる後第二區隊第三舟船手を命ぜられ第一回より敵前渡河の漕渡に従事する事となつた。茲に於て氏は單舟の組

立及偽装を完了し二十三日午後七時三十分泛水し同八時愈々第一回の漕渡を始め船手として部下特務兵を指導しつゝ對岸に向ひ勇敢に漕ぎ出した。然るに不幸敵前三十米に於て淺瀬に乗り揚げ漕航不能となつた。此の時氏は零下四度の寒冷をも意とせず直ちに河中に跳び込んで必死の働きを以て離礁せしめ速に乘船し腕も折れよと力漕し遂に乘組歩兵部隊を無事に上陸せしめた。氏は次回の部隊を乗船せしむべく將に歸路に就かんとせる時對岸の敵に發見せられ一齊猛烈なる集中射



撃を浴び其の際氏は頸部に貫通銃創を受け「舟は進むか」の一語を遺して壯烈なる戦死を遂げた。上陸せる友軍歩兵は氏の弔合戦と群がる敵を殲滅し茲に戦史上稀有の戦果を収むる基礎を確立することを得た。

氏は現役當時より優秀なる技能を有し且剛膽不敵の氣構を以て上下の信頼を受けて居た。果せる哉氏は第一回の漕手に選拔せられ暗夜を利用して渡河を敢行するに至つたのであつた。氏は戦死の前日任務を受領するや平素の腕前を發揮するは此の時と欣喜雀躍しつゝ戦友と最後の盃を取交はし珍らしくも平素の寡黙を破り打ち興じたとの事であつた。而かも不慣れの特務兵を周到懇篤に指導しつゝ打つて一丸となし至難なる敵前漕渡の目的を完全に遂行した。寔に是れ皇軍工兵の本領を遺憾なく發揮せるものにして一般軍人の龜鑑たる者であつた。あゝ氏や郷にありては一村の模範青年であり軍に従ひては精悍有爲の勇士であつた。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは轉た痛惜を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝き其の芳名は千載に語り傳へられ不滅の英靈は護國の神と祀られ其の神靈は尙も皇國並に

實家及養家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日工兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。



## 兵之部

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 市原初義

## 勇敢なる小銃手、唐官屯附近の戦場に奮戦し戦勝の途を拓く

氏は岡山縣小田郡北木島村の人にして父を明吉母をムラと云ひ大正三年十月二十日に生れ妻直との間には未だ愛子が授けられなかつた。性温厚篤實にして責任觀念に富み交際圓滿にして世人の信用亦厚かつた。昭和二年三月北木島尋常小學校を卒業し其の後は石工職を志して其の道に精勵し其の進歩年と共に顯著であつた。昭和九年一月現役兵として岡山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し歩兵一等兵を以て歸休除隊となつた。歸郷後は依然前職に精勵し選ばれて青年團の幹事となり克く郷黨の青年を誘掖して同團の進歩向上を圖り又消防組第四部消防手として勇敢機敏なる共同動作を垂範し大に其の能力を増進するに至つた。

支那事變起るや間もなく應召赤柴部隊に屬し海野中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。北支到着後所屬隊は降雨泥濘を冒し津浦線に沿ひ南進した。八月二十一日七里堡附近の戦場に於ては氏は所屬分隊長たる淺野兵衛少佐の指揮下に敵情搜索に従事し克く分隊長を輔佐し勇敢機敏に行動して其の任務を完了し翌二十三日は小魏庄二十三日には東窩附近の戦場に參加し其の間天候地形給養の不良を物ともせず常に勇敢に奮闘し二十四日は靜海縣に入城し同地の警備に服した。

同月二十九日所屬小隊は陳官屯方向の敵情搜索の爲め左搜索隊となり午前七時十分先づ東長屯東方に於て鐵道線路を破壊中の敵を猛攻して之を撃破し更に唐官屯驛の敵を驅逐して高宅村附近に進出し敵情を搜索し且其の附近の要點を占領し

て警備に就く等目覺しき活躍を演じたが氏は其の間常に分隊の中堅となり或は率先彈雨を冒して敵に接近し或は正確なる射撃に依り要點の敵を射殺して小隊の任務達成を容易ならしむる等其の貢獻する所頗る大であつた。

所屬部隊は爾後唐官屯附近の既設陣地に據る敵を撃破せんが爲九月三日午後二時頃より行動を起し日没頃敵前數百メートルの攻撃準備位置を占領した。敵は夜間射撃の準備を整へ終夜三方面より小銃機關銃及迫撃砲の猛射を浴びせて來た。此の夜豪雨降り續き將兵は壕内にずぶ濡れとなり寒氣甚だしかつたが氏は克く志氣を鼓舞して工事に従事し翌四日の攻撃開始を待つて居た。翌四日午前八時より我が砲兵隊の第一次突撃支援射撃を開始するや敵の熾烈なる十字の彈雨を物ともせず躍進を續け遂に壯烈なる突撃を敢行して敵陣地の一角を占領し更に戦果を擴張して唐官屯の南端に進出した。敵は氏等の疾風迅雷の猛攻に堪へかね全線瓦解して馬廠河南岸に退却するに至つた。午後六時頃氏の小隊は尖兵を命ぜられ中隊主力の前方向約二百米に在りて王千戸莊方向に向ひ前進中であつたが午後六時二十分頃王千戸莊部落より約二百米の地點に達



せる時突如同村端に敵兵の出沒するを發見し尖兵は直ちに獨力攻撃に移つた。敵の兵力は約三百名にして土壁及散兵壕に據り頑強に抵抗し就中圍壁銃眼に據るチェッコ機關銃の射撃は極めて猛烈にして我が攻撃前進意の如く進捗せず尖兵長は特に氏に命じて此のチェッコ銃眼の敵を狙撃せしめた。氏は熾烈なる敵彈雨下に沈着正確なる狙撃を行ひ僅かに數發にして其の敵火力を大に衰へしめ小隊は此の機を利用して敵前百米に近接するを得た。敵は此の頃より漸次動搖の色を現はし

たが小隊長の突撃號令一下氏は敢然立ち上り胸を没する水中を物ともせず小隊長と共に猛進中一彈飛來無念胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。然れども氏の勇戦に依り中隊一般の志氣を鼓舞し間もなく中隊は王千戸壯の頑敵を撃滅して同村を占領するに至つた。

氏や郷に在りては一家の中堅又郷黨青年の重鎮として良民の實を擧げ出で、軍務に従ふや誠實熱心武技に習熟し將兵一般の信頼を受けて居た。果然聖戦に参加するや沈勇彈雨の下に黙々として自己の職分に邁進し慧眼克く戦機に投合し其の卓越せる射撃成果を發揚して突撃の動機を作り更に勇猛果敢なる行動に依り中隊戦勝の爲め尊き素因を興へた。寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして又一般軍人の模範たる者であつた。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは眞に痛惜に堪へざるも氏の功績は皇軍戦史に輝き其の芳名は後世に誦はれ英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岩 本 巖

#### 忠實勇敢なる通信手、大次花激戦の華と散る、壯烈

氏は鳥取縣東伯郡舍人村の人にして父を彌藏母をいしと云ひ大正三年二月一日に生れ妻すみゑとの間に長男公則を擧げた。性温良着實にして極めて明朗且親切心に富み殊に義務觀念強く世人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月舍人小學校高等科を卒業し更に同村農業補習學校及農業公民學校を卒業し同九年三月青年訓練所課程を修了したが農村青年として稀に

見る模範的人物であつた。翌十年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し通信術修業を命ぜられ熱心勉勵良成績を擧げ翌十一年七月善行證書を附與せられ歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召福榮部隊に屬し部隊通信班に編入せられ勇躍征途に就いた。北支に到着するや直ちに有線電話の通信勤務に服するの外爾後の前進準備の爲め熱誠器材の整理等殆んど休養の暇なく活躍し八月二十五日天津

を出發し獨流鎮附近に進出し同地に於て日夜有線電話勤務に従事し迅速正確其の任務を完了し所屬部隊の行動に寄與する所頗る大であつた。



八月二十九日子牙河々畔の戦闘に於ては敵彈雨飛の中に率先電話線の架設を完了し且活潑なる戦況に伴ひ重要通信を迅速確實に傳達して部隊長の戦闘指揮を容易ならしめ引續き王口鎮大邊舖及東子牙鎮の戦闘に参加した。就中大邊舖並に東子牙鎮の戦闘に於ては第五有線班に屬し第三大隊の展開に伴ひ之と部隊本部間の連絡に任じ戦闘間同大隊本部に位置して終始敵彈下に緊要なる通信を擔當し又同大隊が急速なる前進に移るや熾烈なる敵彈下に勇躍同大隊本部に追隨し危難を冒して延線保線に任ずる等進んで難局に當り以て戦機に適合する通信連絡を確保した。

九月十日東辛庄附近の戦闘に於て第三大隊は大次花の敵陣地を攻撃中所屬第五班は部隊本部と第三大隊本部間の連絡を命ぜられた。此の際氏は部隊本部より同大隊本部間の電話線架設に任じ猛烈なる敵の彈雨を冒しつゝ午前九時同大隊本部

に到着し連絡を完了した。此の頃戦況愈々酷にして通信事項も益々機敏を要するに至つた。氏は克く正確迅速に通信連絡を處理し部隊戦闘に大に貢献したが午前十一時頃突如電話不通となり其原因正に断線に在りと推測された。時恰も敵の逆襲により附近一帯は彌が上にも飛彈の嵐物凄く地上の何ものをも打ちのめさずには置かぬ有様だつた。されど豪膽にして責任觀念に燃ゆる氏は敢然として戦友と共に修理作業の爲め大隊本部より飛び出し部隊本部方向に向ひ疾驅しつゝ點檢を行つた。耳を剪さく敵の迫撃砲彈は或は遠く或は近く氏の身邊に落下炸裂して居た。あゝ無念なるかな第三發目の砲彈は轟然として脚下に爆發し氏は戦友二名と共に爆煙の中に打ち倒れた。豪氣の氏は何を！ と満身に力を罩め起たんとすれば既に全身廿ヶ所に大小の破片を受け就中四肢腹部に致命的の重傷を負ひ再び起つ能はずして後送された。班長原田少尉は駭寄つて氏を見舞ひ且激勵すれば氏は苦しき息の下より「やられました」と述べ任務未了を遺憾とする意を目に物言はせて衛生隊に收容された。惜しいかな手厚き看護も其の甲斐なく翌十一日午後一時五十分竟に北支戦線の華と散つた。

氏や郷に在りては一村の模範青年であり軍に従ひては誠實熱心毫も勞苦を厭はず而かも頭腦明晰にして處理敏活將兵一般の深き信頼を受けて居た。果然聖戰に参加するや泥濘飢渴の難行軍に堪へ目まぐるしき戦況の變化に伴ふ電話線の架設撤收にも率先機敏に任務を完遂して通信網の運用に貢献し又敵彈雨注の下に毅然として正確機敏の通信を全うし以て戦勝獲得に至大なる素因を與へた。而して斃るゝも尙息まざる其の誠忠に至りては唯拜むより外に感謝の言葉もない次第である。あゝ斯かる模範的の精銳なる通信手を喪へるは眞に痛惜に堪へずと雖も氏の功績たるや天晴れ北支戦史に牢記せられ其芳名は永く後世に傳へらるべく斯くて不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 石賀正吉

#### 忠孝兩全の勇士、傳令勤務を全うし大次花の華と散る

氏は鳥取縣米子市朝日町の人にして亡父を簾藏母をフサと云ひ大正四年十二月七日に生れ未だ獨身であつた。資性純眞道義に篤く志操堅確克く孝悌の道を盡し郷黨の模範青年であつた。昭和五年三月米子市角盤高等小學校を卒業し引續き同年十二月迄同校補習科に通學したるも屢々家族の病患に遭ひ竟に中途退學の已むなきに至り爾後は一家の柱石として刻苦精勵家計を支持する傍ら青年訓練所に通學し常に優秀なる成績を擧げて居た。徴兵適齡に達するや父の勸めに依り籤外志願を願出で昭和十二年一月松江歩兵聯隊へ入營し一意専心軍務に精勵し休日には父の教訓のまゝに常に陸軍墓地に參詣して至誠奉公を誓ひ又自己の給料を割きて國防献金となす等其の篤行は戦友等に深き感激を與へた。更に入營後幾何もなく父は病勢重りたるも臨終の際正吉には妻を秘せよと遺言して長逝したるが氏は涙を吞み父の意を體して私事の爲めに公務を疎かにする能はずとて歸郷を願出でず上官の勸めに依り休暇を許可せられたるも葬送を終るや否や歸隊し孜々として軍務に精勵し時の聯隊長より表彰せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月福榮部隊に屬し永島中隊の第一小隊長傳令として勇躍征途に就いた。北支到着後は泥濘險惡なる難路行軍を續け七里堡獨流鎮を経て八月下旬子河々畔に進出した。其の間所屬中隊は砲兵第二大隊の掩護隊となり或は獨流鎮の敵陣地を撃破したが氏は勞苦を意とせず猛烈なる敵弾をも懼れず常に小隊長の身邊に在りて傳令勤務を完うし以て小隊の任務遂行を容易ならしめた。

八月二十九日二堡附近敵陣地の攻撃準備に方りては支隊本隊内に在りて徹宵警戒勤務に服し又將校斥候要員として大膽

機敏に行動し敵情地形を搜索して斥候長を輔佐し翌々三十一日王口鎮の攻撃に参加するや敵彈雨飛の下に傳令勤務に服し克く其の任務を完うし同攻撃を容易ならしめた。

九月三日東子牙鎮の攻撃に際して當初所屬小隊は左側衛として行動し次で中隊主力に合するや尖兵中隊として前進し薄暮東子牙鎮部落の一角を占領し翌四日完全に之を奪取するに至つたが氏は其の間敵前至近の距離に於て正確機敏に命令報告の傳達に任じ又徹宵警戒勤務に服し或は率先迅速に部落内の頑敵を剿滅する等衆兵の模範として將兵の信頼を博し五日西子牙鎮の戦

闘には中隊豫備隊として之に参加した。



九月十日東辛莊附近の敵陣地を攻撃するや所屬部隊は先づ大次花の敵陣地を攻撃すべき任務を受けた。敵は大劉王村東辛莊の線を主陣地となし大次花張次花の線に其の警戒陣地を設け彼此の陣地相連して堅壘を成し陣地前には氾濫地帯を設け皇軍の攻撃前進は容易ならざるものがあつた。所屬中隊は午前三時行動を起し午前六時三十分より戦闘を開始した。氏等は膝を没する出水地帯而かも敵彈雨飛の中を勇猛果敢に前進し敵前二百米の線に近迫した。此の時所屬中隊長は氏の所屬小隊を現在地に止めて敵陣地を猛射せしめ中隊主力の前進を容易ならしむべく命じた。茲に於て第一小隊長は更に小隊内の第五分隊長に特別命令を與へんが爲め氏に傳達を命じた。氏は勇躍敵陣を冒し之を第五分隊長に傳達し再び小隊長の許に歸へんとする刹那不幸左胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は氏の尊き犠牲に依り中隊長の意圖を如く戦闘を續け午前八時遂に大次

花の堅壘を占領するを得た。

氏は父の高邁なる精神を繼承し又軍隊教育に依り益々之を玉成し至誠一貫爲めに將兵一同の深き愛敬を受けて居た。果然聖戦に臨むや泥濘高粱の障碍も不眠不休の疲労も將た又敵の熾烈なる十字火も眼中になく全身全靈を打ち込んで任務に邁進し戦勝の一途に尊き礎石となつた。是れ寔に亡父の意思に副ひ而して同時に忠孝兩全の道を完遂せるものであつた。斯かる誠忠至孝の士を褒へるは轉た痛歎哀悼の情を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ其の神靈や尙も皇國を護り一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 六本木清作

### 大隊傳令、敵の逆襲に對し寡兵奮戦大隊本部の危急を救ふ

氏は群馬縣勢多郡宮城村の人にして父を勝司母をたけと云ひ大正四年八月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚誠實責任觀念旺盛にして大事に臨みては勇敢剛膽であつた。昭和三年三月宮城尋常高等小學校を卒業し同十一年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや森田部隊第二大隊に屬し大隊本部傳令として昭和十二年八月勇躍征途に就いた。而して北支戦線に到着し九月十三、十四日には永定河附近十五、十六日は拒馬河畔望海庄附近十七日は平漢線東側地區東西管頭附近の戦闘に参加し彈雨の下大隊本部と中隊との間戦場を駆け廻りて大隊長の命令意圖の傳達に任じ克く其任を完うし大隊長の戦闘指導

を容易ならしめた。

九月十八日平溪線西側地區澤畔店附近の戦闘に際しては大隊は澤畔店の敵に對し其東南方に進出して敵の退路に迫り攻撃すべく迂回行動を爲し午後一時稍過ぎ所期の地點に進出することを得た。此時氏は大隊長より大隊豫備隊たる第六中隊に對し豫備隊は鐵道線路方向の敵に對し警戒しつゝ第一線左中隊たる第七中隊の後方を前進すべき旨の命令傳達を命ぜられた。然るに此頃敵彈は一層熾烈となりしかば氏は戰友二名と共に猛火の下を或は疾驅し或は匍匐して第六中隊の位置に到達し確實に大隊命令を傳達し直ちに歸途に就きしに其途中午後一時三十分俄然鐵道線路方向より敵の歩兵約百五十名勇敢に第六中隊に向ひ逆襲し來つた。第六中隊は大隊命令を受けたる直後にして此方面の敵を警戒しつゝ前進中なりしを以て素より此事あるは豫期せる所直ちに之を迎へ撃ち有利なる戦闘を交へて此敵に多大の損害を與へ殆んど殲滅することを得た。然るに此敵の一部約五十名は後方我が大隊本部の手薄なるに乘じ勇敢に襲撃し來れるを以て氏は同行の戰友二名と共に直ちに之に向ひ猛射を加へて先づ大隊本部に急報すると同時に暫く沈着正確なる射撃を加へて敵の前進を阻みしも敵は優勢を恃みて益々大隊本部に近迫し猶豫すべからざる危急を痛感した。乃ち氏は他の二名と共に剛膽にも敢然立ちて突進し敵前近くに於て手榴彈を投擲して敵を震駭せしめし所敵は氏等三名に付て突進し來り氏等は早や之迄なりと決然銃劍を揮つて勇猛果敢之に突入り敵を刺殺すること四名かくして奮戦格闘中無念至近距離より狙撃せられて頭部に貫通銃劍



を蒙り氏は竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然かし大隊本部は氏等の奮戦により無事なるを得又大隊は益々敵を猛攻し午後七時三十分さしにも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏選ばれて大隊傳令となるや毎戦勇敢重き使命を負ふて戦線を馳驅し大中隊間の連絡に任じ大隊長の掌握及戦闘指導を容易ならしめ以て大隊の戦力を遺憾なく發揮せしめた。殊に澤畔店に於て敵の逆襲を受け大隊本部危急と見るや寡兵克く衆敵に向ひ勇敢剛膽奮戦格闘大敵たりとも懼れざりし行爲は眞に鬼神をも哭かしむるものがあつた。かくの如きは大隊本部の傳令たる重責の存する所身命を君國に捧げて死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露にして眞に軍人の鑑とも謂ふべきである。噫氏征戦幾何もなく北支の華と散りしは洵に痛惜の極みであるが然かし氏の赫々たる武勳は千載の下皇軍戦史に輝き勇敢なる傳令として其芳名は後世に誦はれ其英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し又其兩親一族を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 花淵福太郎

### 勇敢なる小銃手、敵の奇襲に應戦奮闘玉碎す

氏は宮城縣宮城郡鹽釜町字赤濱の人にして父を朝吉亡母をせよと稱し大正七年一月二十二日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和六年三月鹽釜町立尋常高等小學校尋常科を卒業し同八年四月笠神農業補習學校に入學同十年三月同校二ヶ年修業成績優良の故を以て同校より賞状褒状並に賞品を授與された。資性温厚にして父母に孝養怠りなく兄弟に順に弟妹を勞は

り又友情に厚く常に上下の愛敬を受けて居たばかりでなく責任感に燃え苟も自己の仕事に對しては眞面目に努力して遂げずんば息まざる特長を持つて居た。



昭和十二年一月現役兵として仙臺歩兵聯隊に入營し同年四月所屬隊と共に滿洲に派遣せられ爾後哈爾濱附近の警備に任じて居た。斯くて七月十日を以て一等兵に進級したのであつたが時恰も支那事變勃發し翌八月に至り氏は酒井部隊に屬せられ北支方面の征途に就いた。而して八月十四日より二十二日迄居源附近の警備に當り同二十二日より二十六日に亘る頭道河子附近の戰鬪に於ては増援隊として參加し専ら殘敵の掃蕩に任じ二十六日獨石口に入城次で八月二十七日より九月一日に亘りては張家口及宣化附近の敗敵掃蕩及警備勤務に服し九月二日より四日に掛けての永嘉堡附近の戰鬪には或は將校斥候或は下士斥候に加はり危険と困苦を冒して敵情搜索に奮勵有利なる報告を齎らし五日より七日に亘る天鎮附近の戰鬪に際しては第三小隊第三分隊に在りて勇猛果敢に攻撃遂に敵陣を奪取し爾後該地の守備に任じ八日、九日陽高縣城附近の戰鬪に於ては八日尖兵に屬して前進午後三時敵と衝突之を攻撃し同四時陽高驛を占領更に翌九日午前零時三十分敵を夜襲し拂曉完全に陽高城を占領したのであつた。續いて十日、十一日聚樂堡附近の戰鬪に當りて氏の所屬中隊は支隊豫備隊となり此間氏は斥候として敵情偵察に任じ勇敢且熱心に其任務を全うし我が第一線が遂に敵陣地を攻略するや氏の所屬隊は敵を追撃し多大の損害を與へた。次いで十四日より十六日に亘り大同附近の警備に任じ又十七日より十九日まで本田騎

兵部隊直接支援中隊に屬し松樹溝東南高地に陣地を構築し中隊の任務達成に寄與する所大なるものが在つた。更に又二十日より三十日までの大營鎮附近の戰鬪に於ては第一線死傷者の收容護送に任じたる上十月一日よりは原平鎮に向つて前進し六日より原平鎮附近の攻撃に參加し十二日には敵を追撃して南線に達した。此間氏は殆ど不眠不休の努力を續け克く其の任務を全うした。斯くて愈々十月十三日より十四日に至る水油落附近の戰鬪には中隊長中屋敷中尉の指揮する第一線中隊の指揮班に屬し十四日午前六日攻撃を開始したが暫らくして戰鬪交綏状態に入つた。然るに午前十一時頃敵の一部約三十名は地形を利用して潛行突如我が中隊の本部を襲撃して來た。中隊長以下少數の指揮班員は憤然之に對し猛射を加へ氏は機敏にも戦友小野一等兵、庄司一等兵と共に巧に地形を利用して側方より敵に猛烈なる射撃を加へた。敵は之が爲に多大の損害を受け其攻撃は頓挫し竟に其一部は逃げ腰となつたが此時敵の一砲弾は氏の頭上に炸裂し氏は數ヶ所に其破片創を受け仆れたるも忽ち起つて再び射撃せんとするや不幸にも更に敵の一弾は再び頭上に炸裂して重傷を受け倒れた。而して後ち繃帯所に收容され手當を受けたるも同日午後二時半終に華北の華と散つたのである。

氏や眞摯實直大敵たりとも懼れず小敵たりとも侮らず苟も職責の存する所全心力を傾倒して寸毫の油斷あるなし。かの突如たる敵襲に對しても逸早く勇敢適切なる判断決意に出で猛烈なる側斜を加へ敵の企圖を破碎したるが如き行動は實に武人の龜鑑たるのみならず其功績正に拔群と謂ふべし。

噫氏の肉體は今大聖戰の貴き犠牲として亡びたるも其の英靈や不滅に生き護國の神として東亞の天地を和平に導くと共に其の一家をも守りて遺族の將來に多幸多榮を致すであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西尾 榮 治

## 勇敢なる機關銃彈薬手、猛火の下再度彈薬を補充して竟に斃る

氏は鳥取縣鳥取市湯所町の人にして母をたけと云ひ明治四十一年十二月二十五日に生れ妻満壽子との間に保男三雄の二男兒を擧げた。資性温順寡黙實行力に富み責任念旺盛にして事に臨み勇敢であつた。又人に對しては親切にして近隣の風評頗る良好であつた。大正十年三月鳥取市久松尋常小學校を卒業其後専ら家に在つて母を扶け農業に従事し昭和四年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營熱心軍務に勉勵し翌五年十一月除隊爾後一意農業に従事し傍ら選ばれて久松青年團幹事として同團の會計主任を勤め郷黨の爲活躍し團員の信望を集めてゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊第二機關銃中隊に編入第一小隊第二分隊彈薬手として同月十日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月二十一日午後四時より二十二日午前九時に至る人合庄の攻撃及二十三日午後六時より二十四日午前七時に亘る姚官屯の攻撃に際しては所屬分隊は中隊主力の位置にありて戰鬪に参加し或る時は水深胸部に達する數條の水濠を超え或る時は猛烈なる敵彈の爲彈薬の補充頗る困難なる状況下に氏は勇敢に活躍して彈薬補充の任を完うし我が機關銃の威力を遺憾なく發揮せしめて滄州攻略に貢獻せし所多大であつた。次で所屬中隊は德州附近の敵陣地攻撃の爲九月二十七日捷地(地名)を出發せしがそれより十月二日紀家店に達するまで急速なる追撃を實施した。此間惡路に遭遇し馬匹愛護の爲屢々重き彈薬箱の卸下搬送を行ひ將兵の疲勞困憊其の極に達せしが氏は不屈不撓凡有辛酸を克服し而かも己を後にし馬匹を愛護し以て中隊の急追を容易ならしめた。

十月三日長野部隊の主力德州南方に迂回するに當り之が掩護の爲所屬大隊は午前六時より德州城に向ひ攻撃前進を起し

た。此の時氏の屬する機關銃第一小隊は先づ父馬營附近に陣地を占領して大隊の前進を援護し其後逐次陣地を推進して大隊の攻撃援助に努めた敵は丈餘の城壁に據り其北方階段斜面に無數のトーチカを築き鐵條網及水濠を繞らし堅固に防備してゐた。而して我軍の攻撃前進に應じ城壁上より猛烈なる射撃を浴せ來り爲に大隊の前進は頗る困難の状況となり我機關銃亦之を制壓すべく猛烈なる射撃を實施せる爲其彈薬も忽ちにして射耗するに至つた。此時氏は彈薬補充の命を受くるや



當時立つ者悉く撃たると云ふも過言にあらざる程敵の銃砲火は猛烈であつたが氏は死生を顧みず勇躍して其の敵彈火を一進一止躍進し遂に父馬營に在る彈薬小隊の位置に到り直ちに充實せる重き彈薬箱を背負ひて再び彈雨の間斷を縫ふて躍進し幸にも無事銃側に達して射撃の繼續に支障ならしめた。然かし打續く激戦に此の補充彈薬も亦忽ち射盡せんとするに至り再び之が補充の命令を受くるや勇敢にも復た又前回の如く死生の巷を躍進して再び父馬營に到り彈薬を充實し勇躍しつゝ急霰の如き敵彈を冒して歸途に就いた。此の時氏の分隊は陣地を德州西北六百米附近の小堆土の所に推進せしが氏は巧に地形と敵射撃の間斷を利用し幸に微傷だも負はず將に其彈薬箱を銃側に置かんとする刹那無念城壁西北隅の銃眼より狙撃せられて頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏は實に歩兵の重要火器たる機關銃の射撃に緊要缺くべからざる彈薬手を命ぜられ其の戦陣に立つや不屈不撓彈雨の下勇敢死生の巷に往復して銃側の彈薬を充實し激戦に皇軍機關銃の威力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは機

關銃射手と不可分關係にある彈藥手たる重責の存する所唯々彈藥の充實に全力を傾倒し身命を君國に捧げ斃れて後己まんとする盡忠至誠の發露に外ならずと謂ふべきである。斯る勇士を征戰中途而かも眼前に迫れる徳州の落城を見ずして散らしめし事は痛恨に堪へざる次第である。然かし氏の戰責遂行の示範と拔群の武功は赫々として千載の下皇軍戰史に輝き其英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も出でては皇國を守護すると共に入りては一家の守護神ともなり愛兒の遺志繼承を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西垣 紀 典

志願して鐵條網破壊班に加はり其の重任を果たす

氏は兵庫縣城崎郡香住村の人にして父を新造母をひろと云ひ大正四年十一月四日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實業務に熱心にして且物事に几帳面の人であつた。昭和四年三月香住尋常高等小學校高等科一學年を修業し其の後家業に精勵し豆腐賣子として正直者の名高く町内一般より豆腐屋紀典として信用あり且讃へられてゐた。昭和十二年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營し爾來致々として軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや長野部隊第四中隊に屬し第一小隊小銃兵として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三日より滄州附近の戰闘開始せらるゝや姚庄子魏庄子李家婁及人合庄の各戰闘に参加し九月二十三日には敵の堅陣東花園を攻撃した。此日の氏の中隊は午後六時三十分より南部人合庄と堤防との間を攻撃前進した折柄敵彈雨飛の中を意

とせず逐次前進して堤防に到着し尙も前進するや敵の第一線鐵條網に達着した。依つて小隊は鐵條網破壊班を編成するや氏は自ら進んで其の一員たらんことを志願し願叶つて之に加はり勇躍して前進鐵條網に迫つた。然るに掩蓋銃座及對岸よりする敵の射撃は頗る熾烈を極はめしも氏は他の班員と共に勇敢に鐵條網を以て強行破壊作業に従事し幸にも微傷だに負はず完全に任務を果たし突撃路を開設し以て小隊の突入を遂行せしめた。而して小隊が鐵條網を通過して敵陣に突入する

や敵の抵抗頗る頑強なりしが爲め其處に激烈なる戰闘は展開せられ爾後の前進頗る困難の狀態に陥つた。然かし氏はかくの如き状況下にも不屈不撓率先勇敢に行動し敵の第四掩蓋銃座奪取の爲め友軍戰車に跟随して進み敵の銃座に肉薄するや突撃の爲め敢然戰車の後方より將に躍り出でんとしたる其の瞬間無念頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや誠實商人の範として讃へられ其の戰陣に臨むや勇猛剛膽只管小銃兵たる本分に邁進し遺憾なかつた。殊に鐵條網の破壊は決死至難の行動たるに拘はらず進んで其の班に加はり遂に其の重任を完うし小隊の攻撃を容易ならしめた。かくの如き決死の行動は是れ一念盡忠至誠の致す所眞に軍人の範とすべきである。氏聖戰中途にして斃れしも其の拔群の武功は赫々として千載に亘り皇軍戰史に輝き芳名は萬世に傳へられ其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護するであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。





## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 西川龍一

## 中隊長と共に德州城に一番乗りして竟に玉碎す

氏は兵庫縣宍粟郡城下村の人にして父を甚助母をかつよと云ひ大正五年三月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實而かも反面勇敢進取の氣象に富み幼より軍事を好んでゐた。郷里の小學校卒業後補習學校に學び其の後家に在りて両親を扶け熱心家業に従事してゐた。昭和十二年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し成績優秀志願の上下士官候補者に採用せられ其の教育を受けて居た。

支那事變起るや長野部隊第四中隊に編入せられ山口小隊長の傳令として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後姚庄子魏庄子李家婁附近及人合庄の各戰團に参加し引續き東花園の攻撃開始せらるゝや小隊は中隊の攻撃に最も危害を與へつゝありし掩蓋機關銃の奪取を命ぜられ夜間猛火の下之に突入して占領し中隊の攻撃を容易ならしめた。此の間氏は彈雨の下克く小隊長を輔佐して積極的に活躍し小隊をして赫々の戰果を收めしめた。

九月二十七日德縣附近の戰團開始せられ山口少尉中隊長代理となるや氏は中隊指揮班員として爾後の戰團に参加した。而して十月四日所屬中隊は午前十一時德州城攻撃の爲め行動を起した。德州城は城壁の高さ丈餘に及び城壁上には堅固に陣地を設備し其の周圍には無數の鐵條網と水を深く湛へたる水濠を繞らし小銃機關銃迫撃砲等多數を配備し我が攻撃に備へてゐた。中隊は此の城壁突角の占領を命ぜられ隊長以下悲壯の決意を固め必勝を期して攻撃を開始した。敵は其の配備せる各種火器を擧げて猛射を浴びせ來り必死の抵抗を試みた。我れ亦猛火の下勇敢に躍進又躍進力攻を繼續し遂に城壁間近かに肉薄して突撃準備に着手することを得た。此の間氏は雨下する敵彈の下危険を冒して戰線を駆け廻り中隊長の命令



意圖の傳達に活躍し動もすれば杜絶せんとする中小隊間の連絡を確保し中隊長の戰團指揮を容易ならしめた。而して中隊が此の線まで迫るや敵彈は益々烈しく最早時の遲延を許さず茲に中隊は愈々決死隊を編成して此の突角を一氣に奪取するに決し鶴首して突撃路の開設を待った。應て友軍砲兵の城壁に對する破壊射撃に依り辛うじて這ひ上れる程度の突撃路開設せらるゝや氏は先頭に進みし山口中隊長と共に決死隊に伍して水濠を越え鐵條網を突破し絶間なく城壁上より投擲せる

手榴彈の中を而かも丈餘の城壁を攀ち登り幸にも頂上に達することを得た。敵は我が勇敢なる行動に狼狽して四散し城内は敗敵雲集の有様であつた。氏は機を逸せず眼下の敵に射撃を加へ次いで後続分小隊との連絡に任せし利那無念頭部に數發のチェツコ機關銃彈を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。時に午後六時であつた。然し中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲とにより應て城内を掃蕩し翌二十五日午前十時完全に德州を占領した。

氏や待望の軍人となり今次偶々時運に際會し、而かも選ばれて傳令となるや彈雨の下死生を顧みず常に重き使命を帯びて勇敢活躍、中小隊長の戰團指揮を容易にし其の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に德州城々壁奪取に際しては決死隊に伍して勇戰奮闘其の壯烈鬼神をも哭かしむるものがあつた。實にかくの如きは身命を君國に捧げ萬死に一生をも希はず斃れて後已まんとする盡忠至誠の發露と謂ふべきである。聖戦中途氏の如き良傳令を喪ひしは痛惜盡きざるも其の拔群の武功は良兵良民の示範なると共に千載に亘りて皇軍戦史に輝き英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又一家の守

護神ともなり遺族に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 星 長 雄

#### 小隊長に肉迫する頑敵を斃し其危急を救ふ

氏は北海道紋別郡瀧川村の人にして父を清助母をみさをと云ひ大正四年七月十二日生れで未だ獨身であつた。資性温厚志操堅確責任觀念旺盛にして郷黨の模範青年として信頼されて居た。昭和三年三月札久留小學校を卒業し爾後家に在つて兩親を助け弟妹を勞はりつゝ農業に従事し昭和十一年一月現役兵として旭川歩兵聯隊に入營したが入營後は熱心精勵服務誠實にして六ヶ月の後精勵章を附與せられた。氏は同年五月聯隊の一部要員と共に支那駐屯歩兵聯隊に派遣せられ北支に到着後は同聯隊第八中隊に編入せられ遼州附近の警備に任じて居た。

支那事變勃發するや間もなく品部部隊に屬し永松中隊の小銃手として七月十四日夜部隊主力と共に天津附近を出發して通州に向つた。折柄灼熱する炎天下而かも豪雨後の泥濘路を没する惡路を五日間に亘る強行軍を續くる中に氏は尖兵となり或は歩哨勤務に服して十八日通州に到着した。當時通州の形勢は極めて險惡にして將兵一同異常の緊張裡に至嚴の警戒に任じて居た。

七月二十七日に至り所屬部隊は上司の指示に依り同地駐屯の支那第二十九軍獨立第三十九旅の一營に對し武装解除を要求したが更に應ずるの模様なき爲め機先を制し斷乎之を攻撃するに決した。敵の駐屯せる東兵營なるものは大なる廟にし

て外廓は周圍約七百米に亘り高さ四、五米の壁を以て廻らされ其の内部にも周壁あり之等の周壁には銃眼を三段に設け各凸角には悉く機關銃を配置して側防し得る如き頗る堅固の防禦陣地編成であつたのみならず周壁の外側には幅約七米深さ二米の凹道があり宛かも外壕を形成し而かも附近一帯は高粱畑となつて居たのであつた。

所屬中隊は配屬機關銃小隊と共に二十七日朝第一線中隊として展開を完了し氏は中隊の右第一線小隊の火線分隊員とし



て午前八時攻撃前進を起し巧みに密生繁茂せる高粱畑に遮蔽して敵前二百米に近接した。之より益々隱密行動に移り午前九時周壁前二十米に達した。而して茲に突撃準備を完了するや間もなく中隊は敢然突撃を決行した。此の時敵は狼狽しつゝも手榴彈小銃機關銃の猛射を浴びせ來り忽ち變はる凄慘の巷、氏は之を意とせず小隊長及分隊長等と共に率先周壁の破壊口より竊しぐらに敵陣地に突入し分隊の約半數が突入せる頃周壁掩蓋内に残存しありし敵兵三名は窮鼠猫を囓むの勢を以て小隊にも青龍刀を振擧して我が小隊に肉薄し來つたが我が數發の射撃を受け其の二名は素早く掩蓋内に逃げ込んだ。

残りの一名は健氣にも尙肉薄し來り小隊長山口中尉を目懸けて躍りかゝつて來た。氏等は協力して此の敵に一撃を加へたが之に屈せざる敵は眞先に進んだる氏の頭上を目がけて斬撃せんとする一剎那氏は何を！と一步前進鎧迄通れと渾身の力を罩め彼の腹部を刺突すれば流石の頑敵も血煙立てゝ打ち斃れた。斯くて中隊は敵の第一線陣地を奪取し更に第二線陣地たる家屋内の敵に對し突撃を準備し氏は右翼輕機陣地に近く位置して家屋内の敵を狙撃し忽ち其の數名を斃したが憎く

や此の時飛來せる敵の一弾は氏の兩脚下腿部を貫通し出血多量の爲め見る／＼顔色蒼白に變つた。されど氏は更に怯まず「何ツ之しき」と依然射撃を續けて更に一、二名を斃した。小隊長は氏の重傷を氣遣ひ再三命令して午前九時三十分頃漸く戦線を退かしめた。爾後陸軍病院に收容されて手厚き治療を受けたが同月三十日午前七時三十分惜しくも北支の華と散つた。氏は生來至誠純忠の人軍隊教育に依り愈々操志を鞏くし武技亦習熟し上官並に战友等の愛敬を受けて居た。宜なる哉氏の戦場に臨むや至近の距離より敵彈雨注するも神色自若として率先敵陣地に突入して奮戦力闘し又小隊長に肉薄する頑敵を斃して其の危急を救ひ身重傷を負ふも尙射撃を續けし如きや。此の如きは洵に是れ軍人の龜鑑とすべきである。あゝ聖戰幾何もなく前途有爲の士を喪ふ痛恨の極みである。然かし氏の赫々たる武勳は燦として皇軍戦史に異彩を放ち其の芳名は千載に誦はれ不滅の英魂は護國の神と崇められ神靈永へに皇國並に一家一門の前途に加護佑助を垂るゝであらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 飛澤義男

十數倍の敵より包圍せらるゝも尙死闘を續け雲邸郊外に玉碎す

氏は秋田縣仙北郡六郷町の人にして父を重藏母をよきと云ひ明治四十四年五月三十一日に生れ未だ獨身であつた。資性快活剛膽にして幼時は相當腕白であつたが孝心深く又兄弟思ひで長ずるに従ひ病身の兄を勞はり其死後も懇ろに世話をなし又兩親を初め弟妹の爲粉骨碎身孝悌の道を盡して居た。氏は又義務心厚く氣概に富み難局に處するも不屈不撓の氣魄を堅持して居た。大正十五年三月大邸府公立高等小學校を卒業し其後は三年間に亘り理髮職の助手を勤め更に轉職して自動

車運轉手となり克く業務に精勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召大高部隊に屬し矢島中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。北支到着後降雨泥濘の悪路と闘ひつゝ豊臺沙河鎮昌平縣間に活躍し更に南口に進出し屢々敵の襲撃を受け又附近敵兵の屍臭甚だしき中を物ともせず晝夜兼行第一線諸部隊へ糧秣彈藥を補給し同方面の戦闘遂行を容易ならしめた。



所屬中隊は更に靈邱方面に移動し九月二十四日夜直接第一線部隊に協力すべき特別任務を受け中隊長以下勇躍守地に就いた。あくれば二十五日夜來の豪雨晴れ渡り朝陽大行山嶺に照り映へて一入身に泌む寒冷を覺えた。當時第一線の戦況は急迫を告げ所屬中隊は至急後方に歸還して新銃の歩兵部隊を戦線に輸送すべき命令を受け午前九時出發其任に就いたが午前九時十五分頃前夜來の豪雨を冒し我が軍の後方地區たる靈邱の南方二軒小寨子附近に進出しありし敵約一箇旅と遭遇し中隊は全員を擧げて約十倍の敵軍と交戦するに至つた。氏は此際第三小隊第十五分隊の自衛隊の一員として左側方臺上

に散開し戦闘中敵の機關銃が間近に潜伏しあるを發見し栗原分隊長と共に奮然挺身し抵抗する敵を殲ぎ倒して之を占領せる瞬間敵の有力なる逆襲を受け其際飛來せる一弾の爲頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘は死闘實に四時間の久しきに亘つたが氏等の尊き奮戦に依り寡兵克く敵の重圍を破砕し以て戦線の後方にありし砲兵段列及諸隊の大小行李を安全ならしむるを得た。

氏の絶筆となりし弟宛通信の一節には「家の生活はどうして居るか。お前の身體も良くなかつたが氣をつけて大切にしておくれよ。近所の人や町會、國防婦人會の人々などへ宜しく。此邊は今東京の十月頃の氣候で夜などはとても寒い。御身大切に！ 左様なら氣をつけて」と多忙の寸暇を割いて切々家族の生活や弟妹の身の上を案じ又戰友よりの來信に依れば「飛澤さんは豪傑肌の人で敵弾がびしびし飛んで来る中で千人針の手拭の向ふ鉢巻で鼻唄がけで働いておました。戰死した時は穴の中へ落ちて居た爲捜がしても中々わからずそれ丈に敵兵にも判らず隊内では一番美しい死に方をして居ました」とあつた。以上二通の手紙の中に氏の特性が推測出來やうと思ふ。あゝ氏や數十年來北支に稀れなる降雨泥濘の中に幾辛酸を克服して志氣益々旺盛戰友を激勵して共に部隊の重任遂行に献身的努力を捧げ又目に餘る大軍の來襲にも毅然として自己の職分に死力を盡し遂に尊き人柱となつた。あゝ一家の柱石にして而かも義勇奉公に奉ぜし氏の生涯こそ正に是れ軍民の鑑であつた。斯る忠孝義烈の士を喪へるは眞に哀悼を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられて其芳名を後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 外山喜一

### 忠勇なる通信手、彈雨の下斷線を補修し江陰要塞の華と散る

氏は神奈川縣愛甲郡小鮎村の人にして父を團三亡母をワキ養母をトミと云ひ明治四十四年八月十日に生れ未だ獨身であ

つた。資性温良着實にして事に當るや熱心勸勵特に責任觀念に富み郷黨の模範青年として風評誠に良好であつた。大正十五年三月愛甲高等小學校を卒業し其後は家庭に在りて専ら農業に従事してゐた。昭和七年一月徵兵として横須賀重砲兵聯隊に入營し爾來軍務に精勵在隊中精勳章を附與せられ翌八年十一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年七月應召獨立攻城重砲兵今田部隊に編入せられ觀測小隊通信手として同月二十八日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月中旬には房山附近の戰闘に又十月上旬には正定附近の戰闘に参加して其敏腕を發揮し更に中支に轉進し十一月中旬には常熟附近の戰闘に参加し放列陣地と觀測所或は氣球陣地との間の電話線の構成及之が保線に任じ戰闘間不眠不休の活動を續け其通話に些の支障をも生ぜしめず中隊長の戰闘指揮に多大なる便益を與へた。

十一月二十八日より江陰要塞の攻撃開始せるに至つたが江陰要塞は揚子江右岸に北面して構築され揚子江防衛の最大關門を爲すと共に南京防禦の戰略線として重要價値を持つて居た。されば江岸には黄山東山西山鷲山の四砲臺が口を揃へて後面をも睥睨すると共に城南の花山完山の山岳を利用して堅固なる背面防備が出来て居た。斯かる堅壘の攻撃に參與せる氏等の所屬中隊の任務たるや極めて重大であつたのである。所屬中隊は當日雷家村に放列を布き其前進觀測所を秦皇山に設置した。氏は此際觀測所と放列間長距離に亘る電話通信網構成に任じ危險を意とせず所望時に作業を完了し午後四時二十分より中隊の射撃を開始するや更に敵の彈雨を冒し疲勞を顧みず之が保線に



従事して中隊の戦闘威力を最高處に發揚せしめた。次で十月三十日友軍が花山占領と同時に此處に觀測所を前進せしめ放列陣地の六橋北方二軒無名部落に變換せらるゝや再び遠距離而かも山地の觀測所放列通信網の構成に任じ克く其任務を完うし中隊の射撃指揮に多大の貢獻を爲した。爾後六橋北方二軒放列陣地基點通信手として又觀放間の保線手として熱心服務中十二月一日午後五時三十分頃中隊が黄山の敵砲臺を射撃中電話線不通となるや當時敵砲臺に放列陣地附近に集中落下しつゝあるに拘はらず氏は其危険を顧みず直ちに率先挺身保線の爲出發し彈雨の下之に屈せず逐次線路を點檢中放列後方約二百米の地點に於て斷線箇所を發見し直ちに之が補修を爲し通話を回復し中隊戰鬥の繼續に至大なる貢獻を與へたが此時身邊に敵砲彈落下炸裂し其破片を胸部及左膝關節等に受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏や郷黨の模範青年たり出でて戰線に立ち重砲兵の命脈たる通信の重任を負ふや彈雨の下勇敢機敏戰機に投合して架設保線を完うし中隊をして適時堅壘を粉碎せしめて遺憾なかつた。殊に江陰砲擊間斷線に當り死地に身を挺して機を失せず補修せる如きは實に其職責の存する所身命を君國に捧げ一死を鴻毛の輕きに致して任務に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべく眞に通信兵の鑑とすべきである征戰中途惜くも江南に散りしと雖も北支中支に於ける幾多の堅陣を粉碎するに方り貢獻せる氏が拔群の武功は其旺盛なる責任觀念と共に天晴れ皇軍戰史に輝き芳名を後世に傳ふべく英魂亦不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國及實家並に養家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 珍 坂 榮

#### 人合庄の激戰に彈藥補充の重任を果たし優勢なる敵の逆襲を撃退す

氏は兵庫縣養父郡八鹿町の人にして父を長一母をふんと云ひ大正二年二月十四日に生れ未だ獨身であつた。性温良活潑にして責任觀念に富み孝心極めて厚く而かも事に臨みては剛毅果斷であつた。昭和二年三月郷里の高等小學校を卒業し其後は同縣豊岡町石田書店に勤務し入營時に及んだ。同八年一月現役隊として鳥取歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を挙げ同年十二月には滿洲派遣部隊に屬し滿洲小城子方面の警備に就き翌九年四月交代の爲内地歸還上等兵候補者として特別教育を受けて居たが銃劍術試合中左腿骨々折にて入院加療し翌十年十月善行證書を附與せられ除隊となり歸郷後は文具店を開業して居た。在營間精勵章を受くる事四回に及び又滿洲警備の功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた。支那事變起るや昭和十二年七月應召長野部隊に屬し森岡中隊の輕機關銃分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。北支到着後は降雨泥濘の難行軍を續け津浦線に沿ひ南進し三堡王口鎮大激鎗の敵を撃破し九月七日馬廠主陣地の北方地區に進出した。

九月十日所屬部隊は丁莊附近の敵陣地を攻撃したが同陣地附近の地形は繁茂せる高粱畑が涯てしもなく打撃き部隊間の連絡は極めて困難であつた。敵は我接近を察知して銃砲彈を雨霰と盲射し來り高粱を薙ぎ倒す音は異様に凄味を帯び身邊常に彈雨に曝されて居た。此時氏は進んで比隣分隊との連絡確保に任じ又愈々敵と戰鬪を交ふるに至るや適切機敏に彈藥を銃側に補給し以て輕機關銃分隊の卓越せる威力を發揮せしめ中隊戰勝の一素因を與へた。

九月二十一日所屬中隊は滄州の敵陣地帯内に於ける一堅壘たりし人合庄の陣地を夜襲すべき任務を受け日夜を待ち攻撃

前進を開始した。敵は人合庄北方部落に警戒陣地を設け又人合庄の陣地直前には幅約四米深約二米の水壕及鐵條網をめぐらし頑強に抵抗を試みたが氏は克く敵弾下に分隊長の指揮に従ひ進んで小隊長及隣接分隊長との連絡を確保し以て夜暗の接敵行動を容易ならしめ午後十一時中隊主力が將に人合庄西北角に突入せんとする頃分隊長負傷したるも分隊長代理を輔佐し克く他兵と協同して輕機關銃の威力を遺憾なく發揮して中隊突撃の動機を作為し以て其奪取を容易ならしめた。然るに敵は午後十一時四十分及午前一時の二回に亘り所屬中隊を包圍して猛射を集中し次で逆襲して來た。此時所屬分隊の銃彈藥も缺乏に瀕せるを見たる氏は決然小銃分隊に赴き彈藥の融通を乞ひ又戦死傷者の彈藥を蒐集して彈藥の補充に任じ以て緊要無二の時機に輕機關銃の威力を最高度に發揮して敵に多大なる損害を與へ遂に所屬中隊の危急を脱せしめ同陣地を確保せしめた。あゝ無念なるかな氏は



此際敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。氏郷に在るや一家の爲には一粒種の嗣子で克く孝養を盡し快活眞摯諸人の愛敬を受けて居た。又出でゝ軍に従ふや上下の厚き信頼を受け義には滿洲事變に参加して警備の重任を果たし今次聖戰に参加するや幾多の苦難を克服しつゝ戰友を激勵し愈々難局に遭遇するや必勝を期し死力を竭して所屬中隊の戦勝獲得に尊き礎石となつた。寔に是れ皇軍歩兵の本領を發揮し一般軍人の模範たるものであつた。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは眞に痛惜哀悼に堪へざるも氏の累次の功績たるや天晴れ皇軍の戦史に輝き其芳名は後世に誦はるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守り又一家の守護神として遺族の

前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 忽滑谷藤吉

#### 決死宛平縣城の城壁に一番乗りし突撃路を拓く

氏は埼玉縣入間郡南古谷村の人にして父を豊太郎母をヨシと云ひ大正五年六月七日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚着實にして孝心深く又弟妹にやさしく近隣の幼兒を集めては愉快に話し遊ばしむる事を樂しみとして居た。氏は又報國の丹心燃ゆるが如く事に處するや不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和六年三月南古谷小學校高等科を卒業し其の後上京して泉名益三帽子店に弟子入りし熱心精勵主人の信用厚く偶々歸郷の場合には必らず心盡しの土産を持參して兩親及び弟妹を喜ばして居た。昭和十二年三月北支駐屯歩兵聯隊へ入營したが氏は徴兵検査合格となるや特に海外部隊を志願しありし際とて大に喜び一意専心報國の心に燃えつゝ郷里を出發したのであつた。

同年七月突如駐屯の北支に事變起るや氏は安達部隊三重野中隊の輕機關銃手として直ちに出動した。氏は出動命令に接するや「思ひ残す事もないが皆様も仲よく暮らして下さい自分は輕機二番です死すとも悔はないですが寫眞を撮つたからお送りします」と家族へ通信した。

斯くて神速機敏に各地に轉戦し克く輕機關銃の威力を發揚し所屬部隊をして所期の目的を達成せしめたが七月二十八日南苑附近の總攻撃に移るや所屬中隊は大隊の右第一線となり氏は中隊の左第一線小隊に屬し南苑の西北角に向ひ攻撃前進

し午前九時頃萬字地十字路西方約二百米附近に達するや南苑西北端の既設陣地及家屋内の守兵より俄然猛烈なる射撃を受けた。氏は此の際狙撃兵として獨斷敵の幹部を狙撃し續いて正確なる火力を發揚して敵を壓倒し以て突撃の動機を作り愈々所屬小隊の突撃に方りては勇敢にも陣頭に立ちて前面の家屋内に突入し守兵を掃蕩して之を占領し所屬隊の戰勝獲得に重要な素因を與へた。



翌二十九日宛平縣城の攻撃に於ては中隊は所屬大隊の右突撃隊となつたが友軍砲兵の城壁破壊射撃の開始と共に其の掩護下に一文字山南山鐵道の線を出發し敵の猛射を意とせず同城々壁の東方約二百五十米の獨立家屋の線に進出して攻撃準備を整へ友軍砲兵の射撃成果を待つて居た。午後七時二十分砲兵の射程延伸と共に敵の彈雨を冒し一舉東北角に肉薄したるも城壁は高さ二十米に達し且壁厚も大なりし爲め砲兵の城壁破壊は未だ十分ならずして攀登意の如くならず梯子を併用して城壁に登らんとしたが城壁上の敵は手榴彈及び煉瓦片を切りに投擲して頑強に抵抗し攀登愈々困難となつた。此の時氏は中隊の左第一線小隊第二分隊長の指揮下に在つたが梯子上に更に人梯を作らしめ自ら之を乗り越えて城壁上に一番乗りを爲し時を移さず中央望樓の敵に向ひ奮進し將に一敵を刺殺せんとする一刹那敵の投げつけたる手榴彈の爲め門部に爆創を受け壯烈なる戰死を遂げた。所屬隊は氏の勇敢適切なる行動に刺戟せられ續いて城壁に攀登し午後七時五十分遂に城壁の東北角を占領之を確保し同夜々襲を以て城内の敵を掃蕩し午後八時五十分西門を占領するに至つた。

氏や郷に在りては濃厚篤實の孝子たり出でて軍に従ふや至誠一貫唯々 聖旨を奉戴して高邁なる品性を涵養し又軍務に精勵して優秀なる成績を擧げた。果然聖戰に参加するや輕機關銃手の要職を課せられて其の任務を完全に遂行し愈々上官戰友の信頼を高め遂に宛平縣城攻撃の難局に縫着し殆んど城壁攀登の手段に困惑するに至るや「生きて歸らぬ覺悟です皆さん丈夫で」と豫て家郷に通信せる文言の如く萬死と必勝とを期して突撃路を開拓した。あゝ何ぞそれ決意の悲壯にして其の行動の壯烈なるや。其の心境たるや正に是れ神とも謂ふべきである。今や氏が壯容に接すべくもなく痛惜極まりなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝き其の名は櫻花と其の芳を競ひ英靈亦護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大江 時 忠

#### 正莊の堅壘に突入直前重傷を負ふも尙奮闘し戰勝の途を拓く

氏は鳥取縣東伯郡山守村の人にして父を友一母をますと云ひ大正三年三月二十四日に生れ未だ獨身であつた。性濃厚篤實にして孝心深く又事に當るや熱誠眞摯遂げずんば息まざるの氣概があつた。昭和三年三月山守小學校高等科を卒業し續いて同村立農業補習學校に入學し同六年三月同校卒業其の後は家庭に在りて兩親を扶け農業に精勵して居たが同十年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し翌十一年七月歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召福榮部隊に屬し第四中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。北支到着後は降雨泥濘

の難行軍を続け八月二十五日より津浦沿線を南進し大郝庄附近の戦闘には大小行李の掩護及その他の警戒勤務に就き孫門口附近に於ては敗殘兵を掃蕩して其の後同地の警備に任じ燒密盆の激戦に於ては第一線火線分隊員として正確機敏なる射撃に依り頑敵を壓倒し更に熾烈なる彈雨を冒して敵陣地に突入し大に中隊戦闘に貢献した。



九月中旬馬廠附近戦闘に於ては馬廠河右岸地區の殘敵を掃蕩し其後更に滄縣の堅壘を攻撃する爲め右搜索隊の一員として参加し剛膽慧敏に活躍して貴重なる情報を提出し尙牛新庄附近の敵を攻撃するに方りては率先勇敢に攻撃前進し敵彈雨飛の下に果敢なる突入を行ひ敵を潰亂敗走せしめた。十月初旬には德縣に向ひ敵を追撃し所在に出沒する敗敵を撃破驅逐しつゝ前進を続け又晝夜に亘る警戒勤務に従事し常に分隊の中堅として上下の信頼厚かつた。德縣附近に於て大敗せる敵は一時德縣と平原の中間に介する一要衝黄河涯口附近に於て抵抗したが皇軍の猛攻に抗しかね竟に平原一帯の既設陣地内に遁入し守兵と合して頑強なる抵抗を企圖するに至つた。所屬大隊は十月十三日平原城の西方約六百米に在る正莊の堅壘を北方より攻撃すべき任務を受け同日午後四時三十分より行動を起した。所屬中隊は大隊の第一線となり氏は第一線小隊の火線分隊員として勇猛果敢に攻撃前進を続けた。正莊の敵陣地たるや高さ一丈餘の土壁を利用して銃眼を設け部落の周圍には水濠を設け且二重に鐵條網を張りまはしたる堅固なる陣地にして平原陣地帯中の一鎖鑰をなして居た。敵は我が第一線部隊の近迫するに従ひ逐次猛烈なる火力を以て防戦に努めたが勇敢なる氏は克く分隊の中堅となり分隊長を輔佐

して前進を誘起し遂に突撃陣地に取りついた。茲に於て氏は更に有効適切に敵の銃眼を狙撃して守兵に多大の損害を與へ突撃の號令一下するや率先水濠に飛び込み更に鐵條網を乗越えんとし敵前三十米に接近した。此の時無念なるかな左下腿に貫通銃創を受け打ち倒れたが豪氣の氏は之に屈せず我が突撃を最も妨害しありし敵機關銃を目掛けて猛射を浴びせ以て中隊の突撃を容易ならしめた。中隊は氏等の勇戦死闘に依りさしもの堅壘正莊を奪取し午後九時之を完全に占領した。氏は出血多量の爲め悼ましくも午後十時頃友軍の戦勝に微笑を浮べ從容として戦場の華と散つた。

氏や至誠温厚の人而かも一度び銃を執り戦線に起つや勇猛果敢寔に聖旨に副ひ奉り得る眞の武勇者であつた。あゝ津浦戦線を突破する事正に百里に垂々とし其の間降雨泥濘飢渴を克服し而かも不眠不休の大活躍をなして重責を全うし竟に正莊の一戦には斃れても尙息まず所屬中隊戦勝の爲めに死闘を續けて敵機關銃を制壓した。其の忠誠勇武は正に軍人の龜鑑たるものであつた。斯かる有爲精悍の士を喪へるは痛悼哀惜の情を禁じ得ずと雖も氏が聖戰参加以來累次の功績たるや天晴れ津浦線戦史に牢記せられ芳名は後世に誦はるべく又不滅の忠魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大日方萬作

彈雨の中上官の危急を救ひ且第一線に奮闘中保定城外に玉碎す(兄弟三人出征)

氏は長野縣下水内郡常盤村の人にして父を彌作母をひめと云ひ大正五年四月十一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤



實にして孝心深く且責任觀念に富み不屈不撓遂げずんば息まざるの氣概を有し村内の模範青年として信望極めて厚かつた。氏は常に何事も眞剣となれば出来ぬ事はないと言ひ如何なる苦難があらうとも黙々として業務に邁進し氏の生前を偲ぶ人々の心に深き感銘を與へて居る。昭和六年三月郷里の高等小學校を卒業し又同八年三月には實業補習學校を卒業、其の後直ちに青年訓練所に入所し同十一年三月所定の課程を修了し翌十二年一月現役兵として松本歩兵聯隊へ入營機關銃中隊に編入せられ良成績を擧げて居た。



支那事變起るや間もなく温井部隊に屬せられ楯機關銃中隊の三番銃手として勇躍征途に就いた。北支豊台驛に下車後は三日間に亘り喰ふに食なく大平野の泥中を踏破して永定河々畔に進出し永定河々畔の敵陣地を突破後は更に急追撃に移つたが行けども行けども沼澤濕地の連續にて馬は倒れ車輪は地中にめり込むと云ふ難行軍に加へ糧食の給養至難にて附近の芋茄子藁の實に辛うじて空腹を癒しつゝ氏は疲労困憊の身をも厭はず黙々として鞍馬を扶け車の後を押し一歩も部隊に遅れじと努力する有様は實に衆の模範として幹部战友の感歎する所であつた。斯くて九月十六日には南台子に於て同二十三日には大劉莊の戰闘に勇敢機敏なる行動に依り所命陣地に進入し機を失せず目標を確認して有效適切なる猛射を加へ以て第一線部隊の爲め突撃の好機を與へ部隊戰勝の素因を作つた。

翌二十四日には名にし負ふ保定城を攻撃する爲め午前六時三十分行動を起した。敵は城壁を利用する外其の北側平地にも堅固なる塹壕を設け之に多數の輕重機關銃を配置し猛烈なる火力を以て我が攻撃前進を阻止した。氏の所屬中隊は勇躍敵前至近の位置に向ひ躍進中突如所屬小隊長は敵彈の爲め大腿部に貫通銃創を受け打ち倒れた。所屬分隊長は部下をして小隊長の收容を命じたが敵彈雨飛動かば必死の状況にして遺憾乍ら皆躊躇して居た。此の時氏は敢然小隊長の許に走り寄り安全地帯に運び込んだが其の豪膽機敏なる行動には誰一人として敬服せぬ者はなかつた。氏は其の後直ちに分隊に復歸し尙も前進の途中四番銃手たる船越上等兵は高粱にて目を負傷するや氏は之に代りて射手となり右前方の掩蓋機關銃に對し射撃中無念なるかな敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。然かし所屬隊は氏等の尊き犠牲に依り交戦約二時間即ち午前九時五十分には保定陣地を奪取するを得た。

氏や郷に在りては良民の鑑たり出で、軍務に従ふや熱心誠實中隊の模範兵であつた。果然聖戦に参加するや重要銃手を命課せられ率先幾多の艱難辛苦に堪へて志氣益々旺盛風の如き敵火の下上官の危急を救ひ又射手の重任を命ぜられ將に盤根錯節に其の利刀を試みんとする一刹那惜しくも玉碎した。あゝ氏が參戰以來無言の裡に捧げたる不眠不休の其の努力又慘烈なる戦況下に活躍せる其の尊き犠牲に是れ軍人の本分を完遂して缺くる處もなかつた。斯かる忠烈の士を喪へるは痛惜禁じ得ざる所にして病院に收容せられたる所屬小隊長は分隊長より氏の散華を傳へ聞き暗然として呉れ呉れも氏の遺族へ詳報を頼むと黙禱を捧げた。今や氏の温顔壯容に接すべくもないが氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に牢記せられて其の芳名を留むべく其の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小田部 稔

## 重傷を負ひ尙射彈觀測をなさんとせる擲彈筒班員、兄に抱かれつゝ散華す

氏は茨城縣西茨城郡笠間町の人にして父を清藏母をきくと云ひ大正五年一月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性剛毅にして眞摯又誠實人に交はり友人間より厚き信望を得て居つた。昭和三年三月郷里の小學校を卒業後直ちに商業學校に入學勲勵中であつたが家事の都合に依り中途退學し其後は家庭に在りて父母を扶け商業に精勵して居た。昭和十二年一月現役兵として水戸歩兵聯隊へ入營し上等兵候補者として選拔を受け克く軍務に精勵して居たが特に射撃及び銃劍術の成績は優秀にして直屬上官より賞状を附與せられた。

支那事變起るや同十二年八月石黒部隊に屬し飯田中隊擲彈筒班彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月十日永定河北岸地區に進出し所屬中隊は河岸の直接監視部隊として胡家舖に位置し氏は所屬中隊の直接警戒或は永定河の右渡河點に於ける下士哨勤務等に服務し同月十四日所屬部隊が同河南岸の北相各莊の敵陣地を攻撃するに至るや所屬中隊は大隊の第一線中隊となり敵彈雨飛の中に敵前渡河を敢行し更に疾風迅雷の勢を以て敵陣地に突入し全兵團の一番乗りをなし驍名を走せた。氏は其間擲彈筒分隊第一筒班に屬し勇敢機敏に行動し中隊の攻撃前進並に突撃に妨害を加ふる敵の自動火器を制壓し中隊戦闘に寄與する所大であつた。

所屬部隊は敗退せる敵を急追し翌十五日之を拒馬河畔に壓迫した。敵は拒馬河の障礙を利用し其南岸に堅固なる陣地を設け且優勢なる兵力を以て我が軍の半渡を猛射し殊に我が軍が對岸に取りつくや否や果敢なる逆襲を反復したる爲南岸堤防附近に於ける我が軍は死傷續出するに至つた。氏は中隊の右第一線小隊に屬し率先勇敢に渡河し渡河後は右側警戒の特

別任務に服し以上の如き苦境に起ちつゝ能く其任務を全うした。

九月十五日北相附近の激戦に敗退せる敵は松林店附近の既設陣地に遁入し所屬部隊は之を撃破せんが爲十六日午前九時四十分行動を起し氏の中隊は右側衛の尖兵中隊として前進し午前九時五十分頃白莊に達せしが白莊の部落圍壁より俄然敵の猛射を受けた。中隊長は中隊の全擲彈筒を集めて此圍壁に據る敵を制壓させた。此附近一帯の地形は栗畑にして高姿勢



をとるにあらざれば射撃不可能であり殊に其射彈觀測は立姿に依る外方法もなかつた。斯かる情況下に氏は第一筒班の彈藥手として沈着豪膽に射彈觀測に任じ之に依り射彈は逐次有効に修正せられ敵を全く制壓し第一線小隊の突撃を成功せしむるに至り午前十時十分白莊の頑敵を驅逐して之を占領するを得た。然るに惜いかな本戦闘間敵陣地の右端より飛來せし一彈の爲氏は下腹部に貫通銃創を受け其場に打倒れた。併し氣丈の氏は尙も觀測を續けんと起ち上つたが力及ばず後送された。中隊長は同一部隊で出征中の實兄平三郎上等兵を呼び寄せつゝ「小田部！ 兄さんが来るぞ。わかるか兄さんが来るんだ！ 小田部！」と聲を絞つて呼びかけた。其聲通じてか今迄喰ひしばつて居た齒も解かれ「兄さんが」と杜切々々

れて口から漏れた。やがて兄上等兵が駆けつけて「稔わかたか！ お前の仇は屹度打てやるぞ安心してゆけ。骨は兄が持つて歸へる！ 稔」と呼べば氏は靜かに目を開きて兄を見つめ「天皇陛下萬歲」とかすかにも唱へ終り從容として戰場の華と散つた。時に同日午後八時頃であつた。

氏の一家は長兄祐二次兄平三郎と共に三兄弟が今次聖戦に出征せる名譽の家庭である。氏や平素より責任觀念強く誠意軍務に精勵し上官戰友の深き信頼を受けて居た。果然選ばれて擲彈筒班の一員となり戰場に臨むや勇猛果敢熾烈なる敵の彈雨を物とせず克く擲彈筒の威力を發揚し以て所屬中隊戰勝の端緒を開き斃れても尙職責に邁進せんとする旺盛なる攻撃精神は天晴れ軍人の模範となすべきものであつた。不幸聖戦の中途にして此勇士を喪へるは痛惜の情に堪へざるも氏の功績たるや北支戰史に牢記せられ芳名永く後世に傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小川 又次

兄は滿洲事變に戰死し弟は拒馬河畔に奮戰小隊長と共に玉碎す

氏は栃木縣芳賀郡清原村の人にして父は喜一郎母はハツと云ひ大正五年三月十日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして上長に對し服従心厚く事に臨みては敢爲にして負けぬ氣の人であつた。青年團の幹部に推され殊に運動競技に嗜味深く郡青年競技に一等賞を贏ちたることもあり青年團運動部長として特に活躍してゐた。又人命救助により昭和八年時の縣知事より賞狀及金一封を授けられた事もある。昭和五年三月清原尋常高等小學校を卒業し其後宇都宮市に出て尾張屋呉服店の店員となりしも二ヶ年にして歸郷し家業たる農業に従事しつゝ昭和七年四月より清原青年訓練所に入所し同十一年三月同所の課程を修了した。而して昭和十二年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營輕機關銃及通信術の教育を受け精勵格

勳同年七月一等兵に進級した。

支那事變起るや坂西部隊第三中隊に屬し第三小隊第一分隊輕機關銃射手として昭和十二年八月二十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後家郷に送れる書面に「間もなく中央軍二十萬に對し決戦を挑むのです。既に砲聲は殷々と聞えてゐます」とあり文簡なるも血湧き肉躍り一死奮戦の時機到來を待ちつゝありし氏が當時の心境を窺はるゝのである。斯くて九月十三、十四日檢査嶺南方永定河の戰鬪に際して中隊は聯隊の豫備隊として軍旗の守護に服し又戰場掃除隊として尊き戰死傷者の搜索收容に任じ雄心を押へつゝ第一線の後方に跟随した。



十月十五日揚家屯附近拒馬河の渡河戰開始せらるゝや中隊は部隊主力の渡河掩護に任ずべき命を受けた。此の時氏は中隊の中間小隊内にありて午後二時より行動を起し勇躍待望の第一線に立ち雨下する敵彈の下勇敢機敏に陣地を選定し沈着正確なる射撃を以て我渡河を妨害する對岸の敵自動火器を逐次制壓し以て部隊主力の渡河を容易ならしめ總て中隊も亦渡河し其の夜當面の敵に對し夜襲の命を受

け行動を起すや氏は八方より飛來する敵彈の中を意とすることなく小隊長と共に勇進し途中敵の監視兵を發見するや先づ之を刺殺し引續き敵陣地に肉薄し其突入に當りては先頭に立ちて小隊長と共に敵の第一線陣地に躍り込み當るを幸ひ敵を突き破りつゝ亂戦格闘して敵陣内を敢爲前進中第二線陣地より射撃を受け左肘部に貫通銃創を受けしが之に屈することなく尙も勇を鼓して前進を續行中再び敵彈頭部を貫通し「やられた後を頼みます」の一語を遺して小隊長と共に竟に壯烈な

る戦死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏等の勇戦奮闘により十六日午前七時遂に頑強に抵抗せる敵陣地を奪取することを得た。

因に氏の父は氏の戦死の報に接するや「又次は元氣者で勇躍征途に就きましたから定めし最期は見事でしたらう」と悲しみを包みて只管我が子の輝しき武勳を確信してゐた。而して氏の一家は兄幸平氏も亦曩に滿洲事變に錦州に於て航空兵軍曹として名譽の戦死を遂げたる實に譽れの家門である。

氏は實に三兒を國家に捧げて尙唯々姉々の武勳を思ふ父の子として其の戦陣に立つや素より一死奉公の覺悟。其意氣其忠誠の迸る所彈雨の下常に率先或は沈着有效なる射撃となり或は傷つくも屈せず奮戦格闘となり而かも死の直前後を頼むの一言實に是れ敵を粉碎せざればやまさる皇軍精神の發露と謂ふべきである。斯の如き忠勇の士を聖戦の初期に喪ひしは洵に痛恨に堪へないが嚴父期待の如く一戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は百戦功なき瓦全に優る。其赫々の芳名は萬世不朽皇軍戦史に輝き其英魂は不滅に生き護報の神となり神靈尙も興亞の前途を守護し又其の兩親一家の上に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小川 隆 市

#### 連絡勤務中逆襲を受け敵數名を斃し行宮の華と散る

氏は兵庫縣安栗郡神戸村の人にして父を多市母をはるのと云ひ大正三年三月十日に生れ未だ獨身であつた。性温厚にし

て義務心厚く父母に事へて孝養を盡くし人に交はり克く親切にして諸人の愛敬を受けて居た。大正十五年三月神戸村立尋常小學校を卒業後は家庭に在つて家業に精勵して居た。昭和十年十二月現役兵として龍山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し喇叭手候補者として教育を受けた。

支那事變起るや間もなく南雲部隊に屬し馬場中隊の指揮班喇叭手として勇躍北支へ出動した。所屬部兵は先づ急遽北寧

線唐山に到り同地方の警備に任じて居たが情勢逐次悪化するに及び七月二十日北平に到着し至嚴なる警戒裡に爾後の情勢に備へて居た。七月二十七日に至り所屬部隊は遂に南苑南方約四軒にある行宮の敵陣地を攻撃するに至つた。

當時敵は主力を以て南苑の一部を以て行宮附近に位置し防禦態勢を整へ而かも抗日意識に燃えつゝ傲岸不遜の態度を示して居た。而して行宮附近を占領せる敵は同地の高地を中心として堅固なる既設陣地に據り極端なる抗日教育と相俟ち巧に便衣隊を操縦して頑強なる抵抗を試みたのである。



二十七日は天氣晴朗にして全く無風酷熱正に百二十餘度に達したが所屬部隊は連日の不眠不休と給養の不良且地形の錯雜とに依り戦力發揚に尠からざる障碍を受けた。然れども氏は之等困難なる状況下に於て克く自己の重任を自覺し志氣益々旺盛勇躍攻撃の時期を待つて居た。所屬部隊は午後零時五十分より行動を起し午後二時三十分より愈々行宮附近の敵陣地を攻撃する事となり氏の所屬中隊は大隊の右第一線となりて展開したが所屬中隊長は大隊命令に基き第一小隊をして敵

陣地の左翼を包圍攻撃する如く部署した。氏は中隊長と第一小隊長の連絡を確保すべき任務を受けたが附近の地形は高梁繁茂して通視全く不能であり畑中の往復も至大なる困難を伴ひ剩さへ我が攻撃前進の進捗と共に中隊主力は敵の防禦火網の重要部に向ひし爲熾烈なる敵の銃砲彈を浴びせられ又第一小隊との離隔は漸次其度を増し益々以て連絡の困難を加へたのである。氏は萬難を排して中小隊長間の連絡確保に努めて居たが午後三時五十分頃敵前約三百米に於て右側背より約三百名の敵襲を發見し之を中隊長及第一小隊長に報告せんとする刹那既に輕装せる一群の敵兵は早くも咫尺の地に肉迫し來りし爲今は之迄と第一小隊第三分隊と共に勇躍敵中に突入して忽ち其四五名を刺殺し更に前進せんとするや下腹部に貫通銃創を受けた。然かし氣丈の氏は更に一敵を斃し續く一名を刺殺せんとする折柄右側方より飛來せる敵彈二發を胸部に受け終に壯烈なる戦死を遂げた。然かし所屬中隊は氏の機宜に適する行動に依り速に此逆襲部隊を撃退して危機を免かれ午後七時には行宮一帯の敵陣地を占領し之を確保するを得た。

氏や夙に報國の丹心燃ゆるが如く體力氣力群を抜き一隊將兵の厚き信頼を受けて居た。聖戦に参加するや降雨泥濘を意とせず不眠不休の疲労を克服し常に正確機敏に傳令勤務を遂行し以て中隊指揮班の活躍に貢獻した。而して行宮の一戰特に至難なる連絡勤務に服し能く他の連絡兵と協力して中隊主力と遠隔せる第一小隊との連絡確保中圖らずも有力なる敵襲に遇ひ竟に其職に殉じて武人の面目を全うした。あゝ斯かる忠勇の士を早くも聖戦の初期に喪へるは眞に痛惜の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや所屬中隊の危急を救ひ又傲岸不遜の敵膽を塞からしめたるものにして天晴れ皇軍戦史に牢記せらるべきものである。夫れ士の戦場に臨むや百戦功なき瓦全を耻づ。氏の如きは早く現世を終へたりと雖も茲に永世不死の生命に生くるものと謂ふべく忠魂永く護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小河原丈助

#### 優秀なる小銃兵、外長城戦に奮闘し竟に壯烈地雷に爆死す

氏は埼玉縣北葛飾郡吉田村の人にして父を藤太郎母をなみと云ひ大正五年一月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順眞摯而かも勝氣にして業務に熱心であつた。昭和五年三月吉田小學校高等科を卒業引續き吉田公民學校後期一年に入り二年を以て同校後期を卒業し其の後は家庭に在りて父母の業務を手傳ひ傍ら青年訓練所に入所し同十一年三月改稱せられたる青年學校を卒業した。昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯爾來内務教練に精勵しつゝ警備の重任に就いてゐた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第二小隊第一分隊小銃兵として昭和十二年七月末勇躍北支戰線に到着した。當時寸暇を割き認めたる兩親宛の書面中に「軍人の本分を盡す覺悟で御座います僕の事は心配せず一家一同強健にて農業にお勤み下さい云々」と内心に深く期する所あると共に盡きせぬ温情を罩め書き送つたが圖らずも之が絶筆となつた。所屬隊は八月中旬まで天津附近の掃蕩戰に従事し更に急速内蒙古張北附近に移動し同地の警備に任じた。此の間氏は不眠不休緊張裡に熱心精勵克く其の任を完うし八月十八日には野口將校斥候の一員となり長城北方四杆狼火溝大紅溝附近の敵情地形の偵察に赴き此の時も氏は危険を冒して敵に近接し陣地の狀況及地形を觀察し適時貴重なる資料を提供し以て斥候長の任務達成に寄與せし所甚大であつた。

八月二十日所屬部隊は外長城線附近に進出せる敵を攻撃した。此の時所屬中隊は張北南方長城線に據れる敵に對し午前八時より行動を起し午後二時展開第一第二小隊を第一線とし先づ(ニ)の火點に對し攻撃を開始した。氏は右第一線小隊の右火線分隊内にありて攻撃前進を起し終始勇敢に行動し此の火點の敵を驅逐し以て主陣地線上(ハ)のトーチカ陣地に對し攻撃を起すや敵は猛烈なる射撃を浴びせ來りしも之を物ともせず克く分隊長の指揮に従ひ沈着正確なる射撃を以て敵



を制壓し其の前進に當りては率先勇敢に躍進を續け逐次敵に近接中右側前方より自動火器を有する敵の攻撃を受け爲めに小隊の前進愈々困難となりしも勇敢に前進逐次敵に近接肉薄し午後七時二十分(ハ)火點に對し突撃命令下るや驟然突入奮戦格闘の後遂に該火點を奪取した。然るに長城線南側トーチカに據れる敵は小銃機關銃を亂射し尙も頑強なる抵抗を續けたるにより中隊は第二第三小隊を第一線とし引續き之を攻撃した。所屬小隊は夕闇暗き谷を越え逐次敵に肉薄し午後八時稍々過ぎ敵前三十米の稜線に進出し敵の猛射を意とせず第一線奪取の餘勢を以て一齊に突入此の陣地を奪取し數十名の敵を撃退した。此の間氏は銃剣を揮つて勇敢に突入し數名を刺殺し又逃ぐる敵を射殺する等其の活躍は實に目覚ましきものがあつた。然るに敵は該トーチカ恢復の爲め數次に亘り逆襲し來りしが氏は分隊長战友と共に其の都度勇戦奮闘之を撃退し遂に該トーチカを確保した。總て小隊は更に前方一軒家の敵を掃蕩することとなり敵火を滑りて之に據れる數名の敵を驅逐し午後九時頃該家屋を占領せしが敵の設置せる集團地雷爆發し無念小隊長始め战友十名と共に竟に壯烈なる戦死を

遂ぐるに至つた。

氏の戦陣に立つや彈雨の下剛膽機敏或は斥候となりて有利の資料を齎らし或は第一線となりて毎發有効の射撃を爲し或は果敢なる突入を決行して敵を殲せるが如き唯々兵の本分に邁進して遺憾なかつた。かくの如きは是れ氏が出陣に當り身命を君國に捧げ一死以て其の本分を完うせんと決意せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。氏や緒戦に於て内蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て皇軍の精銳を發揮し開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載の下皇軍戦史に輝き又其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 遲 澤 章

中隊指揮班員として活躍惜しくも拒馬河畔に散る

氏は栃木縣那須郡親園村の人にして父を武母をイチと云ひ大正七年四月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順而かも負けぬ氣の人にして不屈不撓稀に見る精勤努力家であつた。昭和六年三月親園公民學校に入校し昭和八年同校を卒業した。在校中は球技の主將として他校との試合には必らず出場し優勝せざれば已まざるを常とした。又克く勉勵し各科目の成績特に顯著の故を以て努力賞を授けられ本科三年に於ては級長に推され最上級生徒として全校に範を垂れて居た。其の卒業に當りては尋常一年より公民學校に至る九ヶ年の長きに亘り一日の缺席もなく精勤者として破格の表彰状を受けた。公民學校卒業後は引續き栃木縣立矢板農學校に入り優秀の成績を擧げて居たが家事の都合により二年修業の後退學し

東京市日本橋區茅場町株式會社正西社に入社し昭和十二年一月現役志願兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し其の成績又優秀にして下士官志願を爲し四月より下士官教育隊に入り六月には一等兵に進級し十二月には仙臺教導學校に入校の豫定であつた。

支那事變起るや坂西部隊第五中隊に屬せられ中隊指揮班員として昭和十二年八月二十六日勇躍征途に就いた。其の出陣に當り弟妹に對し「再び歸らぬ故御前達はよく父母に孝養を怠るな」と別れを告げて出發した。北支戰線到着後九月十四日永定河々畔胡林南方地區の戰鬪に於て中隊は大隊の左第一線渡河部隊として堅固なる敵陣地に對し渡河攻撃を實施した。此の時氏は霰の如く飛び来る敵彈の中を駈け廻り積極熱心克く活躍して中小隊間の連絡を確保し以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

引續き九月十五日拒馬河々畔北相附近の戰鬪に際しては中隊は右第一線として渡河攻撃せしが此の際氏は彈雨の下熱心積極的に中隊長と第一線小隊との連絡に任じ中隊長の命令意圖を第一線小隊長に傳達し以て小隊をして中隊長の意の如く行動せしめ第一線小隊渡河に引續き第二線渡河部隊として中隊長と共に乗船せんとせし利那情しくも右側方より敵機關銃の側射を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。



氏は初年兵なるに拘はらず選ばれて中隊指揮班員の重任に服せしは以て如何に氏の性格力量が立派であり優れて居たかと察せらるゝ次第である。果せるかな其の戦陣に立つや素より生還を期せず父母に對する孝養は多數の兄弟に托し聊かも

後顧の憂なく彈雨の下勇躍重き使命を帯びて戦線を馳驅し一意決死敢分に邁進し中隊の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。然るに聖戦日ならずしてかゝる忠勇の士を喪ふ長恨盡きざるも死生命あり其の名は盡くるなし氏や念願の軍人となり偶々時運に際會し其の一死活躍したる赫々の武勳は千載に亘りて皇軍戦史に輝き其の芳名は萬古不朽に語り傳へて鑑となり不滅の英魂は護國の神と祀られて靖國の神域に神鎮まり神靈尙も皇國の鴻業及兩親の多幸を守護して息まぬであらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 岡野 徳 治

### 機關銃陣地に突入匪賊と格闘竟に白刃に散華す

氏は東京府西多摩郡多西村の人にして父を初五郎と云ひ母は既に歿し大正五年六月十四日の生れで未だ獨身であつた。資性温厚にして潑刺たる氣概を有し品行方正家業に熱心であつた。昭和四年三月多西尋常高等小學校を卒業し昭和十二年三月徴兵として獨立守備歩兵第三大隊に入營第一中隊に編入せられ爾來軍務に精勵して居た。

昭和十二年十一月二十日より本溪縣下の共匪討伐開始せらるゝや十二月四日氏は小隊長鶴島准尉の指揮する討伐小隊橋本分隊の小銃兵として勇躍參加した。此の地方一帯は山岳重疊交通不便匪賊の巢窟として屈強の地にして彼等は當時尙蠢動を續け常に治安を紊しつゝあつた。當日午前十時頃老邊溝に於て鶴島小隊長は九四二高地附近の敵情地形偵察の爲め橋本分隊長の指揮する斥候を派遣した。此の時氏は其の斥候兵として之に屬し零下三十度の酷寒の裡に多大の困難を冒して險峻錯雜せる山岳地帯を前進し暫らくして敵と遭遇其の射撃を受けしも之を意とせず常に勇敢積極的に活躍して克く斥候

長を輔佐し有利なる報告を齎して斥候としての重任を果した。斯くて小隊は午前十一時四十分此の敵の弱點たる左側背を衝くべく三角標高九四二高地東側に展開して攻撃を開始した。此の時氏の屬する橋本分隊は小隊の右第一線となり戦闘を開始し逐次勇敢に敵に近迫して奮闘中地形險難錯雜加ふるに敵は益々兵力を増加し地の利を占めて猛射し來り頑強に抵抗せる爲小隊の攻撃意の如く進捗せず聽て戦闘は交戦状態に陥らんとするに至つた。此の時橋本分隊長は小隊の戦闘進捗せ



ずと見るや當時我小隊主力正面に側射を逞うし我が攻撃に最も危害を加へつゝありし右側方高地の敵機關銃陣地を發見し獨斷部下分隊を提げ此の機關銃陣地に肉薄して遂に突入した。此の突撃に際し氏は敵の主力方面より浴びせ來る篠つく如き猛射をも意とせず敢然分隊長と共に先頭に立ちて敵陣に躍り込み勇猛果敢白兵戦を演じて奮戦格闘忽ち其の一人を斃したが無念氏も左乳房部心窩部胸部に白兵創（刺創）を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し小隊は氏等の奮戦と尊き犠牲に依り午後九時十分標高九四二高地を奪取し匪賊を潰滅することを得たのであつた。

氏の入營するや外對蘇一觸即發の危機に備へ内建國六年未だ王化に靡かぬ殘匪肅清の重任を負ふ。而かも討匪の戦たる其の性質上北中支の戦線に比し一層至難なるものがある。氏は常に此の環境に在つて日夜軍務に精勵し對蘇討匪の準備に遺憾なかつた。其の一度討匪に赴くや大敵も懼れず猛火も屈せず酷暑を冒し險峻を制し勇躍積極或は有利なる敵情偵察となり或は勇猛果敢の突入となる。かくの如きは是れ身命を君國に捧げ斃れて後已む忠誠の發露にして白兵創に依る散華は

壯烈鬼神をも哭かしむるものあり其の芳名は滿洲建國史に列して萬古に朽ちざるべく其の赫々の武勳は千載の下五族齊しく景仰し英靈は護國の神となりて不滅に生き神靈尙も皇猷を扶翼し奉り遺族に佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 大浦 正雄

輕機分隊邱莊攻撃に孤立奮闘分隊長以下相次いで斃るゝも尙克く

小隊の支拂となる

氏は兵庫縣揖保郡林田村の人にして大正三年六月二十九日生である。父を佐五郎母をゑいと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性寡言にして温順而かも大事に當りては不言實行寢食を忘れて斷行するの熱意があつた。又義侠的親切心厚く人の難儀を見るや己れを捨てゝ其難に赴くの美德を有してゐた。昭和五年三月郷里の尋常高等小學校を同九年三月青年學校を卒業し其後大工職の見習となり又青年團の幹部に推され團の發展に盡瘁してゐた。同十年一月徵兵として姫路歩兵聯隊に入營し翌十一年五月天津駐屯軍に派遣せられ同十二年三月滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十日應召沼田部隊に編入せられ八月十一日勇躍征途に就いた。北支上陸後は泥濘濘を没する惡路にあらゆる辛酸を克服して難行軍を續け八月二十六日より九月十一日に亘りては馬廠十五日より二十六日に亘りては滄州附近九月二十七日より十月五日に至る間は德州に向ふ追撃戦に、又十月三十日より十一月八日に亘る間は黃河北岸掃蕩戦に参加し此間惡路を冒し飢餓を凌ぎつゝ或は彈雨の下豫備隊として出水地帯に警戒搜索の任に服し或は第一線



となり勇戦奮闘敵を撃破撃退し或は敗敵に熾滅的大打撃を與ふる等分隊長を中心とし一致協力克く其任務を完うした。  
十一月八日邱莊(苗家)附近の戦闘に於て中隊は右迂回隊として午前四時五十分鳳凰店出發午前八時邱莊攻撃の爲盧莊北端に展開した。所屬小隊は中隊の右第一線となり大きく敵を包む如く右翼を張りて攻撃前進した。氏は此小隊の最右翼輕機分隊の彈藥手であつた。敵は村端に池沼を控へ樹木を倒して障碍となし土壁に銃眼を造り樹葉を以て之を偽裝せし爲我目



視甚だ困難なるに敵彈は猛烈を極め正面よりする攻撃は容易ではなかつた。而かも氏の分隊攻撃地區は何等利用すべき地物なき平坦開浴地で且つ分隊は最右翼にあつた爲一意前進に努め午前九時には一學に敵陣地前百米の地點に在る墓地に進出し小隊攻撃の支撐となり孤軍奮闘を續けた。然るに不幸輕機に故障を生じ分隊長亦敵彈に斃るゝに至り愈々苦戦に陥らんとせしが殘員協力其地に踏止まり輕機關銃の故障を排除して戦闘を繼續し以て小隊の攻撃を容易ならしめつゝあつた。驍て大隊主力が此方面より攻撃前進するに至るや中隊主力は更に大隊の右翼側より敵を攻撃することゝなり氏の所屬小隊も先づ王美合の敵を攻撃すべく敵前近く東方に轉進することゝなつた。分隊亦此命令に基き移動を開始するや射手たりし山本上等兵遂に斃れ氏は直ちに之に代りて輕機を執り前進すること數歩無念敵彈頭部を貫通し竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦地より家郷に送りし第一信中「戦闘中は何も考へません。敵彈は雨霰とやつて來ますが只敵をやつゝける事しか

考へません」廣い／＼一望千里の戦場にてやがて花咲く春の來るのを信じ身を以て働きます。支那農民の樂土の早く出現を念じつゝ此便りにて御別れとなるやらそれは天運にまかせ云々」第二信には「何時果つるかかわらぬ命であります故に今後こそ捨身に敵に當らんと思ふて居ります。彈丸は當らないのが常でありますが一は神佛のみ知り給ふ自分の生命です……」と氏の戦ふや唯々八紘一字の皇業恢弘を念願して已まず聖戰に双向ふ敵を膺撃するの一念に燃ゆるのみであつた。さればこそ孤軍能く猛火の前に挺身して小隊攻撃の犠牲となり而かも苦戦に陥るも尺寸の地をも退かず勇戦奮闘運を天に委して生を希はず實に其學や悲壯なりと云ふべきである。氏今や亡しと雖も其赫々の武勳は千載に傳へて以て鑑とすべく氏が不滅の忠魂は護國の神となり尙も頑迷なる敵に神罰を加へ以て皇謨を扶翼し奉ると共に其の兩親の前途を加護することであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 越智早夫

#### 重傷に屈せず偵察の結果を報告して絶命す

氏は愛媛縣越智郡鈍川村の人にして父は市治亡母はアサヨと云ひ大正五年十一月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして而かも果斷親に對しては孝心厚く兄弟に對しては睦ましく衆の賞讃せる所であつた。昭和六年三月鈍川高等小學校を卒業し引續き青年學校に入校同十一年三月本科第五學年を卒業し同年十二月徵兵として大邱歩兵聯隊に入營し軍務に精勵してゐた。

支那事變起るや鈴木部隊佐伯隊に屬し昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後氏は第三分隊輕機關銃彈藥手として七月二十七日團河村附近の戦闘に際しては彈丸雨飛の下敏活に彈藥補充に任じ輕機關銃の射撃を滞滞なからしめ殊に中隊突撃前後彈藥の射耗最も多き時期に際しては活躍大に努めて以て輕機の猛射撃に遺憾なからしめた。引續き二十八日南苑の攻撃に際しては不眠不休而かも絶食状態に於て不屈不撓且つ此の時は射手となり分隊長指揮下に大に奮戦



し中隊攻撃の奏功に貢献せし所多大であつた。爾後北平周邊の殘敵掃蕩長辛店附近の集中掩護良郷附近の急追撃等に参加し八月十九日揚子崗の戦闘に際しては射手又は彈藥手として分隊長指揮下に勇戦し九月十五日房山附近の戦闘に於ては中隊の右第一線小隊の左第一線分隊として奮戦大に努め爾後保定南方地區に向ひ追撃し引續き沙河の線に又引續き滹沱河の線に向ひ追撃した。此間第一線となり或は斥候となり或は警戒勤務に任じ或は陣地構築を爲す等各種勤務に寧日もなく熱心奮闘大に努め中隊の任務達成を容易ならしめた。

十月二十三日正太線南方河北山西兩省境舊關鎮の攻撃開始せらるゝや此省境一帶は天險屹立せる山岳重疊而かも其頂上一帯は岩壁の秃山にして國內戦に於ては未だ嘗て破られたることなき天下の險であるが今次敵は其頂上に半永久的陣地を構築して防禦してゐた。此日所屬中隊は一〇六〇高地の奪取を命ぜらるゝや先づ午後四時第一陣地を突破し續て午後五時第二陣地を奪取し引續き夜に入るを待ち一〇六〇高地の北端主陣地の一角を奪取すべく準備に着手した。氏は第一第二陣地奪取に際しては左前膊に擦過傷を受けたるも物ともせず率先頭

に立ちて突入し奮戦大に努め第二陣地奪取後主陣地に對する攻撃の爲分隊の前進路の偵察を命ぜらるゝや猛烈なる敵火を冒し勇敢剛膽仔細に偵察して歸途に就きしが其途中腹部に盲貫銃創を蒙りたるも自己の任務の重大なるを思ひ其重傷にも屈せず分隊の位置に歸還して氣息奄々たる裡に詳細に報告を終りかくて重き使命を果したる安堵と同時に最早氣力も盡きて其場に打倒れ壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

夫れ忠孝は一道なり氏の郷に在るや至孝、其出てゝ戰場に臨むや不屈不撓長期に亘りあらゆる困苦を克服し其戦ふや沈着剛膽或は射手として有效的確なる射撃を爲し或は彈藥手として勇敢機敏其補充に滞滞なからしめ以て皇軍輕機關銃の威力を遺憾なく發揮した。殊に舊關の山岳戦に於て重傷を負ふも屈せず任務を完うせし如きは是れ職責の存する所身命を君國に捧げ斃れて後己む忠誠の發露にして軍人の鑑と謂ふべきである。敵が難攻不落と恃める堅陣突破の爲に玉碎せる氏が赫々の武勳は職責遂行の示範と共に千載に輝き又不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 小野寺辰藏

### 娘子關の激戦に敵の包圍を受け勇戦奮闘職に殉ず

氏は宮城縣本吉郡氣仙沼町の人にして父を東藏母をまつのと云ひ大正五年一月五日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして孝心深く寡言力行克く家業に精勵し人と廣く交はらざるも交はれば厚く特に義務心に富み事に臨みては沈勇果斷

であつた。昭和五年三月氣仙沼小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて家業に従事中昭和十二年一月現役兵として高田山砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し常に良成績を挙げ上等兵候補者として選拔せられた。

支那事變起るや間もなく星野隊に屬し四番砲手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬中隊は豊臺保定新樂を経て十月八日漸く戦線に出で淖沱河畔の渡河戦に参加するに至つた。氏は其間連日泥濘の悪路に強行軍を續け時には泥濘

馬腹に達して征馬前まず日暮れ道遠くして人語らず人馬の疲勞其極に達せし場合も黙々として泥中に入り全身泥人形となりて駄馬を扶け戦友を勵まし克く分隊の中堅となり分隊長を輔佐する等堅忍持久眞に衆の模範として上下の信頼を受けて居た。



淖沱河南岸の敵陣地は敵が北支戦線に於ける最後の運命をかけて決戦を期したる戦線で蜿蜒實に約二十里守兵約二十五萬と傳へられ其左翼據點を石家莊西方山地の平山縣附近に置き敵の精銳湯恩伯が二箇師を以て頑強に之を守備し更に正太線方面には敵の増援隊が東進するの氣配を示して居た。所屬中隊は翌九日より石家莊附近次で

正太線沿線の戦闘に参加し城子均井陘舊關附近の敵陣地の攻撃に参加したが氏は敵彈雨飛の中に第三分隊の四番砲手として正確且迅速なる操作を行ひ適切有效なる猛射を以て敵を壓倒震駭し以て中隊長の射撃指揮を容易ならしめた。超えて同月十四日正太線上の天險娘子關の堅壘に對し攻撃開始せらるゝや所屬第三分隊は相田少尉の指揮下に獨立小隊となり同方面に派遣せられたる支隊に配屬せられ午前三時三十分舊關より行動を起したが氏は連日の疲勞をも意とせず率

先難局に當り未明の間に娘子關南方約三千米突の高地中腹に放列布置を完了した。やがて午前六時天明と共に威子關西南方高地上の敵に對し砲撃を開始したが敵亦我に應戦し氏等の身邊は熾烈なる彈幕を以て覆はれた。豪膽不敵の氏は毫も騒がず常に正確敏活なる操作を續けて猛射を加へ射撃開始以來僅かに二十分にして此敵に徹底的の打撃を與へ之を潰亂敗走せしめ支隊の戦闘に至大なる援助を與へた。

次で小隊は更に前方山上に陣地を推進せんと其準備に取り掛る折しもあれ突如四周より敵襲を受け友軍歩兵部隊を初めとし所屬小隊の人馬亦死傷續出するに至つた。時正に日没頃にして而かも岷々たる山地の事として行動意の如くならず今や絶對絶命の窮境に陥つた。氏は之にも屈せず三番砲手負傷するも機敏に其職務を代行し沈着確實に彈丸を裝填中敵の迫撃砲弾は轟然として砲側に落下炸裂し氏は右大腿部に其の破片劍を受け戦友數名と共に壯烈なる戦死を遂げた。然かし氏等の壯烈勇敢なる奮闘は自づから敵の集中火を自己の身邊に吸収して支隊全般の戦闘を著しく容易ならしめ遂に午後七時頃には頑敵に多大なる損害を與へて撃退するに至つた。

氏や木訥沈勇にして邊幅を飾らず今次聖戦に参加しても黙々として幾多の辛酸を克服し彈雨の中にも毅然として自己の職分に邁進して敵に多大の損害を與へ愈々萬死の悲境に立つも尙從容自若全靈全身を傾倒して砲手の本分を完遂し遂に聖戦の尊き人柱となつた。蓋し盡忠報國の至誠に透徹する士にして初めて能くし得る所であらう。寔に是れ皇軍砲兵の精華であり又一般軍人の龜鑑たるものである。今や其壯容に接する能はず痛惜限なしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其芳名は後世に誦はるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級  
若槻伴太郎  
孝子、彈雨下に勇戦奮闘し獨流鎮の華と散る

氏は島根縣大原郡日登村の人にして父を幸太郎母をステと云ひ大正五年四月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温良にして孝心深く諸事熱心着實にして責任觀念強く郷黨の模範青年であつた。昭和八年三月西日登尋常小學校を卒業したが在學間は一日の缺席もなく又日々登校前父母を扶けて貨物運搬の手傳をなし而かも學業成績佳良なりし爲め模範生徒として校長より表彰せられた。小學校卒業後は郵便局集配手として精勵し父母の生計を扶け昭和十二年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し忠實軍務に精勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年七月福榮部隊に屬し大西中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支に上陸後は降雨泥濘飢渴の難行軍を続け常に黙々として率先萬難を克服し將兵一同の深き信頼を受けて居た。所屬部隊は河北省獨流鎮の敵陣地を攻撃すべき目的を以て八月二十四日午後二時行動を起した。此の日午後より大雨となり全身ビシヨ濡れとなり泥濘亦甚しく全員泥人形となりて敵陣地に近接した。當時中隊の兵力は僅かに四十九名敵は村落の内部に隠れ機關銃迫撃砲等を有し其の兵力約二百名にも達して居た。中隊の前進に伴ひ敵は猛烈なる射弾を集中し來り前進容易ならざりしも氏は彈雨を物ともせず率先勇敢に前進を續けて第一線部隊の前進を誘起し午後三時より愈々火戦を交ゆるに至つた。斯くて躍進又躍進午後四時文廟北端に達したが對岸から約四十米の家屋附近一帶の陣地には多數の輕機關銃及重機關銃を配列しありて我が第一線の進出を認むるや銃口火を吐きつゝ凄慘なる猛射を浴びせて來た。所屬小隊の左火線分隊たりし所屬第四分隊は之に屈せず勇躍河岸堤防の線に躍進し直ちに之れが制壓射撃に任じた。氏は此の時分隊の最左翼に位置し正確なる

狙撃射を行ひ既に三敵を射斃した。斯くて將に第八發を發射せんと照準中無念なるかな左前方の銃眼内より猛射を受け左眼より右耳下にかけて貫通銃創を受け銃を保持せる姿勢のまま壯烈なる戦死を遂げた。時に午後四時三十分頃であつた。所屬隊は氏等の勇戦奮闘に依り同日午後六時頭敵を撃破し午後七時には同部落を占領した。



氏や郷に在りては誠實業を勵み孝養一村の模範となり出でて聖戦に従ふや忠實分隊の中堅となりて克く分隊長を輔佐し勇敢敵彈雨飛の中に間斷なき前進を續け而かも戦況凄慘を極むと雖も冷靜克く既得の精練なる射撃技能を發揮して頭敵を撲滅し以て戦勝の端緒を拓いた。寔に是れ平戦兩時を通じ軍民一般の模範たる者であつた。あゝ斯かる忠孝兩全の勇士を早くも聖戦の初期に喪ふ眞に痛惜を禁じ得ざるも士の戦場に臨むや素より生還を期せざる所而かも獨流鎮附近の地形たるや津浦線の咽喉部を成し大小の河川沼澤地錯雜介在し以て大軍の行動を妨げ且楊柳繁茂して敗殘兵潜伏には屈強の要衝であつた。然るにも拘はらず皇軍の神速果敢なる作戦を進捗し得たるは氏等の尊き犠牲の賜と謂ふべく其の功績たるや芳名

と共に不朽に皇軍戦史を飾り又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 綿貫正治

## 大冊河の激戦に勇戦奮闘して玉碎せる小銃手

氏は栃木縣下都賀郡水代村の人にして父を傳六母をハツと云ひ大正元年十月八日の生れ性質温厚にして克く人と交はり上長を敬ひ特に父母に事へ孝行であつた。大正十五年三月神奈川縣橋樹郡旭村西寺尾高等小學校を卒業し昭和六年四月鶴見淺野造船所の職工となり熱心勉勵且月々父母に送金して孝養に努めて居た。昭和八年六月現役兵として臺灣歩兵第二聯隊に入營し其の年十二月一等兵に進み翌九年十二月精勤章並に善行證書を附與せられて歸隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召坂西部隊に屬し第六中隊の小銃手として勇躍征途に上り北支上陸後所屬隊は北平西方西苑の警備に任じ九月十四日より京漢線に沿ひ南下し永定河々畔に敵を撃破して十六日には拒馬河に迫りて北相附近の戦闘に参加し更らに強行軍を以て敵を急追し九月二十一日午後大冊河北岸に達した。大冊河の陣地は敵が數年に亘り計畫的に構築せる堅陣にして戰車壕機關銃座地雷鐵條網等物凄きばかりの防禦工事を完備しありしが爲めに勇敢無比の皇軍も晝間攻撃を避け夜襲を以て之を攻略するに決した。

所屬部隊長は先づ第一大隊をして主力に先ち渡河せしめ對岸に據點を占領し以て主力の渡河を容易ならしむべき任務を與へ氏の所屬大隊は部隊主力として北岸に止り第一大隊の渡河を掩護する事となつた。此の夜は月明にして晝を欺き附近の地形は平坦開豁なる砂地にして僅かに敵陣地前には黍畑の點在するのみにて據るべき地物もなかつた。第一大隊は二十日午前二時を期し渡河を開始するや對岸の敵は一齊に火蓋を切つて猛射を浴びせ來り見る見る死傷續出敵岸に近づくに從ひ水深は増して胸に達し水勢亦速くして足をさらはれ而かも水際には水雷を布設してあつたが辛うじて敵岸に取りつけ



ば地雷の爆發刺さへ十字の銃砲火愈々熾烈となり友軍の死傷刻一刻と増大し戦況轉た凄惨悲壯を極はめた。此の戦況を眺めて居た部隊長は氏の中隊に直ちに第一大隊に續いて渡河し前岸確保に協力を命じた。茲に將兵一同は前中隊長成島大尉の弔合戦は此の時ぞと勇躍サツと河中に躍り込み嵐の如き敵弾を物ともせず我れ劣らじと對岸に取りついた。所屬小隊は中隊の左第一線となり散開し河岸より約五十米程進出して據點を占領した。敵彈の飛來は愈々烈しく味方は忽ち彈巢と化し死傷續出したが氏は毅然として正確迅速なる射撃に依り次ぎ次ぎと頑敵を制壓して據點の確保に大なる貢獻を致した。此の時火線分隊の彈藥將に缺乏せんとし彈藥補充と請求する聲が悲痛に響き渡つた。あゝ動かば必死の此の場合決死の士ならでは此の請求に應ずべくもないのである。然るに氏は聲に應じて此の難局に當らんと上體を起した。其の瞬間掉ましくも左側方の敵側防火の爲め左肩胛部に首貫銃創を受け打ち倒れた。其の後後方に收容されたが「後を頼む」の一語を名残りとし二十五日竟に華北戦線の華と散つた。本戦團は中隊長代理佐藤中尉を初めとし三十名の戦死者五十餘名の戦傷者を出し稀に見る激戦であつたが氏等の勇戦奮闘に依り同日午前十時第一線陣地に突入同十一時敵の主陣地を占領し之を確保するに至つた。

氏や郷に在りては善良の孝子たり。出でゝ軍に従ふや誠實勤勉克く分隊の中堅として分隊長を輔佐し難局に當るや沈勇果敢積極的に任務に邁進し以て光輝ある戦勝の礎石となつた。洵に是れ皇軍歩兵の精華にして一般軍人の模範たるもので

あつた。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは眞に痛惜に堪へずと雖も氏が参戦せる戦場は極めて重且惨烈なる激戦地であつた。而して氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に牢記せらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途に將た又一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級 渡邊 秋夫

#### 重圍の中に死闘數時間遂に敵を撃退し靈邱郊外の華と散る

氏は千葉縣夷隅郡瑞澤村の人にして父を謎之助母をはまと云ひ明治四十二年九月二十一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚眞摯にして寡黙謹直克く業務に精勵し不屈不撓の氣概に富んで居た。大正十三年三月瑞澤小學校高等科を卒業し其の後は長生郡一宮町吉田繁治方にて商法を見習ひ昭和五年一月現役兵として近衛輜重兵大隊へ入營し克く軍務に精勵して精勤章を附與せられ翌六年十一月滿期除隊に際しては善行證書を授與せられた。除隊後は雜貨商を營み諸人に對し温情をかけ商用以外にも他人の依頼があれば一宮町まで往來し近隣の幼者を慈しみ又時々兩親の爲め衣類を新調して孝養を盡す等兩親の喜びを以て我が喜びとして居た。されば一家は氏の至誠に依り逐年信望を高めて營業益々隆昌を來たし衆皆其の將來を矚目して居た。

支那事變起るや氏は間もなく應召大島部隊矢島中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて八月中旬北支豐台に到着以來所屬部隊に在りて第一線部隊に跟隨し險難なる惡路を克服し殘敵を排除しつゝ晝夜兼行東奔西走自動車輜重の本領を違

憾なく發揚して補給業務に従事した。

九月二十四日所屬中隊は長城線奪取の準備中なりし兵團に彈藥糧食補給の重任を果たしたが當時第一線の情況は急迫を告げありし爲め同夜更に後方に歸へり新銳の歩兵部隊を前線に輸送すべき命令を受けた。翌二十五日は夜來の豪雨全く晴れ渡り朝陽大行山嶺に照り映へて一入身に沁む寒冷を覺えた。中隊は午前九時出發靈邱に向ひ前進したが午前九時十五分



小寨子の西方隘路口を出でんとするや突如進路の前方に敵兵數十名現はれ猛射を浴びせて來た。中隊は小癩な敵と直ちに應戦したが間もなく百數十名の敵兵が側面に現はれ機關銃迫撃砲の猛射を加へて來た。やがて敵は所屬隊の周圍を取り圍んで仕舞つた。是れ實に敵は夜來の雨を衝いて我兵團の背後に迂回せる正規軍約一箇旅であつた。氏は此の時第一小隊第三分隊に屬し先頭自衛隊に在つて中隊戦圍に参加中であつたが大敵たりとも懼れず重圍に陥るも動ぜず敢然として十數倍の敵と死闘を續け午前十時頃肉薄し來れる敵部隊に對し佐藤上等兵と共に果敢なる突撃を行つて之を撃退し其の際左腕に貫通銃創を受けしも之に屈せず更に泉伍長の指揮下に數度に互り敵の逆襲を見事に反撃せしが午前十一時三十分頃敵の一手指彈飛來無念胸部に爆創を受け壯烈なる戦死を遂げた。然かし所屬中隊は氏等の壯烈なる戦闘に依り車輛の集結並に戦圍準備を完了して奮闘力戰實に四時間に互り友軍中西部隊及歩兵の一部隊の協力を得て遂に此の優勢なる敵軍に多大なる損害を與へて撃退した。

氏や誠實にして勤勉力行の人克く郷黨青年の模範たり出で、軍務に服するや熱誠忠實衆兵の模範であつた。而して今次聖戦に参加するや數十年來北支に稀なる豪雨と泥濘に悩まされつゝも不眠不休の努力を以て所屬部隊の重任に貢献し圖らずも靈邱郊外敵大軍の奇襲に際會するや勇猛果敢好機に投じて敵の出鼻を粉碎して中隊主力の行動を容易ならしめ爾後死闘數時間克く既得の武技を發揚して敵に多大の損害を與へ竟に玉碎するに至つた。蓋し報國の大義に透徹し生死を超越せる勇士にして初めて爲し得る尊き犠牲であつた。あゝ前途有爲の精銳を此の一戦に喪へるは轉た痛惜を禁じ得ずと雖も氏の赫赫たる功績は皇軍戦史に輝き其の芳名は後世に傳ふべく不滅の雄魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日幡重兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 川上知一

#### 孝子、正莊の激戦に奮闘重傷を負ひ母を呼び求めて瞑す

氏は鳥取縣日野郡日野村の人にして父を兵太郎母を益代と云ひ大正五年三月三十一日に生れ未だ獨身であつた。性温良にして極めて孝心深く其の日誌にも親の感恩を感ずる記事多く又病弱の母を案じて片時も忘るゝ時はなかつた。昭和五年三月根雨小學校高等科を卒業したが操行善良に付表彰され同年三月日野農業補習學校を卒業し其の後は家庭に在りて専ら家業に精勵しつゝ日野青年訓練所へ通學し同十一年三月之を終了した。其の際精勤且成績優良に付賞状を附與され翌十二年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營七月一等兵に進級した。

支那事變起るや間もなく福榮部隊に屬し深山中隊の輕機關銃分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。北支到着後は八月下旬より九月上旬にかけ獨流鎮並に東西子牙鎮附近の戦鬪に於て猛烈なる敵彈下に第一線分隊員として輕機の威力を發揮し又大浩庄の警備に任ずるや氏の分隊は其の西南陣地を擔當し其の間敵襲を受けたが氏は沈着剛膽なる行動に依り適切有效なる猛射を加へて難なく之を撃退した。



九月中旬所屬中隊が東辛庄附近の大旺子村を占領するや所屬小隊は其の前方約百米に在る翁王村の敵陣地を突破之を占領したが其の際氏は分隊長と共に率先突入して同部落の東端を占領し機を失せず敗退する敵に熾滅的の大打撃を與へた。續いて第三大隊の小行李が孫河西方に於て敵より包圍せられ危殆に瀕するや氏の所屬小隊は之れが救援に馳せつけ速かに之を攻撃して潰走せしめた。氏は此の際も勇敢機敏に彈藥を補充して輕機分隊の卓越せる威力を發揚せしめた。

九月十五日に於ける南趙扶附近の戦鬪には所屬中隊は支隊豫備隊たしが午後八時半に至り所屬小隊は所屬大隊に復歸を命ぜられた。此の夜敵は兵力の優勢を恃み屢々逆襲を反復し附近の行動は極はめて危険であつたが氏は大隊への連絡を命ぜられ暗夜且水深股間に及ぶ浸水地帯而かも高粱繁茂の中を重躍連絡勤務に任じて所命の任務を完了し更に其の附近の警戒に任ずるや敵が三面を包圍し各種の銃砲彈身邊に蟬集し殊に敵迫撃砲彈の脚下に炸裂する中に毅然として敵情監視の重任を全うした。

九月二十二日所屬小隊が滄縣附近の鐵道修理班の掩護に任ずるや氏は又歩哨勤務に就いたが折しも正面及東方の敵より十字火を受け剩さへ姚官屯驛に現出せる敵の列車砲より猛撃を受けた。併し責任觀念の強烈なる氏は毅然として警戒の重任を完うし以て作業班の行動を掩護した。

十月十三日所屬大隊は平原城の西方鎮鎗たりし正莊の堅壘に對し左側背より攻撃すべき任務を受け德州南方の一要衝黃河涯を出發し午後六時正莊陣地の西方約七百米に在る劉莊に到着した。敵は丈餘の土壁を利用して銃眼を設け其の周圍には二重の鐵條網を張り廻はし且同部落西南角には池を設け障礙の度を増強して居た。所屬中隊は大隊の左第一線所屬小隊は中隊の左第一線となり薄暮を利用して右前方に斜行しつゝ正莊の西南角に近迫した。此の際氏は所屬分隊の右翼に在りて前進したが常に右隣接分隊との連絡を確保しつゝ敵前三四十米に肉薄した。やがて突撃號令一下分隊長と共に率先障礙物を乗り越え突入すれば大部の敵は算を亂して潰走したるも退路を失へる一部の敵は銃眼を利用して必死の抵抗を續けた。氏の分隊は圍壁直前の障礙物と圍壁に據れる敵より手榴弾及小銃彈の猛雨を浴びて進退に谷まつた。此の時氏は進んで連絡兵となり敵前尺寸の地に小隊長の許に駆け付けて状況を報告し再び分隊長の許に歸來して復命せんとする一刹那敵手榴彈の爲め致命傷を受けて打ち倒れた。倒れ乍ら「分隊長殿！ やられた！ お母様！ 萬歳」と苦しき息の下より叫びつゝ壯烈なる戦死を遂げた。時正に午後七時十分であつた。折柄隣接第十一中隊は部落の背後より突入し敵を燒殺する目的を以て家屋に放火した。敵は狼狽爲す所を知らず部落外に遁走するを氏等の機關銃を以て殲ぎ倒し殆んど之を殲滅同夜八時頃正莊を占領するを得た。

氏や至孝の人其の臨終に方り尙も故山の母に呼びかけて涙なきを得やうか。さり乍ら氏は徒らに一家の私情に戀々たるものではなかつた。氏が累次の激戦に於て沈着剛膽克く彈雨の中に勇戦奮闘以て衆の模範となりしは何よりも雄辯に之を證明するものである。今や全靈全身を君國に捧げ終り肺肝を衝いて漏れたる言葉こそは玲瓏比なきまごころの發露であつた。分隊長に別れを告げ母性愛に最後の感謝を述べて母の幸福を祈り更に 陛下の萬歳を奉唱し現世を去れる嚴肅なる最期により氏の修養信念の程も忍ばれて奥床かしき限りである。あゝ氏の赫々たる功績は天晴れ皇軍戦史に輝き其の芳名は千古に謳はるべく肉體は滅びても茲に新なる靈界に不滅の生命を與へられて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に兩親の前途に限りなき加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 風間 三郎

勇敢なる小銃兵負傷するも屈せず障礙物破壊を完うす「澤畔店」

氏は群馬縣邑業郡館林町の人にして父を米八母をサヨと云ひ明治四十二年三月八日に生れ未だ獨身であつた。資性直情にして俠氣の人、意氣旺んにして腕節強く此の點では嘗て人に後れを取らなかつた。大正九年三月館林尋常小學校五年修了後家事に従事し十七歳にして豆腐製造業見習となり爾後獨立して該業を營んでゐた。昭和五年一月徵兵として高崎歩兵聯隊に入營し熱心精勵特に射撃及銃劍術に長じ各賞状を授けられ同年十一月善行證書を附與せられて歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第三中隊に編入第一小隊第一分隊小銃兵として征途に就いた。其の出陣に當り氏は獨身にして毫も後顧の憂なく而かも力量人に優れし爲め存分皇國の爲めに働き父母兄弟乃至郷黨の範たらん決意を固く抱いて勇躍出動した。斯くて北支戦線に到着し九月十四日には永定河々畔辛莊附近十六日には拒馬河々畔東茨村附



近翌十七日は平漢線東側地區南梁口附近の戦闘に参加し常に第一線分隊内にありて敵彈雨飛の間奮戦力闘克く小銃兵たる本分を完うして中隊の任務達成を容易ならしめた。



次で翌十八日澤畔店附近の戦闘に際しては所屬隊は午前十一時より行動を起し同十一時三十分より戦闘を開始するや氏は猛火の下第一線分隊内にありて勇敢に澤畔店南端に向ひ攻撃し遂に敵前百米にまで肉薄し薄暮まで猛攻を続けしが敵は頗る頑強にして容易に陣地奪取の果を見るに到らなかつた。茲に於て大隊は夜襲を以て敵陣を奪取すべく決した。之が爲め氏の分隊に於ては午後六時三十分頃分隊員は戦線に於て互に水盃を爲し此の困難なる戦況に於て誰一人生還を期する者は無かつた。而して愈々夜襲の爲め行動を起すや氏は選ばれて分隊戦友と共に右第一線中隊の前方警戒及誘導の任を受け勇躍前進し間もなく敵監視部隊の占領せる突角前進陣地の敵より猛射を受けた。中隊長は此の敵前進陣地を一蹴すべく突撃を號令するや氏は部隊の先頭に在りて敢然突入し先づ之を奪取し引續き敵主陣地に向つて肉薄し此處に突撃を準備した。此の時氏は再び選ばれて障碍物破壊班に屬せられ勇躍其の任に就き敵の重機關銃迫撃砲手榴彈の猛射に依り死傷續出する中を屈せず勇敢に匍匐前進して鐵條網に迫り猛火の中に仰臥して鐵條網により強行破壊に着手するや間もなく敵の迫撃砲彈身邊近く炸裂し右大腿部に爆創を受けた。然かし剛氣の氏は之に屈せず尙も破壊を敢行して他の班員と共に遂に突撃路の開設を略ぼ完成し部隊と共に將に突撃に移らんとせる刹那無念再び右胸部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を得た。

途ぐるに至つた。然し氏の剛毅勇敢なる奮戦により大隊はさしも頑強なりし敵陣地を午後八時三十分全く占領することを得た。

氏の戦陣に立つや人後に落ちざらんことを期し敵を見て勇み難を見て赴き死を見る歸するが如く彈雨の下勇猛果敢常に選ばれて至難の任務に當り勇躍奮戦克く其の重任を完うした。殊に障碍物の破壊に任ずるや傷つくも屈せず見事之を完遂せるが如きは素より氏の負けぬ氣象の然からしめし所とは云へ併しながら身命を君國に捧げて斃るゝも尙已まざる盡忠赤誠の顯現と謂ふべきである。惜哉天一層の雄腕を揮ふの時を借さず聖戰幾何もなく此の勇士を喪ふ。洵に痛恨限りなきも一戰玉碎して樹てたる氏が赫々の武勳は千載の下皇軍戦史に輝き其の勇名は不朽に傳へらるゝべく又其の英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神ともなりて遺族の前途に加護佑助を垂るゝ事であらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 勝山 千美

#### 壯烈、大册河を渡河して黃村數線陣地を突破し竟に玉碎す

氏は長野縣上高井郡高井村の人にして父を庄治郎亡母をもとと云ひ大正五年九月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚氣概に富み事に臨むや沈着果斷であつた。昭和五年三月高井小學校を卒業し次で同地青年訓練所に入所して其の課程を終へ同十二年一月現役兵として松本歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵し良成績を擧げてゐた。

支那事變起るや同年九月遠山部隊齋藤中隊に編入せられ小銃手として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて氏の所屬

中隊は九月中旬南泊大石橋涿州の戦闘に参加し此の際氏は第一線小隊の火線に或は豫備隊として敵火の下泥濘を没する地帯にあらゆる困苦を排して勇敢機敏に奮闘活躍し次いで二十一日大冊河々畔黄村附近の攻撃に於ては齋藤中隊は加島大隊の左第一線であつたが氏の所屬片山小隊は齋藤中隊の豫備隊であつた。大冊河は河幅八十米内外水深一米以上にして敵は其の右岸地区に數條に亘り堅固に陣地を占領し其の一部は加島大隊攻撃正面の大冊河の中州を占領して我が渡河に備へ



て居た。加島大隊は夜に入り渡河を開始したが敵は迫撃砲機關銃を猛射し我が將兵は水深胸に達する河中を浮きつ沈みつ戦友互に助け合ひながら猛火を冒して二十二日の午前零時四十分夜襲を以て中州の敵を驅逐し逃ぐる敵に尾して對岸に達した。此の間我が將兵は相當死傷者を生ぜしも一同志氣愈々旺盛隊伍を整へ面も振らず遮二無二敵の第一線陣地に肉薄突撃し茲に肉弾相搏つ白兵戦は展開せられた。此の時迄豫備隊として脾肉の敵に堪へざりし片山小隊は直ちに中隊の右翼を増加を命ぜられた。氏は號令一下小隊長に従ひ彈丸雨飛の中を疾風の如く猛烈果敢に突進して敵陣地の左翼凸角部に躍り込んだ。然るに健氣にも敵は逆襲して來たが氏は忽ち其の二名を刺殺し次いで氏等一同は獅子奮迅の勢を以て縱横無盡に突き捲くつて附近の敵を撃退し遂に其の一角を奪取した。斯くて敵の第一線を突破した大隊は其の第二線陣地よりする風の如き猛射を物ともせず怒濤の如き勢を以て更に第二線陣地を席捲し續いて第三線陣地に肉薄した。此の時氏は敵の散兵壕に躍り込み奮戦力闘阿修羅の如く突き捲くつたが突如左側方よりする敵機關銃の一弾は無念氏の胸部を貫通し壯烈なる

戦死を遂げた。而して此の戦闘に於て氏の中隊は齋藤中隊長を始め多數の戦死者を生じたが之等勇士の奮闘と尊き犠牲に依り流石の堅陣も同日遂に攻略占領し得たのであつた。

氏や生來情熱の人にして感謝報恩の念極めて厚く其の小學校時代永年黨陶を受けた師の病床に臥するや其の最期迄親身も及ばぬ看護をなしたが其の甲斐もなく竟に逝去するや敬慕の念禁じがたく同級生を糾合して恩師の庭内に記念碑を建立し又青年訓練所に通學中は生徒の中堅となつて他を指導し寢食を忘れて其の出席勧誘に努め在官より表彰状を受けた程であつた。而して今次聖戦に従ふや一死報國の念燃ゆるが如く敵彈雨飛も物かはと終始一貫不眠不休の奮闘を續け殊に黄村附近攻撃の際に於ける氏の剛膽且機敏なる活躍奮闘は衆の模範とすべきものであつた。此の如き勇士を聖戦参加僅かに二句にして喪へるは洵に痛恨の極みである。然かし氏は百戦功なき瓦全を耻ぢ一戦玉碎名を遺すに如かず氏が一身を犠牲に樹てたる赫々の武勳は燦として皇國戦史に輝き其の名は萬世に誦はれ英靈は不滅に生きて護國の神と崇められ神靈は永へに皇國を護り又遺族一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 加藤 鶴 龜

孝子、湯水鎮に奮戦し江南の華と散る

氏は大分縣玖珠郡森町の人にして父を市藏と云ひ明治四十一年七月二十一日に生れ妻モモエとの間にキヨ子鶴代の二愛子を擧げた。性温厚篤實不幸幼少にして母に別れしじみ親の大神恩を知り一人の父親に事へて孝養至らざるなく具さに艱

難辛苦を嘗めつつ人世を静観して自己の責務を自覚し只管農業に精勵して家運の隆昌を圖り近隣は口を極めて氏の孝心を讃へて居た。大正十年三月岩屋尋常小學校を卒業し其後は家庭に在りて農業に従事し入營時に及んだ。昭和四年一月現役兵として大分歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を挙げ翌五年七月歸休除隊となり其後再び家業に精勵して居た。



支那事變起るや昭和十二年八月應召長谷川部隊に屬し河野大隊本部附として勇躍征途に就いた。斯くて上海戦線に到着後所屬部隊は獅子林砲臺月浦鎮其他各地に轉戦し又趙宅及羅店鎮の守備に就き十一月中旬には劉河鎮の戦闘に参加した。氏は其間或は暗夜泥濘の中に或は敵の彈雨を浴びつゝ傳令の重任を果たし部隊長の指揮運用を容易ならしめた。其後所屬部隊は軍司令部の警備を命ぜられ大場鎮、古里村、常熟、蘇州、無錫、湯水鎮に移動したが氏は常に献身的の努力を以て積極的に任務を遂行し將兵一般の深き信頼を受けて居た。

十二月十三日所屬部隊は湯水鎮に於て警備中敵兵約二三千名南京を出發し湯水鎮北方高地方向に東進中なる情報に接し所屬部隊は午前十一時十分行動を起し赤燕山狼山の線並に其以南に進出しありし敵を驅逐し忽ち前記兩山の中央鞍部の線を占領した。此時敵は北方谷地を東方に移動中であつたが所屬第一線部隊は機を失せず此敵を猛撃して之を四散せしめた。然るに敵の一部が同高地の北方部落たる葛巷附近に潜伏しあるを知り更に攻撃前進に移つたが氏は大隊本部と共に勇

敢に前進して隠家岡を占領し更に葛巷に向ひ前進中西北方に潜伏しありし敵兵は刻々其兵力を増加し我右翼に向ひ迂回せんとする状況を氏は目早く發見し之を大隊長に報告すると共に此敵に猛射を加へ敵の移動を阻止中敵機關銃弾を浴び無念其一彈の爲胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午後四時四十分頃であつた。所屬大隊は本戦闘間將校以下約五十名の戦死傷者を出したる激戦を交へたが遂に重圍を突破して此敵に大打撃を與へ潰亂敗走せしむるに至つた。

氏や郷に在りては世上稀に見る孝子であり出でゝ軍務に従ふや誠實純眞の良兵として上下の愛敬を受けて居た。而して今次聖戦に参加するや選ばれて部隊本部の傳令となり正確機敏に任務を完遂しよく所屬部隊内の連絡を確保した。殊に湯水鎮の敵襲に當りては重大危機に直面したが幾度か熾烈なる敵火の下に決死的の傳令任務を完遂し又逸早く敵の迂回行動を發見して之を大隊長に報告する等機宜に適する勇敢なる行動に依り戦勝獲得に尊き礎石となつた。あゝ氏が生涯を回顧すれば眞に是れ至誠の一生であつた。斯かる忠臣孝子を褒へるは轉た痛惜の情を禁じ得ざるも人は一代名は末代の謬の如く肉體は亡びても其功績其忠魂は不滅である。今や氏の壯容慈顔に接すべからずと雖も其功績は天晴れ皇軍戦史に牢記せられて其芳名は後世に誦はるべく其英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族殊に二愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 柏崎 弘

#### 敵機の空襲に方り死を以て輓馬の鎮靜に努力せる機關銃隊員

氏は宇都宮市川向町の人にして亡父を徳治母をキチと云ひ明治四十四年六月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性純潔責任觀念に富み事に臨むや剛毅果斷又人と交はるや誠實にして諸人の愛敬を受けて居た。大正十五年三月築瀨小學校高等科一學年を修了後家庭に在りて家事を手傳ひ母に孝養を盡くし昭和七年一月現役兵として宇都宮歩兵聯隊へ入營し機關銃隊に編入せられ熱心軍務に精勵し良成績を擧げて居たが同年六月滿洲派遣部隊に屬し北滿警備の重任に就いた。北滿到着後は克山北安鎮龍鎮拜泉等各地に出動して警備討伐に活躍して克く其の重任を果たし功を以て勳八等に叙せられ翌八年五月内地歸還の上歸休除隊となり其後は専ら母に孝養を盡し家業に精勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊に屬し梁島機關銃中隊彈藥小隊の一員として勇躍征途に就いた。北支到着後は北京郊外西苑の警備に就き次で檢修鎮を経て九月十三日永定河畔胡林南方地區に於ける戰闘に参加するに至つた。永定河は水深胸に達し兩岸は腰を沒する泥濘地帯にて而かも敵は對岸に蜿蜒たる堅壘を築き手ぐすね引いて我が軍の渡河を待ち構へて居た。氏は當時彈藥小隊の豫備銃手であつたが雨と降り來る敵彈を物ともせず他銃手に先ち彈藥箱を或は車輛を數回に亘り逐次渡河せしめて彈藥小隊の渡河を最短時間に終了せしめた。之れが爲急進せる戰銃隊は齊整圓滑に彈藥の補給を受け困難なる敵前渡河戰闘に戰勝の第一歩を占めた。氏は更に敵の猛射を意とせず戰銃隊の陣地變換及追撃射撃に密接なる連繫を保持し積極的に彈藥を補給し以て中隊をして赫々たる武勳を奏せしめた。

永定河畔に勝利を得たる所屬部隊は息つく暇もなく敵を急追して之を拒馬河畔に壓迫し九月十五日同河南岸北相附近の

敵陣地を攻撃するに至つたが所屬中隊は第五第八中隊の中間に第一線として同河北岸に展開し所屬大隊の河川偵察を掩護すべき任務を受けた。氏は依然彈藥小隊内に在りて附近敗殘兵の出沒に對し後方の警戒に任じ拂曉と共に拒馬河を渡河したが當時北相の戰闘たるや敵は堅固なる陣地に據りて必死の抵抗をなしたるのみならず我が軍の損害も甚大なりしに乘じ反覆執拗なる逆襲を行ひたるを以て所屬中隊の射耗彈數も亦甚大であつた。氏は其間嵐の如き猛烈なる敵の彈雨の中に殺



然として戰銃隊へ彈藥を補充し克く中隊の戰闘威力を發揚せしめた。九月二十一日所屬大隊は東釜山附近に於て敵を追撃中偶々敵の飛行機より攻撃を受けるや氏の所屬中隊は全力を擧げて對空射撃に任じた。其間氏は彈藥小隊内に在りて豫ねてより爆音に對し狂奔辭ある輓馬を身を以て鎮撫して居たが敵の投下爆彈は身邊近く落下炸裂し輓馬の焦騒愈々甚しと雖氏は尙も馬をなだめつゝ手綱を放さず制止中あゝ無念更に一彈身邊に落下炸裂し悲壯の戦死を遂げた。

氏や曩には滿洲事變に赫々たる武勳を奏し郷に歸へるや専心母に事へて孝養を盡くし克く家業に精勵し又質實剛健一郷の模範青年として將來を囑目されて居た。而して今次聖戰に参加するや一死報國の至誠横溢し降雨泥濘の難行軍にも克く馬匹を愛護し敵彈雨飛の中にも毅然として職責に邁進し又敵飛行機の空襲に方りては死を以て輓馬の鎮靜に當り竟に玉碎するに至つた。蓋し誠忠の士にあらざれば能くし難き所天晴れ軍人の龜鑑たるものであつた。斯かる忠勇の士を表ふ眞に痛惜を禁じ得ずと雖も氏が累次の功績たるや皇軍戰史に牢記せられ其名は後世に傳へて芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈

尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 樫村久光

#### 勇敢なる小銃手、張家口の激戦に奮戦し迫撃砲弾に殲る

氏は東京市本所區横川橋の人にして父は省三母はよと云ひ大正五年三月十日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして表裏なく萬事積極眞摯にして且忍耐力に富み諸人の信用厚かつた。昭和五年三月茨城縣助川小學校高等科を卒業後直ちに日立製作所に奉職同所變壓器設計係勤務として熱心之に従事しつゝ傍ら日立工業專修學校に入校同八年三月同校を卒業した。昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯し同地附近の警備に服してゐた。入營以來軍務に精勵學術科の成績優良にして同年七月には一等兵に進級し又同月第一回に精勵章を附與せられた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第二小隊第一分隊小銃兵として昭和十二年七月急遽天津地方に出動し八月早々より天津附近の治安維持及掃蕩戰に任ずるや氏は不眠不休の努力を以て克く所命の任務を完うし次で内蒙古張北に轉進して該地附近の警備に任じ二十、二十一日外長城線附近第一第二線のトーチカ陣地攻撃に際しては晝間攻撃に引續き夜襲に當り奮戦大に努め中隊の敵陣地奪取を容易ならしめた。各部隊は引續き破竹の勢を以て張家口に向ひ猛追撃中隊所屬小隊は二十三日午後四時頃に至り友軍第六中隊が優勢なる敵の包圍を受け苦戦中なりとの情報に接し急遽彈藥を携行して之が救援に赴いた。第六中隊に近づくや彼我正に激戦中にして敵彈熾烈を極はめ小隊亦負傷者續出するに至りしが氏は彈雨の下

之を意とせず一意分隊長指揮下に勇進を續け該中隊に近迫するや更に中隊と所屬小隊との間を彈雨を冒して勇敢機敏に連絡し機を失せず彈藥を補給し爲に該中隊は意氣頓に昂り忽ち補給せる榴彈に依る擲彈筒の猛射を以て敵を制壓し之に反撃を加へて遂に此敵を撃退するに至つた。

二十四日に至り大隊主力は殘敵を驅逐しつゝ張家口に入らんと強行軍を以て前進中午後十一時頃不意に敵の大部隊と各所に於て衝突するに至り部隊は直ちに進路の左側にある支寶山に地歩を占め之と交戦を開始した。中隊は大隊の左第一線として支寶山の最要點を占領し大隊防禦の骨幹を形成することとなつた。氏は此際中隊火線の最左翼に位置して左方谷地の警戒監視に任ぜしが敵彈雨飛の下物ともせず沈着熱心敵情を監視中敵逆襲の徴を逸早く發見し分小隊長をして機を失せず對應の處置を講ぜしめ其後敵の逐次近迫し來るや沈着冷靜必中の射撃により敵に多大の損害を與へ有利なる戦闘を交へて遂に之を撃退するに至つた。然るに二十六日に至り朝來敵の射撃猛烈を極はめつゝありしが午前八時頃敵の迫撃砲彈氏の占據せる壕内に落下炸裂し戦友木村一等兵と共に内身爆傷を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然かし所屬中隊は氏等の奮戦により二十七日攻勢に轉じ同日午後十時頃遂に張家口に入城することを得た。



氏や眞摯積極精勵の人其戦陣に立つや或は率先堅陣に突入し或は猛火の下活躍連絡し或は迅速に逆襲を發見し或は沈着必中の射撃を爲し唯々小銃兵たる任務に全力を傾倒し兵の本分を完うして遺憾なかつた。かくの如きは是れ身命を君國に

捧げて一死を鴻毛の軽きに致し斃るゝまで戦はんとする盡忠至誠の發露と謂ふべきである。氏征戰中途に於て内蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも奮戦玉碎して以て暴慢不遜の敵を膺懲したる其技群の武功は千載の下皇軍戰史に輝き又其英魂は不滅に生きて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 加瀬 三造

#### 蘆溝橋城内掃蕩に方り斥候長として奮闘玉碎す

氏は千葉縣海上郡富浦村の人にして亡父を市太郎母をあさと云ひ大正六年三月十二日生れで未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして責任觀念旺盛而かも不撓不屈の氣概があつた。昭和六年三月富浦小學校高等科を卒業爾後農漁業に従事し父の死後は克く母に仕へ弟妹を勞はりつゝ只管家業に精進し近隣の風評良好であつた。昭和十二年三月現役志願兵として北支駐屯歩兵聯隊に入隊し熱誠軍務に精勵して良好の成績を収め次で下士官を志願し其の候補者に採用せられ其の教育を受けて居た。

支那事變勃發するや氏は安達部隊第五中隊の小銃手として北平方面へ出動日夜警備に任じて居たが同月二十八日愈々南苑の總攻撃開始せらるゝや氏の所屬中隊は大隊の左第一線中隊となり氏は其の左第一線小隊の火線分隊に屬し南苑西北角の敵陣地に向ひ攻撃前進の準備を整へた。此の日夜來の暴風雨霽れたるも未明の空は尙も暗澹たる雨雲に鎖され事前の靜肅は薄氣味悪くあたりに漲つて居た。忽ち砲聲一發濕氣を帯びし曉の空氣を震はせつゝ南苑上空に黒煙を揚げた。是れ

南苑を包圍せる皇軍の一齊攻撃の開始時期を合圖する信號彈であつた。所屬中隊は勇躍攻撃前進を起した。午前九時萬字地西端より俄然敵の猛射を受け雨後の前進困難なりと見たる中隊長は先づ此の敵を撃破するに決し攻撃を開始したが敵彈雨飛氏の身邊にも數名の死傷者を出すに至つた。此の悲惨なる光景にも氏は毫も之に動ぜず常に勇敢積極的に行動し殊に分隊長の戰死後に於ても克く分隊長代理を輔佐して其の戰闘遂行を容易ならしめ遂に頑敵を撃破するに至つた。續いて翌



二十九日所屬大隊が蘆溝橋の敵陣地を攻撃するに方りては所屬中隊は再び大隊の左第一線中隊として午後六時二十分蘆溝橋の東方近距離に在る砂突子兩端に展開し友軍砲兵の攻撃準備射撃の効果を待つた。午後七時頃敵の銃砲火稍衰へたるを見たる第一線中隊は蘆溝橋東端の敵陣地に向ひ一齊に猛烈果敢なる突撃を決行した。斯くと見たる敵は再び我に猛射を加へて來たが敵は雨と降り來る彈丸も意とせず勇猛果敢に突入して一舉東門樓上を占領した。所屬第一小隊は引續き中隊の中央第一線となり東門より城内に入り南側城壁に沿ふ通路を掃蕩しつゝ西門に向ひ前進した。此の時氏は小隊長より特に

選ばれて斥候長となり部下三名を率ゐて小隊の前方約三四十米に在つて前進し其半ばを過ぎし頃俄然城壁の西南端附近より機關銃及小銃の猛射を受けた。氏は直ちに傳令として之を小隊長に報告せしむると共に沈着冷靜自ら敵情を視察したる結果其の兵力は輕機關銃一を有する歩兵七、八名なる事を確かめ小隊主力の前進を掩護する目的にて部下二名と共に此の敵に對し猛射を浴びせた。小隊は暫くして此處に到着し小隊長は直ちに突撃を號令し氏も共に突撃せんとして起つた其の

刹那惜しくも氏は飛來せる敵弾の爲め胸部に貫通銃創を受け微かにも 陛下の萬歳を唱へ竟に壯烈なる戦死を遂げた。氏や夙に盡忠報國の志堅く入隊後は奮つて下士官候補者を志願して採用せられ前途の希望に満ちつゝ、銳意心身の鍛錬と共に武技の練磨に努めて良成績を挙げ諸上官よりも其の將來を囑目されて居た。而して今次聖戦に臨むや自ら進んで難局に當りあらゆる艱苦缺乏に耐へ率先奮闘して戦友を激勵する等中隊の戦闘に寄與する處大であつた。殊に戦死直前に於ける氏の沈着機敏なる處置行動は洵に斥候長としても恥かしからざるものであつた。然るに出動以來僅かに二旬斯かる忠勇義烈少壯有爲の士を喪ふ洵に痛恨の次第である。然かし氏は百戦功なき瓦全を愧ぢ一戦玉碎名を遺すに如かず。氏今や北支に散華すと雖も其の赫々たる武勳は燦として皇國戦史に輝き其の英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鸚鵡勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉田助次郎

#### 剛勇なる擲彈筒手、毎戦克く任務を完うし崑崙城外に玉碎す

氏は東京市足立區千住仲町の人にして亡父を壽作母をみつと云ひ大正四年十二月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温順而かも積極的にして責任觀念強く殊に大事に臨みては勇敢剛膽であつた。又家庭にありては母に對する孝心頗る厚かつた。氏は幼にして父を喪ひし爲め埼玉縣幸手町の近親者田村清二郎方に於て養はれ昭和六年三月同地の公民學校を卒業した。其の在學中は成績優秀賞状を受くること三回にまでも及んだ。其の後田村氏方にありて鐵業職の手助をしてゐた。

氏は又柔道に嗜味を有し餘暇を以て熱心に修業し昭和十年六月講道館師範加納氏の有段免許を受けた。昭和十二年一月徵兵として麻布歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯し初年兵教育を受けつゝ同地附近の警備に任じてゐた。

支那事變起るや小林部隊に屬し擲彈筒手として昭和十二年七月末勇躍征途に就き北支戦線到着後八月一等兵に進級した。而して八月十六日まで天津附近の掃蕩戦に参加し其の後内蒙古張北に轉進し同地附近の警備に任じ外長城線附近の

戦闘に際しては兵團豫備隊として参加し八月下旬より九月中旬にかけて萬全、張家口、天鎮、聚樂堡附近の各戦闘に險山峡谷の錯雜せる山岳地帯を踏破し毎戦猛烈なる敵火の中を第一線として勇敢に行動し其の機敏適切なる射撃に依り小隊の戦勝に甚大なる貢獻を爲した。又同月二十四日より二十九日に至る下庄村附近の戦闘に際しては天嶮双子山に據る頑敵に對し第一線となりて勇敢に活躍し擲彈筒の威力を發揮して小隊の攻撃を容易ならしめ遂に之を撃退するに至つた。

次いで十月四日未明中隊の崑崙西北隘路の攻撃に際しては先づ下四目村落の敵に對し午前三時より攻撃を開始するや氏は第一線小隊内にありて熾烈なる敵火を意とせず勇敢に前進して逐次敵に近迫し午前四時三十分率先勇猛果敢敵陣地に突入し前線の敵を驅逐して堅固なる陣地帯に侵入し其の一角を奪取した。而して尙小隊の前進を阻止すべく猛威を振ひつゝある敵の自動火器を求め其の陣地を確認して逐次之に猛射を浴びせて制壓し以て小隊の進出を容易ならしめた。次いで十月五日中隊の崑崙外城西北角の村落を攻撃するに當りては第一線小



隊に屬し彈丸雨飛の中を躍進又躍進猛進を續けて遂に敵前五十米にまで進出し爾後突撃準備の爲め晝夜兼行銳意突撃陣地の増強に努めつゝ二晝夜の間敵陣地の各所に配備せられある自動火器を偵知し又我に猛威を逞しうせる掩蓋機關銃を確認し或は土壁の銃眼等に據れる敵に對し逐次猛射を加へて之を制壓又は撲滅し只管突撃準備の完了に努力しつゝありしが十月七日午後三時正面の銃眼より飛來せる一彈左鼠蹊部を貫通し竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや至孝出で、戦線に立つや素より忠孝一道身命を君國に捧げ死生を顧みず彈雨の下勇敢剛膽毎戦擲彈筒手たる重任の遂行に邁進し皇軍擲彈筒の威力を發揮して遺憾なかつた。斯かる勇士を聖戦中途にして崑崙城外の華と散らしめし事は洵に痛惜に堪へざる所である。然かし氏が毎戦敵の堅陣を屠りて中隊の戦勝に貢献したる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も興亞の聖業を守護すると共に一家の前途殊に老母の多幸を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田 畑 清

#### 一死報國の決意固く萬全の山岳戦に奮闘して玉碎す

氏は東京市本所區江東橋の人にして父を金作母をふゆのと云ひ大正五年三月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性快活にして氣概に富み責任觀念強く事を爲す常に積極的であつた。而して幼より兵事を好み軍人たらんことを志望してゐた。

氏は幼時を北海道に於て過ごし昭和五年三月上川郡劍淵高等小學校を優秀なる成績を以て卒業し其の後は家庭に在りて農

業に従事して居たが同八年四月上京し東兩國極東煉乳會社に入り熱心勤務中同十二年一月現役志願兵として麻布歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣せられ洮南及齊々哈爾附近の警備に任じてゐたが其の間軍務に精勵し學術科の成績亦優秀にして一般兵の模範として上官の信頼厚く殊に銃劍術に秀で中隊長より賞状を附與せられ同年七月には一等兵に進級し選ばれて下士官候補者となり將來優秀の幹部を目指して修養並に研鑽に努力を續けてゐた。



支那事變起るや小林部隊第十一中隊に屬し第一小隊第二分隊小銃兵として昭和十二年七月末勇躍北支戦線に出勤したが陣中より兩親宛書面の一節に「身は國家に捧げたるもの、國家の爲めには喜んで斃れる覺悟です。(中略)病氣で死ぬ様なことは絶対にありませんから其の點だけは心配なく。關東健兒の意氣を發揚して戦場の花と散る覺悟です。勇みて赴く戦の庭、笑つて死なん國の爲」と君國の爲め一死奮闘生還を期せざる勇士の面目躍如たるものがあつた。所屬隊は八月上旬天津附近の掃蕩戦に参加し更に同月中旬内蒙古張北に轉進し同地附近の警備に就いた。而して八月十九日「イサーローホ」東南方高地に於て所屬小隊が約三百の敵と遭遇するや敵の兵力は優勢にして戦況我れに不利なりしにも拘はらず小隊長以下志氣頗る旺盛積極勇敢に奮戦し遂に十數倍の敵を撃破することを得た。然るに同夜敵は更に夜襲して來たが小隊長は忽ち之を撃退した。之等の戦闘に於て氏は沈着剛膽克く小隊長分隊長の意圖を體して奮戦し小隊の戦勝に寄與せし所大なるものがあつた。次いで翌二十日長城線の敵「トーチカ」陣地に對する夜襲に際しては氏は暗夜敵彈雨飛の中を果敢に前進し



其の突撃に際しては率先敵陣地に突入し中隊の該陣地占領を容易ならしめた。

八月二十二日萬全附近の戦闘に於て氏の所属小隊は同地附近敵陣地の要點たる水魁南方三角山の占領を命ぜられ午後十時三十分行動を起し午後八時十分攻撃部署を整へ夜襲を決行した。氏は暗夜峻峻なる山地の行動に於て克く分隊長を輔佐し熾烈なる敵機關銃火並に山頂より投下する手榴弾の炸裂する中を物ともせず急峻なる斜面を分隊長と共に勇敢に前進し敵陣地に肉薄中同夜午前二時三十分頃三角山中腹に於て無念敵彈の爲め腹部に首貫銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し小隊は氏の勇敢なる行動と尊き犠牲とにより驕て三角山一番乗りの偉勳を樹つることを得た。

氏や待望の軍籍に入り偶々時運に際會し其の戦陣に立つや大敵も懼れず堅陣も厭はず彈雨の下毎戦勇敢率先奮闘敵を見て勇み悦んで難に赴き只管小銃兵たる任務に邁進し兵の本分を完うして遺憾なかつた。かくの如きは出陣時に於ける決意披瀝の如く身命を君國に捧げ萬死に一生をも希はざる盡忠至誠の顯現に外ならなかつた。あゝ聖戦幾何もなく氏の如き忠勇の士を喪へるは痛惜に堪へざるも奮戦玉碎して以て皇軍の精銳を發揮し暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 谷川 正一

沈勇誠實なる小銃手、奮戦して平原城郊外の華と散る

氏は鳥取縣氣高郡鹿野町の人にして父を定次郎亡母をいくと云ひ明治四十一年十一月二十八日に生れ妻しらずとの間に長

男進を擧げた。資性温厚篤實にして信仰心厚く父母に仕へて孝養至らざる所なく常に恭謙己れを持し家業に精勵し交際亦極はめて圓滿にして町内の模範青年であつた。大正十二年三月鹿野小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて家業を手傳ふ傍ら鹿野青年訓練所に通學し昭和三年十二月同所の課程を修了し翌四年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に勉勵し翌五年七月歩兵一等兵を以て歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召福榮部隊に屬し前川中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來降雨泥濘の難行軍を續け八月下旬二堡及孫家堡の敵陣地を突破し次で王口鎮附近に於て苦戦中なりし第七中隊救援の爲中隊と共に急行し疲勞を意とせず勇戦奮闘敵を撃破して所期の目的を完全に遂行した。

所屬中隊は劉莊の敵陣地を奪取すべき目的を以て九月四日午前九時東子牙鎮を出發劉莊に向ひ前進の途中子牙河西南地區に於て敵と遭遇し激戦の後之を撃退し翌五日猛烈なる敵の彈雨を冒して劉莊の敵陣地前約三百米に近迫した敵は陣地前の泥濘地帯を障礙となし必死の防戦に努めたが我軍亦猛攻に次ぐに猛攻を以てし翌六日午後三時遂に果敢なる突撃を敢行して之を占領した。其間氏は第三小隊第二分隊に屬し或は連絡に或は彈藥補充に任じ劉莊の占領時には中隊の左第一線火線分隊員として勇猛果敢なる突撃を敢行し中隊戦闘に貢献した。



九月十二日に於ける東辛莊の攻撃に於ては左第一線小隊に屬し行動極めて困難なる出水地帯に於て率先勇敢に敵陣地に

肉迫し正確なる射撃に依り敵を壓倒して突撃の動機を作り又同日午後四時半頃孫河西南方に於て第三大隊の小行李が敵の包圍攻撃を受くるや其救援部隊に屬して駆けつけ勇戦奮闘敵に多大の損害を與へて之を撃退した。所屬中隊は續いて南趙扶鎮の敵を攻撃したが氏は亦火線分隊の一員として奮戦し九月十六日之を完全に占領した。

所屬中隊は同月二十一日より月末にかけ滄縣附近の戦闘に参加し續いて敗敵を急追して德縣附近の敵を掃蕩したが氏は第三小隊長加藤少尉の指揮下に或は部落内の頑敵を剿滅して進路を開き又野戦重砲兵隊を掩護して其追撃前進を容易ならしむる等連日連夜に亘り不眠不休の努力を以て軍の要求に即應せしむるを得た。

十月十三日所屬大隊は田島支隊の左側衛となり午前六時岳高舖を出發し平原縣城東北約一里に在る朱家庄に向ひ前進し午後二時朱家庄東北方二軒の大八里庄に到着するや朱家庄方向より敵彈頻りに飛來せる爲所屬大隊は直ちに展開し午後三時半氏の所屬第六中隊は大隊の左第一線として朱家庄に向ひ攻撃前進した。氏は中央第一線小隊の中央分隊に在りて左右の連繫に努め敵の彈雨下に果敢なる躍進を續け午後六時十五分敵前百米に近迫し遂に敵陣地に突入し勇戦奮闘敵に多大の損害を與へ午後八時敵を潰亂敗走せしむるに至つた。然るに此時氏は右側方より飛來せる敵彈の爲無念にも右大腿部に貫銃創を受け其場に打倒れ其後平原野戦病院に收容され更に德縣野戦病院に後送され手厚き治療看護を受けたが其甲斐なく十一月九日惜しくも北支戦線の華と散つた。

氏や夙に精神修養に努め確乎たる信念の下に人生を淨化し軍隊教育に依り更に之を玉成し郷黨青年の中堅として重きをなして居た。今次聖戦に参加するや突破戦線貫に百數十里其間平素の修養と相俟ち克く各種の困苦缺乏に堪へ劍電彈雨の裡從容自若能く自己の任務に邁進し戦勝獲得の爲尊き礎石となつた。斯る誠忠にして有爲なる士を哀ふ誠に痛惜の情を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に牢記せらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家殊

に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田口義夫

#### 立哨中優勢なる敵の夜襲を受くるも守地を離れず部隊の危急を救ふ

氏は岡山縣津山市安岡町の人にして亡父を武之進母をぎんと云ひ大正五年四月二十四日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして品行方正又義務心頗る旺盛で近代稀に見る模範青年であつた。昭和四年三月津山西尋常小學校を卒業し其後大阪市製麵包商店に徒弟として入店し勤続約八ヶ年に及び誠實業に服し且又極めて主人思ひの模範従業員として大阪製麵包東部研究會々長及び大阪菓子同業組合長の名を以て表彰されて居る。昭和十二年一月現役兵として岡山歩兵聯隊へ入營し日夜軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや同年七月赤柴部隊に屬し高田中隊の小銃分隊員として勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し降雨泥濘を冒して難行軍を續け楊柳青及び當城附近の敵軍を掃蕩し續いて靜海縣東方地區の敵を攻撃する目的を以て八月二十二日午後一時頃七里堡を出發し途中四邊庄附近に於て我が前進を阻止せる敵を一蹴し二十三日午前五時漸く友軍第一大隊の右翼に連繫し西邊庄に據る敵陣地に對する攻撃準備の態勢を整ふるを得た。氏は三島少尉の指揮下に火線分隊員として展開し午前五時四十分より攻撃前進に移るや敵の機關銃小銃火は猛烈にして加ふる敵迫撃砲は身邊に落下炸裂して物凄く且高粱畑に潜在せる頑敵より狙撃を受け危険極まりなかりしも氏は毫も之を意とする事なく一意攻撃前進に努め其正確迅速

なる射撃に依り敵を壓倒し午前八時三十分遂に西邊庄陣地の一角を占領し更に西邊庄の左部落の家屋に據る敵機關銃を攻撃し以て中隊主力の攻撃並に隣接せる末永大隊の攻撃前進を容易ならしめた。

同日午後四時二十分頃所屬中隊は西邊庄の敵陣地を占領し更に靜海の東方部落たる東窟附近の敵を攻撃して該地を占領し其夜同地の警備に任じて居た。然るに同夜午前二時頃氏は第一複哨として立哨中敵兵約三百名我が前面に夜襲して來

た。氏は機を失せず之を報告すると共に猛射撃を浴びせて之に多大なる損害を與へた。衆を待める敵部隊は小癩にも尙も猛襲し來り遂に氏の前面五米に達した。豪氣の氏は更に動ぜず斷乎とし守地を固守して猛撃中無急にも敵彈飛來胸部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は氏の勇敢なる奮闘に依り急遽應戰準備を完了し間もなく此正面の敵に應戦し敵は竟に多數の死體を遺棄し潰亂敗走するに至つた。

抑々靜海附近の戰鬪たるや氏の所屬部隊は豪雨と泥濘を冒して河北平野を南下し八月二十一日朝獨流鎮を出發し靜海一帶の敵陣地攻略を企圖したのであるが二十二日は豪雨霽れて炎熱百餘度敵は各村落の土壁を利用し銃砲火器の猛威を發揚して皇軍の南下を極力阻止し津浦線の咽喉部を形成する同地方を確保せんとして頑強なる抵抗を試みた次第而して東窟部落たるや牙營靜海保持の爲極はめて緊要の地點たりしを以て之が奪回に努めたのである。然るに氏等の忠誠武勇の奮闘に依り迅速に之を撃破し得たるは北支戰史に特筆大書すべき功績であつた。



氏や終世を通じて至誠の人黙々として幾多の辛酸を克服し劍電彈雨の中に克く上官の命に従ひ率先常に陣頭に進みて頑敵を屠り愈々難局に際會するも頑として守地を退かず既得の武技を遺憾なく發揮して多數の敵を射殺し皇軍の爲萬丈の氣を吐き所屬中隊の危急を救出するを得た。あゝ忠烈悲壯前途有爲の士を羨ふ眞に痛惜に堪ざる所であるが其功績たるや芳名と共に皇軍戰史に牢記さるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田部達郎

負傷に屈せず敵の側防機關銃陣地を占領し更に率先壘上に突入して玉碎す

氏は島根縣仁多郡八川村の人にして父を田部傳重亡母をタミノと云ひ大正五年七月十五日に生れ田部定子の養子となり妻道野との間に長女榮子を擧げた。資性温良にして明朗、孝心深く一家の中堅となり家業に精勵し恭謙身を持ち村内の模範青年として矚目されて居た。昭和五年三月八川尋常小學校を卒業後直に島根縣立横田農學校に入學し同七年三月同校を卒業其後は家庭に在つて家業に精勵する傍ら村内の青年訓練所に入所し本科を終へ更に研究科へ入り勉勵中同十二年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し成績常に優秀殊に射撃に習熟し所屬大隊長より賞状を附與せられた。

支那事變起るや間もなく福榮部隊に屬し松本中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。北支到着以來は降雨泥濘を冒して難行軍を続け九月三日には夏庄に據る敵を一蹴し翌々五日には池田將校斥候長の指揮下に斥候となり大十八戸附近の敵情

搜索に従事し豪膽熱心能く斥候長を輔佐して所望の情報を擧げ翌六日朝郝庄附近に蟠居せる敵の退路遮断の任務を有する池田小隊に屬し同部落東南角より突撃を執行して中隊主力の攻撃を容易ならしめ同日午前中に此部落を完全に占領するを得た。此日午後優勢なる敵は此部落の奪回の爲大舉來襲したが氏は中隊の右第一線の火線分隊に在りて沈着正確なる射撃を以て數多の敵を射殺して中隊戦鬪に大なる貢獻をなし遂に敵を潰亂敗走せしむるに至つた。

續いて馬廠附近の戦鬪には馬廠河畔の掃蕩戦に滄縣附近の戦鬪には周庄子及李家碼頭四窩頭附近の戦鬪に参加し其間或は中隊豫備隊となり或は第一線の火線分隊員として勇敢機敏に行動し以て中隊戦鬪に寄與せる所多く九月二十七日より十月月上旬にかけて德州に向ふ追撃並に同地方に於ける敗殘兵の掃蕩に勇戦し十月十一日より平原附近の既設陣地に據る敵に對し攻撃を準備した。



た。所屬大隊は十月十三日平原城の西方約六百米に在る和莊の敵を北方面より攻撃すべき任務を受け午前十時行動を起し午後五時三十分より攻撃前進を開始した。所屬中隊は當初大隊豫備隊として第一線の後方に跟隨して居たが敵前約五百五十米に達するや第一線に増加を命ぜられ氏は中隊の左第一線小隊第四分隊内に在りて前進の時機を待つて居た。正莊の敵陣地は高さ一丈餘の土壁を利用して銃眼を設け部落の周圍には二條の鐵條網及水濠を張りまわした堅固なる陣地にして平原

陣地帯の一要點を形成して居た。敵は我が第一線の近迫するに従ひ逐次猛烈なる火力を浴びせ來りしが氏は泰然自若く分隊長の掌握下に一進一止午後六後四十分頃遂に敵前七八十米の線に達し突撃準備を完了するや中隊長の突撃の令と共に率先水濠に飛び込み更に鐵條網を乗り越えんとする一刹那敵手榴彈の爲左頸部に受傷した。氏は之に屈せず腰にせるタオルを以て首を縛り齊鹿一等兵と共に敵の輕機銃陣地に突入して之を占領した。斯くして更に部落の一角に據り頑強に抵抗する敵に對し豪膽にも土壁を乗り越え率先突入の瞬間再び腹部に首貫銃創を受け竟に行動不能となり其場に倒れ野戦病院に收容せられたが手厚き看護治療の甲斐もなく同月十五日午前五時空明け行く頃從容として北支の華と散つた。

所屬隊は氏等の勇戦に依り同日午後七時遂に正莊を占領するを得た。

氏の郷に在るや明朗にして質實剛健而かも村内消防手等として公共に盡力し村内青年の中堅をなし又出で軍に従ふや突破戦線實に百里に垂々とし其間幾多の困苦缺乏を克服し累次の戦鬪に参加して常に率先陣頭に起ち頑敵を粉碎し而して其最後戦場の奮戦たるや身に重傷を負ふも屈せず必勝を期しつゝ我に最も危害を與へありし敵の側防機關銃陣地に飛込んで之を潰走せしめ友軍の攻撃動作を著しく容易ならしめ更に率先土壁を攀登して其一角を占領せんとせる剛膽不敵の行動は寔に是れ皇軍歩兵の本領を發揮し得て遺憾なく一般軍人の鑑とすべきであつた。斯かる誠忠慍悍の士を喪へるは痛惜哀悼の情に堪えざるも氏の動功たるや北支戦史に輝きて其芳名は千載に傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 瀧 下 潔

## 勇猛剛膽の輕機關銃射手、屢々偉功を奏して滄縣に玉碎す

氏は兵庫縣城崎郡長井村の人にして父を嘉藏母をつねと云ひ大正五年五月二十四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順にして而かも進取の氣象に富み不屈不撓負け嫌ひの意地をも有つて居た。其親に仕ふるや孝心厚く一村の模範青年とも謂ふべき人格者であつた。昭和九年三月長井尋常高等小學校を卒業し其の後は家に在りて親を扶け農業に精勵してゐた。昭和十二年一月徵兵として畿外志願を爲し鳥取歩兵聯隊に入營し爾來軍務に精勵學術の成績良好就中銃劍術に勝れてゐた。而して四月上等兵候補者に選ばれ七月一等兵に進級した。

支那事變起るや長野部隊第九中隊に屬し第三小隊第六分隊輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十日中隊が小王莊並に流河鎮部落の殘敵掃蕩を命ぜらるゝや氏は猛火を冒して急進中十數名の敵が兩村落中間に於て高粱畑に潜伏して我が急進を遲滞せしめんとしあるを發見し機を失せず之を猛射し瞬時に之を撃滅して中隊の前進に支障なからしめた。又同地に於て午後五時頃敵は迫撃砲機關銃の掩護射撃下に反覆數回逆襲し來りしが氏は剛膽沈着都度敵を至近距離まで引寄せ猛烈なる急射を浴びせて殲滅的打撃を與へ中隊の任務達成を容易ならしめた。

九月下旬滄州附近の攻撃開始せらるゝや所屬中隊は九月二十日早朝より行動を起し二十二日午前六時十分戰鬪を開始するに至つた。而して九月二十三日所屬中隊の姚官屯驛攻撃に際して氏は猛烈なる敵彈の下數線の水濼を突破し迅速に敵に近迫し正面及右側方のトーチカ内の機關銃及驛本屋内銃眼の敵を逐次に沈黙せしめしのみならず我が鐵條網破壊班不幸にも敵の猛射を受け死傷續出し爲めに破壊口の完成遅るゝと見るや氏は鐵條網を猛射し其の射彈に依り瞬時にして別に破壊

口を完成し以て小隊の突撃準備を完了せしめ次で小隊突撃を起すや氏は猛烈なる敵手榴彈下を急進して南端陣地を占領し退却中の敵に殲滅的射撃を浴びせ聽て線路東側姚官屯部落より約三百の敵逆襲し來るや克く沈着して正確なる射撃を爲し多大の損害を與へて之を撃退した。爾後中隊は敵を追撃して二十五日滄縣驛を攻撃し次で滄縣城に入城し城内の掃蕩を爲したが終始勇敢に奮闘以て中隊の任務達成を容易ならしめ引續き二十五日夕娘々河南方舞東河占領に際し斥候として前進

中十數名の敵と部落北端附近にて衝突した。此の時も氏は直ちに之に猛射を加へて撃退し次いで部落に突入せんとする際惜しくも一彈氏の胸部を貫通し竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦陣に立つや彈雨の下毎戦實に勇敢沈着常に其の射撃機宜に適し而かも毎時精度良好或は伏兵を撃退し或は鐵條網に突撃路を開設し殊に逆襲部隊を寸前に引寄せて撃滅せるが如き大膽不敵の行爲を以て皇軍輕機關銃の精銳を發揮し中隊の戦勝に寄與せし所甚大であつた。實にかくの如きは輕機關銃射手たる重責の存する所身命を君國に捧げて全魂唯々其の任務に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべ



きである。聖戦中途此の忠烈なる良射手を喪ひしは洵に痛恨に堪へざるも其の拔群の武功は燦として皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世不朽に語り傳へて範とせらるべく英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又一家の守護神として遺族に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 田村正四郎

## 輕機彈藥手、克く其の任を果たして更に黃村敵陣に突入して玉碎す

氏は群馬縣邑樂郡西谷田村の人にして父を惣八母をあきと云ひ大正四年十二月二日に生れ未だ獨身であつた。資性實直にして忍耐心強く業務に對しては熱心精勵であつた。昭和五年三月郷里の小學校高等科を卒業し其の後東京に出で入營時まで君塚隈太郎氏方に勤務し傍ら青年學校に通學して其の課程を卒業した。昭和十二年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵し其の成績は良好であつた。

支那事變起るや森田部隊第十中隊に屬し第二小隊第二分隊輕機關銃彈藥手として昭和十二年八月十四日勇躍征途に就いた。而して北支戰線に到着し九月十二日より十四日に亘る永定河々畔股家舖門村附近の戰鬪に於ては第一線となり彈雨の下濁流を渡河して對岸の敵を撃攘し翌十五日拒馬河畔東茨村附近の戰鬪に際しては大隊豫備隊内にありて敵彈下に陣地の構築及警戒偵察等に任じ十六日には尖兵に屬して蔣各莊に向ひ前進し遂に該部落を占領した。然るに其の夜敵は健氣にも同地奪回の爲め屢々攻撃して來たが中隊は其の都度勇戰奮闘以て之を撃退し十七日より二十日に亘る平漢線西側地區澤畔店附近の戰鬪に際しては中隊は森田部隊の豫備隊として平安店の殘敵を掃蕩し續いて二十一日我が騎兵部隊が大冊河々畔東蔣部落に於て敵の包圍攻撃を受くるや氏の小隊は之が急收容の爲め該地に急行し敵を撃攘して無事騎兵隊を收容した。之等の戰鬪に氏は危険と勞苦を顧みず常に勇敢に奮戦し以て小隊の任務達成を容易ならしめた。

九月二十一日大冊河々畔黃村附近の戰鬪に際して所屬隊は當日午後十一時より行動を起し翌二十二日午前八時二十分より戰鬪を開始した。該地附近の敵陣地は保定を核心とする敵の最後の抵抗線なりしを以て其抵抗も亦頗る頑強を極はめた。

愈々攻撃開始せらるゝや氏は彈藥手として篠つく雨の如き敵彈下に於て一意彈藥の補充に奮闘し以て射手をして澁滞なく輕機の威力を發揮せしめ逐次敵の第一線第二線陣地を奪取し引續き第三線陣地の攻撃に移るや敵の射撃は益々猛烈を極はめ且前代流方向より一部の敵出撃し來る等中隊の攻撃は一時困難となるに至つた。此の時氏の所屬第二小隊は大隊の最左翼に位置し敵の右翼を包圍する如く攻撃前進しつゝありしが第二分隊は更に其の外翼にありて攻撃せし爲め前代流方向より側射背射を蒙り攻撃進捗は一層の困難であつた。然し氏は之に屈せず我が猛烈なる射撃に伴ふ多數の射耗彈を活潑に銃側に補給し敵の右翼側に對し一層猛射を加へしめ遂に敵を壓倒して小隊突撃の動機を作るに至り次で小隊愈々敵陣地に突入するや敵も亦さるもの頑強の抵抗に出でたる爲め茲に激烈なる白兵戦は展開さるるに至つた。此の間氏は彈藥手なりしも小銃兵と同じく積極勇敢白刃を揮つて格闘し敵二、三名を噓し將兵一同かくして敵を殆んど潰滅し更に遁走する一部を追ひ陣内深く突進せんとして前進に移るや斜前方に



俄然敵の重機關銃現はれ猛射を浴びせ來り爲めに小隊長は戦死を遂げた。かくと見たる氏の分隊長は獨斷此の敵重機關銃に向つて射撃を開始せしが忽ちにして射手たりし小林上等兵重傷を負ひ氏は機を失せず直ちに之に代りて射手となり射撃を開始せしが氏も亦忽ち左前膊に貫通銃創を受くるに至つた。然し尙も之に屈せず沈着正確なる射撃を續け其の有効なる射弾は遂に見事此の敵重機を沈黙せしむるに至つた。依つて小隊は此の機を逸せず更に猛進し氏亦之に協力して敗敵に猛火を浴びせ多數の敵を噓し殆んど當面の敵を潰滅することを得た。

此の前進中恰も午前十一時四十分第二弾氏の胸部を貫通し氏は惜しくも竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏等の勇戦奮闘により中隊は午後零時三十分さしも頑強なりし第三陣地を突破することを得た。

抑々第二小隊突撃の誘因は輕機分隊の奮闘に基因し究極する所彈薬手たる氏の活躍に負ふもの頗る大であつた。而かも紛戦となるや積極格闘敵を啗し或は傷つくも屈せず射撃を繼續して戦果の擴張に奮闘す。實にかくの如きは職分の存する所身命を君國に捧げ死を鴻毛の輕きに致し驚るゝまで戦はんとする盡忠赤誠の發露にして眞に軍人の鑑とすべきである。然るに聖戦の初期氏の如き忠勇の士を哀ひしは惜みても餘りある次第である。然かし氏が赫々たる拔群の功績は千載の下皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世に語り傳へ不朽に讃へらるべく不滅の英魂は護國の神となり永へに靖國の神域に神鎮まりて皇國を守護して又遺族に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 高木 一郎

#### 機關銃彈薬手積極活躍機關銃の威力を發揮せしめ惜しくも空爆に散る

氏は栃木縣那須郡西那須野町の人にして父を庄吉母をサトと云ひ明治四十四年一月三日に生れ妻トモとの間に實、誠子の一男一女を擧げた資性濃厚實實にして不屈不撓の氣概を有し事を爲す積極的にして責任觀念旺盛郷土の中堅青年であつた。大正十二年三月西那須野尋常小學校を卒業し爾後一意家業たる農業に精進してゐた。昭和七年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同八年一月滿洲事變に出動し四周匪團の中にありて至難の警備に任じ又屢々討伐戦に参加し滿洲の治安維

持に貢獻し其の功に依り勳八等に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊梁島機關銃中隊に編入彈薬小隊豫備銃手として勇躍征途に就いた。而して北支戦線到着後九月十三、十四日永定河の渡河作戦に於ては氏の彈薬小隊が水深胸部に達する永定河と腰部を没する兩岸の泥濘地帯を渡渉するに當り氏は率先々頭に立ちて渡河點の淺き部分を偵察確認し不屈不撓積極的に活躍し他の銃手の數



倍も河中を往復して彈薬箱及分解せる車輛を逐次に搬送し困難なる彈薬小隊の渡河を遅延せしむることなく短時間に完了せしめ次で先きに急進せる戰銃隊への追及を速かならしめ殊に渡河後は一層猛烈なる敵弾下を機を失せず追及し當時激戦に伴ふ射耗弾多かりし銃側の彈薬を適時に補充して戰銃隊の射撃に毫も支障なからしめ中隊が第一線歩兵の敵陣奪取に對する協力を最も有効に達成せしめ爾後追撃に移るや戰銃隊をして彈薬補充の懸念なく急追を敢行し敵に決定的打撃を與ふことを得しめた。次いで九月十八、十九日平漢線西側地區南北義安の戦闘に於ては大隊が南義安に進出するや右岸地區に残敵ありとの報に接し機關銃中隊は第五第八中隊の中間に展開して攻撃を開始した。氏は敵彈雨飛の下之を意とせず銃陣地と彈薬小隊との間百米の距離を疾驅往復して彈薬補充に任じ常に銃側の彈薬を充實して其の射撃に支障なからしめ銃隊をして大隊の渡河戦闘を容易ならしむることを得しめた。

續いて九月二十一日東釜山附近の追撃戦に於ては敵を急追中の大隊が敵飛行機の攻撃を受くるや中隊は直ちに全力を舉

けて對空射撃を開始した。此の際氏は第三分隊七番銃手として専ら彈藥補充に任じありしが各駄馬を疎開せしむべき命令下るや之が傳達に一番のみにては到底機を失する憂ありと見た氏は當時銃側の彈藥既に充實しありしを幸ひ自己の任務以外なるも獨斷一番に協力して爆彈火網内を疾驅し各駄兵に之を傳達し終りて直ちに自己の位置に復さんとして再び疾驅中偶々附近に落下せる爆彈炸裂し無念其の爆創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏の獨斷勇敢機宜に適せる傳達により中隊の駄馬を迅速に爆彈火網外に導くことを得其の損害を減少し爾後の追撃を支障ならしむことを得た。

氏の戦陣に臨むや機關銃の射撃に緊要不可缺の彈藥手として不屈不撓極果敢彈雨の下家を忘れ身を棄て或は數人分の活躍となり或は長距離の彈藥搬送となり或は獨斷機宜の傳令となり只管銃隊の戦力發揮に全力を傾倒して遺憾なかつた。かくの如きは是れ滅私君國に殉せんとする盡忠至誠の發露にして眞に軍人の鑑と謂ふべきである。氏や惜しくも北支の華と散りしも其の抜群の武勳は皇軍戦史に輝き累次の聖戦に参加し興亞の礎石となりたる功績は萬世に誦はれ其の英魂は不滅に生き護國の神となりて皇國を守護すると同時に一家の守護神ともなり愛兒の遺志繼承を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 高橋兼晴

#### 苦戦中傳令の任を果たして再び復讐奮戦張家口郊外に玉碎す

氏は埼玉縣北足立郡片山村の人にして父を兼吉母をシチと云ひ大正四年十月五日に生れ未だ獨身であつた。資性活潑負

け嫌ひの氣性を有し而かも口舌を飾らず實行力に富み大事に臨みては沈着剛膽であつた。而して日頃「自分は日露の役に乃木將軍の麾下に出征せる父上に負けないやうに如何なる困難があらうとも御國に捧げた身であるから斷然立派な働きをする」と言ふてゐた。昭和五年三月片山高等小學校を卒業し其後は父を扶けて農業に従事してゐた。昭和十一年一月徵兵として麻布歩兵聯隊に入營し爾來軍務に精勵中同年五月滿洲に派遣洮南に駐屯同地附近の警備に任じ此間九月東邊道に出動匪賊討伐に参加する等滿洲治安肅正に貢献して居た。



支郷事變起るや小林部隊第九中隊に屬し第二小隊第二分隊小銃兵として昭和十二年七月末勇躍北支戰線に出動し直ちに天津附近の掃蕩戦に参加し更に同月中旬内蒙古張北に轉進し同地附近の警備に服してゐた。八月二十一日外長城線附近の戦闘に際しては所屬分隊は歩兵砲中隊に配屬せられ之が掩護に任ぜしが我砲兵及聯隊砲が本道西側の望樓に對し猛火を集中し其的確なる射撃により該望樓の制壓せらるゝや此機に乗じ伊藤中尉指揮下に氏は勇猛果敢に望樓の高地を攀登して銃剣を揮つて突撃を敢行し尙ほ望樓に踏み留まり頑強に

抵抗せる殘敵と格闘之を刺殺して午前十時遂に該望樓を占領しチェッコ機關銃一小銃二小銃彈二千發を鹵獲した。爾後引續き張家口に向つて敵を追撃し萬全附近の戦闘に参加し次で同月二十五日に於ける張家口附近の戦闘に際しては所屬中隊は同日午前九時頃より攻撃を開始せしが氏の所屬分隊は大隊の左翼掩護の任務を受け揚家庄西南地區に進出した。然るに分隊前面の敵は兵力我れに十數倍し熾烈なる火力を浴びせて來た。氏はかゝる敵彈雨飛の中分隊長指揮下に勇



敢に躍進又躍進其停るや沈着正確なる射撃を爲し敵に多大の損害を與へしが敵は我分隊の進出に伴ひ其兵力の寡小なるを看破せしものゝ如く逐次高粱畑を利用して三方より我れを包圍的に攻撃して來た。かゝる戦況の下分隊は惡戰苦闘三時間餘に及び負傷者續出するに至りしも氏は尙も之に屈せず分隊の最右翼にありて沈着冷靜毎發必中の射撃を以て逐次敵を殲し奮戦を續けたが竟に彈藥も缺乏を來すに至り分隊長より現況を大隊長に報告すべく傳令を命ぜらるゝや直ちに其の任に就き當時約千米を隔つる大隊本部に向ひ彈雨の中を勇敢に一進一止しつゝ巧に敵の重圍を脱し幸にも微傷だに負はず目的地に到達し其使命を完うした。而かも報告終るや息つく暇もなく再び敵の集中彈下を飛鳥の如く潜りぬけて分隊に復歸し苦戦中の分隊火線に加はり奮戦中午後二時三十分頃無念前頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦線に立つや日頃披瀝せし決意の如く身命を君國に捧げて父君の武功を辱しめざらんことを固く期してゐた。果せる哉其決意と忠誠の迸る所彈雨の下或は率先突入敵を殲し兵器を鹵獲し或は大敵の包圍を受くるも懼れず沈着必中の射撃を爲し或は死生の地に勇躍重大使命を果たし殊に任務終るも急ぎ苦戦中の分隊に復歸し战友と枕を並べて共に死なんとせる如きは古來繼承尊重せる日本精神の精華にして眞に軍人の龜鑑と謂ふべきである。氏や征戰中途内蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも奮戦玉碎して以て宿志を貫徹し今や父君に劣らぬ拔群の武功を奏し皇軍の精銳を發揮して暴慢不遜の敵を膺懲驅逐したる戦績は千載の下皇軍戦史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 高塚清一

### 勇敢沈着小銃兵の本分を完うして外長城戦の幸と散る

氏は東京市本所區厩橋三丁目の人にして父を玉吉母をよしと云ひ大正四年八月三日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順眞摯にして責任觀念強く諸事積極的にして大事に臨み沈着勇敢であつた。昭和三年三月本所區明德小學校尋常科を卒業し其後は淺草區山上商店に入り熱心業務に勉勵し主家並に諸人の信用厚かつた。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營し爾來孜々として軍務に精勵中同年五月上旬滿洲に派遣齊々哈爾附近に在りて熱心緊張警備に任じ此間同十二年三月四日より同月十四日まで海倫縣綏楞縣下に於ける討伐に参加し四月九日綏楞縣喪家灣附近の戦闘に加はり三月十五日より四月九日までは龍鎮縣下に於ける討伐に参加する等滿洲の治安肅正の爲貢獻せる所多かつた。此間昭和十一年七月には精勳章を授けられ十一月には一等兵に進級し銃劍術の成績特に優秀にして競技會に於て大隊長より賞状を附與せられた。支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第二小隊第一分隊小銃兵として昭和十二年七月末勇躍北支戦線に出動した。斯くて八月中旬以來所屬中隊は天津地方の掃蕩戦に或は張北附近の警備に任ぜしが此間氏は不眠不休緊張裡に熱心精勵克く所命の任務を完うした。

八月二十日所屬部隊は外長城線附近に進出せる敵を攻撃した。此の時所屬中隊は張北南方長城線に據れる敵に對し同日午前八時より行動を起し逐次敵に近接し午後二時其主陣地線上(へ)のトーチカ陣地に對し展開第一第二小隊を第一線とし攻撃を開始した。氏は右第一線小隊の右火線分隊内にありて攻撃前進を起すや敵は猛烈なる射撃を浴びせ來りしも之を物ともせず克く分隊長の指揮に従ひ沈着正確なる射撃を以て敵を制壓し其前進に當りては躍進を續け逐次敵に近迫中敵前五

六百米の距離に達した。此の時右側前方より自動火器を有する敵の猛烈なる斜射を受け小隊の前進は頗る困難となつた。かくと見たる氏の分隊長は分隊に此敵自動火器を射撃すべく號令するや氏は危険を顧みず身を此方向に乗り出して此我小隊に危害を加へつゝある敵の自動火器に對し正確必中の射撃を加へ之を制壓し以て小隊の攻撃前進を容易ならしめ、かくして奮戦を繼續中惜しくも頸部より肩胛部に掛けて貫通銃創を受けた。然かし剛氣の氏は之に屈せず尙も戦闘を繼續せん

として起ち上つたが如何せん重傷なりしを以て再び倒れ竟に復た起つ能はざるに至り收容せられ張北野戰病院に於て手厚き醫療を受けつゝ「残念」との心境を漏らしつゝありしが承德陸軍病院まで後送手當の甲斐もなく八月二十八日該病院に於て竟に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏の奮戦により當日午後七時三十分頃頑強に抵抗せる(へ)のトーチカを奪取することを得た。



氏の戦線に立つや彈雨の下卒先勇進其停りて射撃するや沈着正確而かも傷つくも尙屈せず戦はんとし只管小銃兵たるの本分に邁進し遺憾なかつた。殊に側方に自動火器現はるゝや身の危険を顧みず單獨挺身必中の射撃を加へ小隊戦勝の誘因を爲せし如きは奮戦格闘にも優る功績と謂ふべくかくの如き行爲は畢竟身命を君國に捧げ斃れて後己まんとする盡忠至誠の發露と謂ふべきである。氏や緒戦に於て惜しくも内蒙の華と散りしも一戰玉碎して以て皇軍の精銳を發揮し開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 園田義雄

模範的輕機彈藥手、竟に人合庄の敵陣に玉碎す

氏は鳥取縣鳥取市下臺町の人にして亡父を猪松母をまさと云ひ大正元年十二月一日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實勤勉にして不屈不撓の氣概を有し責任觀念旺盛の人であつた。大正十四年三月醇風小學校尋常科卒業後家運復興の意氣に燃え商人として立たん事を志し時計商に見習奉公し一意業務に精進し後ち獨立して自宅に職場を設けて開業し着々初志貫徹に邁進してゐた。又清貧の中にも老母に對しては孝養至らざるなく又克く多數の姪を養育した居た。昭和八年一月徵兵として鳥取歩兵聯隊に入營同年二月滿洲に派遣一面坡綏芬河附近の警備に任じ此間同年五月六日より十八日迄東部國境附近の討伐戰に参加した。此等の功により勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり翌九年四月内地に歸還し十一月滿期除隊した。在隊間は克く軍務に精勵し精勳章を授けられ除隊に際しては善行證書を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召長野部隊第十一中隊に編入第一小隊第一分隊輕機關銃第四彈藥手として八月九日勇躍征途に就いた。北支に上陸後は暫く天津附近の警備殘敵掃蕩に任じ次いで津浦線に沿ひ南進し九月二十二日より滄州攻撃に参加し所屬中隊は二十二日大隊主力の攻撃を容易ならしむべき任務を以て北部人合庄東側陣地の側面に向ひ攻撃すべく未明行動を起し午前六時より攻撃を開始した。氏は此の時中隊の左第一線小隊の火線内にありて雨下する敵彈下を物ともせず激戰に伴ひ射耗多き輕機關銃彈藥の補充に活躍し常に銃側に彈藥を充實して分隊の射撃に遺憾なからしめ殊に北部

人合庄東北端突角陣地より我輕機を猛射しつゝある敵に對し剛膽にも獨斷にて沈着正確なる狙撃を爲して之を制壓し其前進に當りては分隊長指揮下に率先勇敢躍進に躍進を重ね遂に敵前百五十米に達し戰鬪は愈々激烈高調に達した。氏は此激戦に益々奮勵して彈藥運送に活躍しては小銃射撃を最高度に發揚し愈々機熟して突撃の命令下るや勇猛果敢一舉敵陣地目掛けて鐵條網の破壊口を通過して突入した。然るに其突進中無念胸部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。時に午前七時二十五分であつた而して中隊は中隊長以下多數の死傷者を生じたるも中隊長初め氏等勇戦奮闘の尊き犠牲により遂に午前十時さしも頑強に抵抗せる北部人合庄東側陣地を完全に占領することを得た。



氏は生來堅忍奮闘の人其戰陣に臨むや輕機彈藥手として死生を超越し不屈不撓萬難を排して彈藥の運送に努め其銃側の彈藥充實するに至れば擡頭の危険を顧みず積極獨斷沈着必中の狙撃を爲して輕機の危害を排除する等常に分隊の威力發揮に専念して遺憾なかつた。實にかくの如きは職分の存する所身命を君國に捧げ盡れて後已む盡忠至誠の人にして始めて克くし得る所眞に軍人の範と謂ふべきである。氏や參戰間もなく北支の華と散りしは惜しみて尙餘あるも一戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は皇軍戰史に輝き其英魂は不滅に生き護國の神となり神靈尙も皇國を守護すると共に一家の守護神ともなり老母の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 征矢 四郎

篤實にして勇敢なる小銃手、望海庄に奮戦し主力の渡河を掩護す



氏は茨城縣多賀郡助川町の人にして父を鶴吉母をくりと云ひ大正五年十二月三十一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實孝心深く又長上を敬ひ幼者を勞はり寡言實行克く家業に精勵し業務の都合に依つては夜間提灯を用ひて作物に施肥を行へる事もありしが如きは責任觀念に富み且篤農の一端を立證するものであつた。昭和六年三月助川小學校高等科を卒業し爾後家庭に在りて家業に従事する傍ら青年訓練所へ入所して精勵格勸教練査閱官より表彰を受け又同十年七月には助川商業青年學校第五學年に編入せられ引續き勉勵し同校研究科に於て勉學中同十二年一月現役兵として水戸歩兵聯隊へ入營し熱心精勵良成績を擧げて居た。

支那事變起るや同年八月石黒部隊に屬し第三中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來降雨泥濘中に難行軍を續け九月中旬永定河々畔に進出した。永定河々畔の渡河戰鬪に於ては所屬中隊は旅團豫備隊となり側背の警戒掩護に任じ氏は其の際斥候或は連絡兵として積極的に任務を遂行し以て中隊の任務達成に寄與した。

永定河々畔の戰鬪に戦勝を得たる所屬部隊は敵を急追して拒馬河々畔に之を壓迫した。氏の所屬中隊は九月十五日所屬

大隊に復歸し勇躍追撃隊として前進し殊に同夜は主力部隊の渡河を容易ならしむべき重任を帯び待望の第一線部隊の急先鋒として夜半果敢なる敵前渡河を敢行し速かに對岸に進出したが午前二時四十分頃に至り敵は其の優勢なる兵力を恃み迫撃砲を有する約一箇大隊の兵力を以て望海庄附近に逆襲して來た。敵は四周より我を包圍し小銃機關銃迫撃砲彈の亂射亂撃を浴びせ來り忽ち凄慘悲壯の阿修羅場と變はつた。氏は第一線火線分隊員として沈着剛膽毫も怯まず正確迅速なる射撃を以て數多の敵を射殺し力戰奮闘拂曉迄に完全に之を撃退するに至つた。惜しいかな本激戦に於て氏は敵彈の爲め重傷を負ひ後方に收容せられたが手厚き看護手當の甲斐もなく竟に北支戦線の華と散つた。

氏や郷に在りては誠實穩健の模範青年であり又在隊間は誠心誠意軍務に精勵し克く上官の教訓を迎へ又戰友に交はるや骨肉の如く親しみ一隊將兵の愛敬を受けて居た。而して愈々聖戰に参加するや克く降雨泥濘或は飢渴等幾多の辛酸を克服して志氣益々旺盛更に寡兵衆敵と相闘ふや神色自若習熟既得の射撃技能を發揚して赫々たる武勳を奏し以て所屬中隊の重任達成に至大なる礎石となつた。あゝ斯かる忠誠勇敢なる士を早くも聖戰の初期に喪ふ眞に痛惜に堪へざるも氏等の尊き犠牲に依り其の後兵團主力は拒馬河の大障礙を突破し其の南岸地區の堅壘を粉砕するに至つた。其の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられ芳名は後世に傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 辻 秀 雄

#### 勇敢なる傳令、壯烈身を以て舊關嶺の大逆襲を阻止す

氏は三重縣安濃郡片田村大字片田の人にして父を愛吉母をしげと云ひ大正五年十月八日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和六年三月郷里の小學校を卒業し次で三重縣立松阪商業學校に入り同十一年三月同校卒業後直ちに株式會社高島屋に就職し大阪市長堀ストアに勤務し次いで南海ストアに轉動し入營時に及んだ。資性溫良實直且つ明朗にして感謝報恩の念厚く商業學校在學中も父祖が幾十年となく孜々として農業に従事し奮闘努力した其の御蔭を以て自分が何不自由なく中等教育を受けさして貰へるのは誠に有難い事だと常に感謝しつゝ勉強して居た。

昭和十一年十二月現役兵として朝鮮大邱歩兵聯隊に入營し熱心軍務に勉勵し翌年六月一等兵に進んだ。

支那事變勃發するや氏は鈴木部隊機關銃中隊に編入せられ昭和十二年七月十六日勇躍北支に向け征途に就いた。北支到着後は連日の豪雨に各地出水し道路は泥濘膝を没し軍の行動頗る困難を極はめしが氏はあらゆる困苦を克服して日夜警戒搜索の任に服し七月二十七日には第一小隊長傳令として團河村の戰鬪に参加し敵火の下に克く其の任を完うした。次で翌二十八日我が軍が南苑を攻撃するや所屬中隊は南苑兵營東南角に向ふ攻撃部隊に屬し午前九時三十分より攻撃前進を起した。氏は此の戰鬪間隣接第二小隊長との連絡に任じ以て其の協同動作を圓滑ならしめ又速かに敵の側防機關銃を發見して所屬小隊長に報告し機を失せず之を制壓せしめて友軍の攻撃動作を容易ならしめた。爾來九月中旬にかけ北平周邊の掃蕩戰長辛店附近の集中掩護良郷公主墳の警備及揚子崗の戰鬪に参加し克く傳令及警戒諸勤務の重責を全うした。

九月十五日以降は先づ琉璃河々畔の陣地攻撃に於て傳令勤務の傍ら屢々敵の重要目標を發見して之を小隊長に報告し以

て小隊戦闘を適切ならしめ爾後保定南方への追撃、石板山附近の戦闘方須橋高村荊山望都附近の戦闘を経て十月五日滹沱河北岸地区に進出し同河南岸の堅固なる陣地を攻撃するに至つた。本戦闘間氏は中隊長の傳令となり熾烈なる敵の彈雨を冒して關係諸部隊間を往來し的確機敏に命令報告の傳達を完了し以て中隊長の戦闘指揮を容易ならしめた。



所屬部隊は十月二十二日娘子關の堅壘を抜き更に翌二十三日舊關鎮附近の敵陣地を攻撃するに決し同日午後二時三十分展開を完了した。氏は引續き中隊長傳令として目標の指示其の他重要なる命令通報等を傳達しありしが同日午後六時三十分第三中隊が一〇六〇高地北端の一角を占領するや氏の所屬中隊も機を失せず同高地東北角に陣地を推進し其の確保に協力した。然るに同高地は極めて重要な高地なりしを以て敵は午後七時頃十時頃十一時頃の三回に亘り手榴彈及迫撃砲彈を集中しつゝ逆襲して來た。氏は每次勇敢に奮戦したが殊に第三回の敵逆襲時には數名の敵が我が占領地域の右側背而かも我が機關銃陣地の死角内に迂回近迫しあるを發見し單身銃劍を揮つて之に突入し其の一敵を刺殺したるに敵は其の勢に懼れて遁走した。翌二十四日早朝敵は前方三方面より十字火を集中し爲めに此の高地にある我が部隊は苦戦に陥つた。氏は嵐の如き敵彈雨の中に豪膽にも稜線上に這ひ登り最も活躍中の敵を求めて狙撃して居たが其の間悼しいかな敵機關銃より猛射され頭部及肩部に數彈を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午前七時頃であつた。然かし所屬部隊は氏等の尊き犠牲と其の後の苦闘とに依り同日午後六時頃流石の天險陣地をも占領し之を確保するを得た。

氏は戦地より實姉に書き寄せ「御鞭撻のお言葉有難う。此の一命惜からねど軍人の名譽おろそかに出来ません。兄弟五人もあり乍ら僕一人が第一線に起つのみ。三人兄弟の三人迄出征された御家に比べて自分は五人分の任務があると自覺して居ます」とあつた。果然氏は選ばれて傳令勤務の重任を課せらるゝや彈雨の中に之を果たして機關銃の卓越せる威力を發揚せしめ又敵の優勢且執拗なる逆襲にも動せず身を犠牲に供して部隊の危機を救ひ更に挺身頑敵を制壓せんとして玉碎した。噫高邁なる其の報國の丹心、沈勇果敢なる其の行動眞に軍人の鑑であつた。中隊長山口大尉は氏の従兄弟にして同戦線に在りし谷口軍曹に對し「よく働いて呉れたもう外の事は問はんで呉れ」と涙を湛へ自己の負傷も打ち忘れ氏の銃と帽子を示したが軍曹はそれを抱きしめて冥福を祈つて居たとの事である。あゝ氏や其の肉體は空しと雖も其の功績は天晴れ皇軍戦史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 根岸弘次

#### 名速射砲手、毎戦偉勳を奏して崑崙城外の華と散る(精銳)

氏は埼玉縣大里郡三尻村の人にして亡父を正作母をサハと云ひ大正五年一月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性頗る濃厚眞摯にして寡黙又業務に對しては積極勤勉であり親に仕へて孝養厚かつた。三尻尋常高等小學校を卒業し其の後は農業に精勵し傍ら青年學校に入り其の課程を修了した。又青年團幹部及消防手として公共の事業に貢献せる所尠なくなかつた。昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同月末滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯して初年兵教育を受けつゝ同地附近

の警備に任じてゐた。同年六月末より七月中旬に亘る乾念子事件には舟津隊に屬して出勤其の積極的活躍は幹部の齊しく認めて以て賞讃せし所であつた。

支那事變起るや小林部隊速射砲中隊に屬し第二小隊第四分隊四番砲手として昭和十二年七月末勇躍北支戦線に出勤し八月上旬先づ天津及武清附近の掃蕩戦に参加し同月中旬内蒙古張北に轉進し同地附近の警備に就いた。八月二十日所屬中隊は第二大隊長の指揮下に長城線の敵陣地攻撃の爲め午後三時三十分大隊主力の左方基地上敵前六百米の地點に陣地進入した。氏は忽ち第六中隊正面に於て機關銃三挺を備へて猛威を振いつゝあるトーチカ(口)を認め直ちに分隊長に報告すると共に迅速正確なる操作を以て敵の意表に出で猛射を加へて忽ちの間に之を撲滅した。此の時天遽かに大雷雨となり加之敵の十字火は一層猛烈となりしが氏は之を物とせず(ハ)(ニ)(ヘ)の敵火點を順次に火制して之を沈黙せしめ大隊の敵陣地奪取の勳機を作つた。翌二十一日より二十二日にかけての紅花平附近の戦闘に於ては引續き逐次に敵のトーチカに對して正確なる射撃を加へ之を沈黙或は破壊し以て頑強に抵抗する敵に痛撃を加へ大隊戦勝の端緒を開いた。其後八月二十三日より九月下旬に亘りて張家口、天鎮、陽高、聚樂堡、大同、下社村附近の各戦闘に参加し就中陽高附近に於ては堅固なる陣地に據り頑強に抵抗せる敵に對し遺憾なく火砲の威力を發揮して之が撃退に寄與せし所甚大であつた。



九月五日蔚縣城外部落の攻撃開始せらるゝや所屬中隊に第二大隊長の指揮に屬して未明より行動を起し敵の彈雨を浴び

若干の負傷者を生じたるも之に怯まず勇敢に前進し午前六時大隊の最左翼第一線に進出して陣地に進入し敵情地形の偵察を行ひつゝ攻撃開始の時機を待つこと數時間、午後二時命令一下攻撃を開始した。而して第二大隊に協力して射撃中正面城壁にあつて我が第一大隊方面に射向を指向しある敵の側防砲兵を發見之に對して機敏正確なる猛射を加へて直ちに之を撲滅し次で第二大隊正面を側射する敵の掩蓋機關銃に射向を變換した。此の頃敵の迫撃砲及小銃機關銃の射彈篠のつく雨の如く飛來したが氏は泰然自若依然適切有効なる猛撃により暫時にして之をも破壊し更に城壁上右突角の掩蓋及望樓に射弾を浴びせて復た又之をも破壊しかくして我が第一線兩大隊の難局を打開した。聽て午後四時城壁上に又も敵野砲の現出するを認むるや直ちに之に目標を變換し猛射を加へて更に又之をも撲滅した。かくする中午後五時頃中隊は第一大隊方面に協力すべく任務を變更せられ同時に第三中隊正面の銃眼及土壁の破壊を命ぜらるゝや中隊は敵彈を冒して陣地を變換し敵前三百米に進出し此等の目標に逐次正確なる猛射を加へて之を破壊し其の任務を完全に遂行した。越えて翌六日は第二大隊に配屬せられ同大隊の左翼に陣地進入せしが午前八時頃敵の砲兵前面の城壁上より射撃を開始せんとするを發見し敵彈雨の下機先を制して之を射撃し四發目に命中彈を得て之を撲滅し次で其の左に掩蓋機關銃を發見し一發にして命中之を撲滅したる後城外部落の敵陣地に對し射向を變更せんとしたる利那無念敵の狙撃により左胸部を貫通せられ竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

所屬中隊長は氏の戦績を賞讃して曰く「平素温和な人は戦争に強い」と氏は平素頗る温厚殊に親に仕へて至孝、其の出で、戦線に立つや克く身を君國に捧げて生死を超越し彈雨の下勇敢剛膽唯々砲手たる重任遂行に邁進した。氏の一度び射撃するや實に命中の正確なる恐らく毎發の射弾には氏が盡忠の全魂が打ち込まれてゐたであらう。聖戦中途にして得難き砲手を喪ひしは痛惜に堪へざるも毎戦皇軍射砲の精銳を發揮し數多の堅壘を屠りて暴慢不遜の敵を完膚なきまでに膺懲

したる披群の武功は萬古不朽皇軍戰史に光彩を放ち又英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も興亞の聖業を守護すると共に一家の前途殊に老母の多幸を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 根本勝藏

#### 重傷を秘し死闘を續け戰勝の端緒を作りたる機關銃手

氏は茨城縣稻敷郡阿波村の人にして亡父を己之助母をひでと云ひ大正三年十二月二十二日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして孝心深く常に病母を勞はり豊かならざる家計の中にも一家の中堅となり家業に精勵し孝養を怠らなかつた。氏は又熱誠事に當り遂げざれば息まざる氣概を有し諸人の信頼を受けて居た。昭和四年三月郷里の小學校高等科を卒業し引續き農業公民學校に通學し同七年三月同校を卒業し其後専ら家業に従事し同十一年一月現役兵として水戸歩兵聯隊に入營し機關銃手として教育を受け克く軍務に精勵し優良なる成績を擧げた。

支那事變起るや同十二年八月石黒部隊に屬し第一機關銃中隊の隊兵として勇躍征途に就いた。氏は出征に當り叔父宛に生還を期せず必ず國家の爲死力を竭して奮闘すべきに付後事を依頼すとの悲壯なる決意を示し出征後は何等の來信もなかつたとの事である。

北支到着以來降雨泥濘且飢渴を忍びつゝ自己を後にして馬匹を愛護し克く分隊長の意を體して行軍力を維持し九月十二日より永定河畔北相各相の戰闘に参加し續いて敵を急追して十五日拒馬河畔北相附近の敵陣地を攻撃するに方りては暗夜

殊に敵の彈雨を冒し道なき高粱畑を押分けて克く分隊と連絡を保持し敵彈に驚く駄馬を鎮めつゝ分隊に跟隨し分隊の戰闘並に追撃に毫も遺憾なからしめた。

拒馬河畔の戰闘に勝利を得たる所屬部隊は同月十六日より敗退せる敵に尾して猛追撃に移つたが附近の地形は高粱繁茂し且泥濘膝を沒する有様にて前進極はめて困難であつた。然かし氏は克く馬匹を愛護激勵して中隊に追及し以て中隊戰闘に遺憾なからしめ同月二十一日夜大冊河畔石頭村の敵陣地に對し夜襲敢行せらるゝや氏は夜暗殊に斷崖岩山錯綜せる地域なるにも拘はらず克く戰銃隊に跟隨し又敵の猛射を受くるや巧に地形地物を利用して馬匹を敵彈に遮截せしめ何等の支障なく適時適切に所望地點に進出し得たるは隠れたる尊き努力にして所屬中隊の威力發揚と相俟ち大なる功績と謂はねばならぬ。



十月初旬所屬部隊が渾沱河畔陳村附近の戰闘を開始するに當り戰銃分隊銃手中に缺員を生じたる爲編成替行はれ氏は銃手を懸望して二番銃手を命ぜらるゝや欣喜雀躍克く分隊長を輔佐し勇戰奮闘以て

中隊戰闘に寄與する所甚だ大であつた。

所屬部隊は陳村附近の敵を撃破し更に爾後掃蕩の準備中であつたが同月十一日に至り敵は元氏に約二箇師の兵力を増援せる情報に接し翌十二日拂曉より先づ南杜村の敵陣地を奪取するに決した。氏の所屬中隊は所屬大隊第一線中隊の中間地區に展開を行つた。然るに敵は高地上に陣地を占領しありて我が第一線諸部隊を見下ろしつゝ疾風の猛射を浴びせて來

た。是に於て當時中隊の主力たりし氏の所屬小隊は速かに當面の敵を制壓すべき事を命ぜられた。然るに氏の分隊長員に缺員を生じたる爲氏は進んで缺兵動作を兼ね自ら彈藥箱を負ひたるまゝ銃を搬送し勇敢機敏に小起伏地の左方に銃を据え裝填操作を行ひ目指す目標に氣たましき猛射を浴びせかけ尙瞬時をも利用して敵情監視に意を用ひ奮戦して居たが不幸飛來せる一彈の爲右肩胛部に貫通銃創を受けた。豪氣の氏は責任觀念燃ゆるが如く苦痛を忍びつゝ更に續いて三連の裝填操作を行ひ尙も操作を續行せんとせる時之に氣付ける分隊長は氏に交代を命じた。攻撃精神旺盛なる氏は之を固辭して更に任務に邁進せんとしたが分隊長の嚴命に依り漸く射手を交代した。此時敵は我が射彈の爲大打撃を受け竟に姿を沒した。氏は安堵の色を顔面に漂はせ野戰病院に收容せられ一時經過良好なりしも十二日午前九時容態急變し「天皇陛下萬歲」と微かにも奉唱して戰場の華と散つた。

氏や病弱の母を氣にしつゝも大義親を滅し悲壯の決意を以て壯途に就いた。而して愛馬と共に黙々として幾辛酸を嘗め又彈雨の中に漑しなき高粱畑と泥濘地帯を突破して重責を全うし又銃手を命ぜらるゝや満身の勇を鼓して意氣既に敵を呑み重傷を負ふも一言之を口にせず唯々戰機の重大性を自覺して死闘を續け遂に所屬大隊戰勝の第一要因を確立した。あゝ何ぞ夫れ壯烈なる。寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして一般軍人の龜鑑たる者であつた。斯かる誠忠勇敢の士を褒ふ眞に痛惜を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや北支戰史の華と謳はれて芳名千古に傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 七原利一郎

### 擲彈筒手、一發必中の射彈を浴びせ惜しくも拒馬河畔に散る

氏は栃木縣下都賀郡大谷村の人にして父を縫一郎母をトミと云ひ大正二年十月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温良而かも事に臨みては沈着勇敢であつた。昭和二年三月郷里の高等小學校を卒業し翌年四月青年學校に入り同七年三月卒業同八年十二月徵兵として宇都宮歩兵聯隊に入營した。其の在隊間滿洲に派遣せられ四周匪團横行の中にありて日夜警備に任じ又屢々匪賊討伐に参加し其功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はり同十年五月歸隊除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月二十日應召坂西部隊第六中隊に編入せられ第二小隊第五分隊擲彈筒彈藥手として勇躍征途に就いた。而して北支戰線に到着するや早くも九月十三日には永定河を渡河して同河畔胡林南方地區の敵を攻撃し引續き十四日より十五日拂曉に至り固安西南公由附近の追擊戰闘に参加し兩戰闘共彈雨の下危険を冒し筒手と協力して遺憾なく擲彈筒の威力を發揮し中隊の攻撃を容易ならしめ遂に敵を撃退急追して十五日午後拒馬河畔に達した。拒馬河は水深胸部に達し流速急にして動もすれば足を掬はれんとする景況なるのみならず對岸の敵陣地は頗る堅固に構築せられ各種火器を配備して我を邀撃せんと待ち構へてゐた。坂西部隊は十五日午後此堅陣を突破すべく敵前強行渡河を敢行するに決し氏の所屬中隊は午後三時三十分より行動を開始し雨霰の如き猛火を冒し此急流を渡河して勇猛果敢に敵を攻撃した。氏は此間中隊の左第一線にありて彈雨の下之に屈せず終始筒手と協力して其威力を發揮して敵を震駭せしめ且つ絶えず熱心に敵情を監視しつゝありしが此頃頻りに猛威を逞しうし我中隊の攻撃進捗を惱ましつゝありし敵の側防火器を發見確認するや機を失せず之分隊長に報告した。依て分隊長は擲彈筒を以て之を撃滅すべく氏に命ずるや氏は猛火の下身の危険を顧



みず速かに適切なる射撃位置を選定進出し而かも沈着正確なる照準を以て直ちに發射せるに其一弾は見事之に命中し白煙を揚げて敵の側防機關銃は沈黙するに至つた。此成果を待ちつゝありし中隊は此機を逸せず前進に移り氏も亦之に遅れじと躍進中無念敵弾前頭部を貫通し其場に倒れた。かくと見たる分隊長は駈け寄り「七原しつかりし敵陣は直ぐ前だぞ」と叫びつゝ直ちに繻帯を施せしが出血甚しく流石剛氣の氏も最早再び起つ能はず竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏等の勇戦奮闘により午後七時北相の敵陣地を奪取することを得たのであつた。



氏の戦陣に立つや沈着勇敢死生を顧みず筒手と終始緊密協力し或は重要目標を發見し或は自ら筒手となりて一發必中の射撃を爲し以て歩兵小隊の重要火器たる擲彈筒の威力を遺憾なく發揮し中隊戦勝の素因を爲した。氏等奮戦の戦績は所屬中隊が時の軍司令官より光輝ある感状を附與せられたるに徴するも明かである。實にかくの如きは職分の存する所身命を君國に捧げ斃れて後已む盡忠至誠の發露と謂ふべく其拔群の武功は成島中隊の感状と共に千載に輝き其芳名

は萬世不朽に語り傳へて鑑とせらるゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長田 勇三

#### 一旦占領したる地は寸尺と雖退かず寡兵敵の逆襲を撃退して斃る

氏は長野縣長野市の人にして父を忠蔵母を松野と稱し大正四年十一月十八日生れで未だ獨身であつた。生來身體頗る強健未だ嘗て醫藥に親みし事なく體軀偉大一見傲放の觀あるも資性温順正直にして親に仕へて至孝且寡黙實行の人であつた。昭和六年三月長野市柳町小學校高等科を卒業し續いて長野縣立上水内農學校へ入學し同九年卒業して朝鮮京畿道農事試験場に勤務し同十二年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營した。

支那事變勃發するや氏は遠山部隊に編入せられ恒吉中隊に屬し昭和十二年九月勇躍北支方面への征途に就いた北支上陸後所屬中隊は豐臺長辛店附近の警備に任じ次いで九月二十八日には新樂附近小趙村を十月八日より十日に亘りては滹沱河を攻略して十一日元氏に進出し十五日順徳を占領し十七日には光祿鎮附近の敵陣地を夜襲して之を奪取した。之等各戦闘に於て氏は連日連夜殆ど不眠不休或時は泥濘膝を没する浸水地帯を進み或時は雨下する敵火の下水深胸に達する河川を敵前渡河し或時は篠つく如き敵の銃砲火を冒して第一線に奮戦し或は敵陣に突入して格闘を交へ勇戦奮闘以て所屬隊の戦勝に大なる貢獻を爲した。

續いて遠山部隊は西保障の敵陣地を攻撃することゝなつた。西保障の敵陣地は水深胸に達する障河を前にしたる高地帯に堅固に構築せられ其の兵力は我に數倍して居つた。十月十九日敵前渡河を準備した遠山部隊は同夜即ち二十日午前二時渡河を敢行し續いて敵陣地に向ひ猛攻撃を開始した。而して激戦三時間の後氏の所屬大隊は西保障南方高地の一角を占領した。然かし敵は尙其の後方近くに於て頑強に抵抗し動々もすれば大隊の占領せる一角を奪回すべく逆襲し來らんとする

状況であつた。此の時該地に於て激戦中の氏の分隊は敵の逆襲に對し隣接の高地に在て猛射中の我が重機關銃の援護を命ぜられ分隊は直ちに重機關銃分隊の高地に至り氏は分隊長の命に依り他の三名と共に機關銃の斜め前方に位置して盛に敵を猛射して居た所不幸にも我が重機關銃は故障を生じ之が修理の爲高地後方斜面に後退の止むなきに至つた。我が重機關銃の後退を知つた約一ヶ小隊の敵は此の機に乗じ逆襲して來た。氏等は一旦占領した所は寸尺の地と雖も退かずとの決意

を以て群がり來る敵に猛射を浴びせ更に敵の近迫に従ひ沈着勇敢に手榴彈を投擲して多大の損害を與へ爲に敵は我が陣地前に停止したが尙退却せず小銃手榴彈等亂射亂撃を續けて居た。此の時我が重機關銃は故障を除外して再び陣地に進入し前面の敵に向て片端より殲倒し氏等之に協力遂に敵は潰走するに至つた。然かし其瞬間敵の一彈は無念氏の右胸部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。時に午前七時三十分頃であつた。

氏元來身體頗る頑健加るに寡黙堅忍實行の人のあつた。之が爲北支上陸以來あらゆる辛酸困苦に會するも悉く之を克服し常に進んで難局に當り新樂涑沱河の戦鬪以來連續幾多の戦鬪に偉勳を樹て殊に西保障の戦鬪に於ては敵の逆襲に對し寡兵克く陣地を死守して我が重機關銃を掩護進出せしめ以て敵を潰滅し其の企圖を挫折せしむるに至つた功績は正に殊勳と謂ふべきである。斯かる勇士を開戦幾何もなくして喪へるは洵に痛惜の極みである。然かし士の戦場に臨むや元より生還を期せず。氏や西保障の華と散りしも其の赫々たる武勳は燦として皇軍戦史に輝き芳名は千載に誦はれ其の英靈は不滅に生きて護國の



神と祀られ永へに皇國を守護し又氏の兩親一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長田 茂文

山西省下社村の戦鬪に重傷を負ふも尙奮闘し戦勝の途を拓く

氏は千葉縣夷隅郡總野村の人にして父を堅林母をゑいと云ひ大正五年十月五日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚眞面目にして勤勉責任觀念強く事に臨み沈着而かも勇敢であつた。昭和六年三月總野高等小學校を又同八年三月總野實業補習學校を卒業し引續き青年訓練所に入所同十年三月其の第二次課程を修了續いて實業青年學校に入り同十一年三月第一本科卒業次いで第一研究科に入り同年十二月同科を修了した。昭和十二年一月徴兵として佐倉歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣本溪縣城廠の警備に任じ六月には乾岔子事件の爲龍江省北安に出動七月中旬以後は齊々哈爾附近の警備に服してゐた。氏は入營以來軍務に精勵學術の成績拔群模範兵として將兵一同に愛敬せられてゐた。

支那事變起るや今田部隊第十一中隊に屬し第三小隊第三分隊擲彈手として昭和十二年七月下旬急遽北支戦線に出動し八月中旬まで北寧線唐山附近の警備に任じてゐたが其後内蒙方面に移動し八月下旬より萬全附近張家口附近の戦鬪に参加し續いて九月初旬には山西省天鎮及陽高の堅壘を奪取し更に同月中旬には聚樂堡附近殊に金山寺附近の戦鬪を経て大同附近の各戦鬪に参加し彈雨の下第一線として奮戦し適時的確なる射撃に依り擲彈筒の威力を發揮して都度頑敵に多大の損害を與へ小隊の戦勝に寄與せし所多大であつた。而して大同占領後父宛書面中今後の戦鬪では第十一中隊は決死隊に出づる豫

定との事其時は身命を捨つる覚悟ですと認め一死奮戦の決意を披瀝してゐる。

愈々九月二十四日午前六時所属中隊は下社附近敵陣地攻撃の爲行動を起し二十七日午後四時敵警戒陣地を攻撃して同五時之を奪取し當日は山麓に夜を徹し次いで翌二十八日午後三時四十分砲兵掩護射撃下に逐次敵主陣地三角山に肉薄し突撃準備を完了して敢然突撃を開始した。本戦闘に於て氏は第二小隊第一分隊小銃兵として参加せしが三角山は兩側急峻なる



こと馬の背よりも甚しく其山背に沿ふての攻撃前進は地形上容易ならざりしみならず敵は我が行動困難なるに乗じ霰の如く側射斜射を浴びせて来た。然るに氏は之に屈せず敵の猛射を冒して勇敢にも分隊長と共に先頭に立ちて敵陣地に突入し激烈なる白兵戦を演じ奮戦

力闘中敵の狙撃を受け右側腹部に貫通銃創を蒙り其場に倒れしが重傷にも屈せず伏臥の儘射撃を繼續し小隊主力の突入を容易ならしめ以て之が占領の端緒を開いた。其後氏の内務班長たりし佐久間氏が野戦病院に氏を見舞たるに重態なるにも拘はらず「班長殿あの山の敵はどうしましたか後は宜敷頼む」と言ひ附近の人々の目頭をあつくさせた斯くて醫官等の手厚き治療看護も其甲斐なく翌二十九日惜しくも名譽の戦死を遂ぐるに至つた。併かし所属中隊は氏等の勇戦奮闘により午後四時三十分三角山を占領することを得たのであつた。

氏の入營するや格勳精勵成績拔群衆の模範であつた。今次聖戦に臨むや擲彈筒手としては毎戰適時的確の射撃に依り數多の堅陣攻略に寄與し其小銃手としては率先勇猛敵陣に突入し傷つくも屈せず收容後も尙敵陣地奪取の成否を顧念して已

まさりしが如き洵に氏が征戰中に於ける心境披瀝の如く心頭唯々一死殉忠戰勝の一念あるのみであつた。征戰中途にして氏の如き忠勇の士を喪へるは惜みても尙餘りあるも奮戦玉碎して以て小隊戰勝の途を拓きたる拔群の武功は萬古不朽皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらら。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長尾 志成

輕機彈藥手、積極挺身陽高城壁上に奮戦して玉碎す

氏は東京市板橋區板橋町の人にして父は稜威雄と云ひ大正四年四月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚篤實にして寡黙勤勉進んで難局に當るの美風を有し敬神の念深く親に仕へて孝心厚かつた。昭和五年三月巢鴨時習高等小學校を卒業し引續き巢鴨商業學校に入校同九年三月都合ありて第四學年を修業して退學し、昭和十一年一月徵兵として麻布歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵し同年五月滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯警備に服し同年七月一等兵に進級し翌十二年二月杜爾伯特旗の警備に移駐した。此間氏は前記性格を發揮し他兵の模範として上官の信頼厚く同僚の愛敬を受けてゐた。

支那事變起るや小林部隊第六中隊に屬し第一小隊第二分隊輕機關銃彈藥手として昭和十二年七月末勇躍北支戰線に出動した。斯くて八月上旬は天津武清開平附近の掃蕩に従事し次で獨流鎮附近の戰闘に際しては第一線として戰闘に参加し八月中旬内蒙古張北に轉進同地附近の警備に就いた。八月二十日所属中隊が外長城線の敵主陣地及び其南方制高地點の各ト一チカに對し攻撃するや輕機關銃射手と緊密に協力して奮戰大に努め逐次此等堅陣の奪取に協力し翌二十二日は長城線に

沿ふて追撃に移つた。而して翌二十三日中隊は土井子東方高地上に於て優勢なる敵の包圍攻撃を受けたるも奮戦之を撃退し二十四日には「ナマコ」山の敵陣地を攻撃占領し其後大隊の右側衛となつて前進し南天門北方高地を占領するや又々優勢なる敵の包圍攻撃を受けた。然かし中隊の將兵一同勇戦力闘敵の左翼を突破し次で二十五日は夜間機動を行ひ二十六日は西店子附近の敵を攻撃して之を占領し二十七日遂に張家口を占領した。此間氏は毎次彈雨の下勇敢に奮戦し克く其任務を完うし中隊數次の戦勝に大なる貢獻を爲した。



爲野砲の主力を以てする城壁破壊の射撃實施間待機して今や遅しと突撃路の開設を待つた。恰も午後六時遂に砲彈により城壁に一條の突撃路開設せらるゝや中隊長を先頭に猛然突撃を開始し梯子を利用して城壁上に突入せしが氏は分隊長と共に勇敢に城壁を攀登して頂上に進出し頑強に抵抗せる敵中に突入し遂に城壁上の一角を占領した。次で中隊は城壁上を左方に向つて戦果擴張に移り之が爲各小隊は下士官を長とする數名宛の掃蕩班を編成し逐次城壁上を掃蕩しつゝ東門城壁よ

り約三百米附近を占領するに至つた。氏は徳永掃蕩班に加はり南方に前進せしが午後八時頃敵の逆襲を受け班員と協力し勇敢に第一線に立ち手榴彈を投擲して奮戦之を撃退し更に前進中午後十時頃敵は再び迫撃砲機關銃を猛射しつゝ正面及側方より逆襲し來り死傷續出するに至つた。併し氏は泰然自若恰も當時中隊指揮班より連絡に來れる傳令に此現況を指示して中隊長に報告するやう依頼し同時に敵彈雨飛の中を率先挺身して手榴彈を投げ敵を混亂敗走せしめ次で尙ほ數名の敵が壕を利用して頑強に抵抗しつゝある地點に匍匐肉薄して白兵を揮ひ班長と共に突入して二名を刺殺し尙ほ其後方に於て動搖しつゝある敵に對し獨斷突入せんとせる刹那無念顔面に手榴彈創を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦線に立つや輕機彈藥手として毎戦彈雨の下勇敢に活躍し適時銃側の彈藥を充實して輕機の威力を遺憾なく發揮せしめ其陽高城壁上の戦鬪に至つては積極挺身し奮戦力闘眞に鬼神をも哭かしむものがあつた。實にかくの如きは一死を鴻毛の輕きに致し全力を傾倒して君國に報ぜんとせる至誠盡忠の發露と謂ふべきである。此の如き勇士を征戦中途に喪ひし事は惜みても尙餘ある次第である。然し氏が奮戦玉碎して以て暴慢不遜の敵を完膚なきまでに膺懲したる拔群の武功は萬世不朽皇軍戦史に輝き芳名は千古に傳へられ其英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も興亞の聖業に將た一家の將來に尊き加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 仲田正男

## 暗夜險峻を冒し長城線のトーチカを奪取し集團地雷に玉碎す

氏は埼玉縣北足立郡尾間木村の人にして亡父を榮造亡母をくれと云ひ大正四年八月三日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚着實にして幼より孝心深く諸事實素を旨とし勤儉力行以て身を律して居た。氏は入營入來家郷に送金を要望せし如き事なきのみならず常に給料を貯蓄して將來に備へ今次氏の戦死後中隊より送付し來りし其の額は尠からざるもので之を見ても氏の平素質實なりし性格の一般を窺ふ事が出来る。昭和五年三月尾間木高等小學校を卒業し其後は埼玉縣健康保險課に給仕を勤めながら勉學怠らず昭和七年四月より東京市王子區上條商業學校第二本科第二學年に入り晝間の疲勞にも屈せず夜間勉學に努め同年三月同校を卒業し引續き保險課を拜命し益々業務に勵みて良成績を擧げ特に長上より厚き信頼を受けてゐた。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營爾來孜々として軍務に精勵中五月渡滿齊々哈爾附近に在り熱心緊張警備に就いてゐた。此間同十二年三月四日より同月十四日まで海倫縣綏楞縣下に於ける討伐に参加し三月九日には綏楞縣袁家灣附近に於ける戰鬪に加はり三月十五日より四月二十三日までは龍鎮下に於ける討伐に参加する等滿洲の治安肅正の爲貢獻しつゝあつた。又此間昭和十一年十一月一等兵に進級し翌十二年六月精勵章を附與せられた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第三小隊第一分隊小銃手として昭和十二年七月末勇躍北支戰線に出動し直ちに天津附近の掃蕩戰に参加し續いて內蒙古張北附近の警備治安の維持に任ぜしが此間氏は不眠不休日夜緊張裡に熱心精勵克く其任務を完了した。

八月二十日所屬部隊は外長城線附近に進出せる敵を攻撃した。此の時所屬中隊は午前八時張北南方長城線の敵に對し行

動を起し午後二時展開第一第二小隊を第一線とし氏の所屬第三小隊を豫備隊として主陣地線上(へ)のトーチカに據る敵に對し攻撃を開始した。氏は豫備小隊内にありて緒戰の已み難き勇心を押へつゝ近く第一線に跟隨した。午後七時頃第一線小隊(へ)のトーチカに突入し之を占領するや長城南側トーチカに據れる敵は小銃機關銃を亂射し尙頑強に抵抗を續けたるにより中隊は更に第二第三小隊を第一線として引續き之を攻撃した。氏は今や待望の第一線となり夕刻より大雨に全身づ



ぶ濡れとなり夕闇暗き谷を越へ險峻を踏破し逐次敵に肉薄し午後八時稍々過ぎ敵前三十米の稜線に進出し熾烈なる敵火を冒して外壕及長城の障壁を越へ一齊に突入し此陣地を奪取し數十名の敵を撃退した。此間氏は數名の敵を刺殺し及逃ぐる敵を射殺する等其活躍は實に目覚ましきものがあつた。小隊は更に前方一軒家の敵を掃蕩することとなり殘敵を驅逐しつゝ該家屋を占領せる時しもあれ轟然として集團地雷爆發し小隊長以下十一名の戦友と共に竟に爆傷を受け擡と地上に打倒れた時正に午後九時頃であつた。其後張北野戰病院に收容せられ衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其甲斐なく二十一日

終に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦陣に立つや猛火の下も暗黒の夜も地形の險難も之を意とすることなく率先先頭に立ち奮戰格闘唯々小隊戦勝に全力を傾倒し兵の本分を完うして遺憾なかつた。かくの如きは氏の性格たる眞摯克己の然らしめし所とは言へ生死を超越せる崇高なる盡忠至誠の發露であつた。氏や緒戰に於て內蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て皇軍の精銳

を發揮し開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載の下皇軍戦史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中野 福重

#### 決死敵の占據せる工場圍壁に登り内部の敵情を偵察す

氏は群馬縣多野郡藤岡町の人にして父を定藏亡母をべん養母はしげと云ひ大正四年一月四日に生れ未だ獨身であつた。居常温順の性質なるも事に當りては負けて嫌の人であつた。昭和三年三月藤岡尋常高等小學校を卒業し翌年四月藤岡補習學校に入り同六年三月卒業引續き藤岡青年訓練所に入所し同十年三月其の課程を修了した。又藤岡町青年團支部長に推され團の發展に盡瘁し之が爲感謝狀を附與せられた。昭和十一年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營し熱心精勵其の第一期教育終了後撰ばれて喇叭手教育を受け同十二年七月歸休除隊したが氏は特に武技に長じ在隊間射撃に於て二回銃劍術に於て一回賞狀を授與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第八中隊に編入第三小隊第六分隊に屬して勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月十三、十四日には永定河附近十五、十八日には琉璃河附近十七日には兩管頭十八日より二十日に至りては澤畔店附近の各戦闘に参加し毎戦勇敢に活躍克く其任務を完うし續いて九月二十一日所屬中隊は尖兵中隊として前進し途中夜借村に於て我が歩兵部隊聯大隊砲等敵の包圍を受け苦戰中の情報に接するや中隊は直ちに之が救援の爲急進し奮戦以て多大の

損害を與へ敵をして退却の已むなきに至らしめた。此の時も氏は第一線に在りて克く分隊長の意圖を體し終始勇敢に奮戦し中隊の戦捷に寄與する所大なるものがあつた。其の後所屬部隊は連日殘敵を掃蕩しつつ前進を續け十一月二日には四盤磨花園庄の敵を中隊獨力にて攻撃し夕刻之を擊攘して彰徳城攻撃を準備した。此の間氏は連日斥候として又は歩哨として困苦を排し危険を顧みず克く其任を完うし殊に四盤磨花園庄攻撃の際は剛膽機敏に活躍奮戦し中隊の任務達成に大なる貢獻を爲した。



十一月三日明治節の佳辰に彰徳攻撃は開始せられた。此の日黎明より友軍の砲撃は開始せられ引續き大隊砲及機關銃の援護射撃の下に中隊は第一線として前進し敵前千米附近に達して攻撃準備を整へ午後四時先づ徐庄の敵に對し攻撃前進を開始した。敵は部落の前端河の對岸其の後方彰徳驛彰徳城と數線に陣地を構築し各線掩蓋機關銃座を設備し戰車壕鐵條網等を繞らし頗る堅固に陣地を構成して我攻撃に備へて居た。而して我が軍が攻撃前進を起すや猛烈なる銃砲火を浴びせ來り頑強に抵抗し爲に我が死傷相次で生じたが決死の我將兵は篠つく雨の如き敵の銃砲火を冒して躍進又躍進し午後五時遂に敵前百米の地點に近迫し茲に我火力を最高調に發揮して突撃を準備し機熟して中隊は一齊に突撃を敢行した。氏は此の戦闘に於ては喇叭手として参加し終始小隊長に従ひ猛火の中を疾驅して小隊長と中隊長及第一線分隊間の連絡に任じ以て小隊長の指揮掌握を容易にし愈々中隊突撃を敢行するや突撃喇叭を吹奏して中隊の志氣を鼓舞作興しつゝ小隊長と共に突撃し午後五時十分中隊は遂に徐庄の敵陣地を奪取し

た。而して翌四日愈々彰徳の攻撃となるや氏は依然第三小隊長の傳令として終始小隊長と行動を共にし午前八時二十分停車場南端にある工場北側に向ひ前進した。然るに忽ち工場内より猛烈なる銃火を受け而かも門扉を堅く閉ぢ内部の状況全く不明なりし爲氏は敵の猛火を冒し素早く門の上に登り内部の状況を偵察し其の敵兵力及状況を小隊長に報告した。小隊長は氏の決死の偵察に基く報告を得て直に該門を破壊し一部を以て工場内の敵を攻撃せしめ主力を以て敵の背後に迫りて其の退路を断ち遂に敵を殲滅することを得た。所屬中隊は更に引續き彰徳城の西北角に向ひ攻撃し戦闘愈々激烈となり死傷相次ぎ中隊長と小隊長間の連絡も絶え中隊長小隊長の指揮頗る困難となつた。此の時氏は小隊長の現狀を中隊長に報告すべく小隊長より命ぜらるゝや決然猛火を冒して中隊長位置に躍進し所在の壕に飛び込まんとせる刹那無念敵彈頭部を貫き竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。然し氏等の奮戦により中隊は午後二時四十分遂に彰徳城を占領することを得た。

氏の戦陣に立つや第一線小銃兵として或は喇叭手として或は小隊長傳令として常に負けじ魂を發揮し勇敢剛膽毎戦克く其の任務を完うし遺憾なかつた。殊に彰徳驛攻撃の際進んで單身圍壁の門上に登り決死敵情を偵察せしが如き死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。氏や惜しくも北支の華と散り今や其の壯容に接すべくもないが然し氏の武勳は赫々として青史に輝き其の芳名は萬世に傳へられ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し率り又遺族の前途を加護照覽するであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中世古福太郎

#### 迫撃砲手、的確なる射撃により克く其の任務を完うす

氏は東京市江戸川区桑川町の人にして父を胤吉母をとめと云ひ大正三年二月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性寡言黙行而かも氣概に富み責任觀念厚く殊に父母に對して孝養至らざるなく又幼者を慈しみ業務に精勵し模範青年として附近の評判に上つてゐた。大正十五年三月江戸川区松江尋常小學校を卒業し爾後家庭に在りて父母の手助けをしてゐた。昭和十年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營一等兵に進級の上翌十一年十一月滿期除隊となつた。

支那事變起るや八月下旬應召小林部隊に編入迫撃砲小隊第一分隊二番砲手として同月三十日勇躍征途に就いた北支戰線到着後同蒲沿線を南進し九月二十四日より二十九日に至る下社村附近の戦闘を経て九月三十日より醇縣附近の戦闘に参加することゝなつた。醇縣は雁門關の南で同蒲沿線上の一要衝を成形し敵は忻縣附近に於ける一大陣地帯の有力なる前進陣地となし堅固なる防禦陣地を作り頑強なる抵抗を企圖して居た。十月四日愈々醇縣城攻撃の爲所屬小隊は午前四時より戦闘を開始した。氏は熾烈なる敵火を物ともせず勇敢に行動して陣地に進入せしが當時最も我れに危害を與へ第一線歩兵の攻撃を困難ならしめつつありし敵迫撃砲の位置を確かめ之を制壓せんとせしも容易に其の位置判明せず一同焦慮せし所氏は熱心之が偵知に努め遂に其位置を発見確認し直ちに正確なる射撃操作を以て之に猛射を浴びせ間もなく之を制壓し以て第一線歩兵の攻撃前進を容易ならしめた爾後第一線歩兵と密接に協力して逐次重要な目標を制壓し第一線歩兵の前進に伴ふ陣地變換に當りては勇敢に進出して射撃準備を整へ速に第一線歩兵と連絡を保ち適時有利の目標を捕捉して之を撲滅又は制壓し以て歩兵戦闘の進捗を容易ならしめた。かくする中午後七時三十分聯隊命令に基き爾後の戦闘準備の爲第二陣

地を撤し下王村に向ふや敵弾は宛も徠つく雨の如くであつたが毫も之に屈することなく而かも行動困難なる高粱畑の中を勇敢に一進一止しつゝ、飄行通過中前方より猛烈なる敵山砲の射撃を受け無念其一弾は全弾の儘命中に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。



氏の郷に在るや至孝出て、戦陣に立つや忠孝一如敵彈雨飛の下勇敢機敏而かも沈着正確なる射撃操作により或は敵の迫撃砲を或は其他の重要目標を逐次撲滅或は制壓し全隊の戦勝に貢献せし所甚大であつた。實にかくの如きは身命を君國に捧げて砲手たる重責に邁進し斃るるまで戦はんとせる忠誠の發露と謂ふべきである。然るに参戦幾何もなく崑崙城外の華と散りしは誠に哀惜に堪へざる次第である。然し氏の赫々たる拔群の武功と忠孝一加の示範とは永く青史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ尙も興亞の聖業を守護

すると共に又一家の守護神ともなり特に老母の將來に限りなき佑助を垂るゝ事であらう。  
氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中 島 與 八

砲彈幕中に展望臺の視界清掃に任じ羅店鎮の華と散る

氏は大分縣下毛郡山移村の人にして亡父を熊作母をエイト云ひ明治三十三年十月二十二日に生れ妻コフジとの間に早子チエノ義彦ミチ子安彦の五愛子を擧げた。性温厚篤實にして義務心に富み特に孝心深く又知己の爲めに親切を盡す等郷黨一般の信望高かつた。大正四年三月山移小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業に精勵し父母に孝養怠りなかつた。大正九年十二月大分歩兵聯隊に入營し翌十年八月分遣せられて青島守備隊に屬し翌十一年十一月任務を終へ歸還の上



満期除隊となつたが在營間は克く軍務に精勵し特に射撃に習熟し射撃徽章を授與せられた。歸郷後は在郷軍人分會の評議員、班長、理事の要職に歴任し分會の爲め大に盡力し表彰狀を附與せられ又山移産業組合青年聯盟會の理事に推舉され同會の進歩向上に寄與する所頗る多かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召長谷川部隊に屬し下田中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて上海戰場に到着後間もなく獅子林砲臺或は月浦鎮其他各地に轉戦し九月下旬より十月初めに亘りては趙宅附近に位置し新鎮方向の敵に對し警戒に任じた。

此の時氏は陣地の構築に將た歩哨斥候其他の頻繁なる諸勤務に服し常に率先任務を遂行し衆の模範として將兵の厚き信頼を受けた。

所屬部隊が十月七日に至り羅店鎮歩兵部隊の増加隊として同地に移動を命ぜらるゝや氏の所屬小隊は同部隊の軍旗護衛小隊として服務し氏は或は軍旗衛兵或は部隊本部の直接警戒等の勤務に服し連日連夜に亘り献身的努力を以て其の責務を



全うした。然るに部隊本部に於て設けたる展望臺は其の前方の立木に依り展望を妨げられありし爲め十月二十八日視界清掃班をして之が清掃を爲さしめた。當時敵の迫撃砲弾猛烈に飛來し附近に落下炸裂し頗る危険なる情況なりしに拘はらず氏は伐採班の一員として率先彈雨を冒して身を挺し直接視界を妨げありし大樹木を伐採中偶々敵砲彈轟然として氏の身邊に炸裂し爲めに左胸部に貫貫砲彈破片創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午後四時頃であつた。然かし氏等の忠烈なる犠牲行動に依り其の後件の大木も清掃され展望臺の價値を著しく増進し敵情搜索並に監視上に著大なる効果を齎らすに至つた。

氏や郷に在りては一家の中堅となり忠實業に服し克く家政を治めて孝子の譽高く又進んで郷黨の公益を廣め良兵良民の範として一般諸人の愛敬を受け今次聖戦に参加するや江南特有の霖雨と泥濘の中に黙々として自己の職分に邁進して部隊戦闘に將た警備に尊き貢献をなし而して熾烈なる敵砲彈下に視界清掃の決死的任務に服し毫も一身の危険を顧みなかつた。其の任務たるや外觀必ずしも華かならずと雖も其の沈勇其の壯烈なる行動は天晴れ軍人の模範たるものであつた。是れ全く氏が滅私奉公の至誠の躍如せる結果にして其の参戦以來累次の功績と共に皇軍戦史を飾り其の名は後世に讃へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中村 利 良

#### 重傷を負ふも尙射撃を續け良郷の華と散る

氏は京都市左京區高野藪原町の人にして父を卯三郎母をトヨ子と云ひ大正五年十一月十日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和六年三月郷里の小學校を卒業したが長兄及び次兄と共に第一補充兵で何れも現役として入隊せざりしを遺憾とし三男に生れし氏は豫てより國家の干城たらんことを念願し昭和十一年十二月現役志願兵として朝鮮龍山歩兵聯隊に入營した。資性温厚篤實而かも又純真にして快活明朗従つて一般の風評頗る良好にして大に將來を囑目せられて居た。

氏入營するや下士官たらん事を志し熱心精勵成績優秀にして下士官候補者に採用せられ第一期檢閲終了後は専ら其の教育を受けて居た。

昭和十二年七月支那事變勃發するや氏の隊の大部は早速北支に向つて出動した。然かし氏は下士官候補者としての教育を受ける爲め殘留を命ぜられた。氏は之を頗る遺憾となしありしが八月下旬森本部隊佐野中隊第三小隊要員として出動追及を命ぜられた。氏は命あるや欣喜雀躍先づ左の如き信書を兩親當てに差出して居る。「出征故に最後に御願ひするも變ですが萬一と思ひ一筆申上ます。在京中は色々御無理を謂つたり、親不孝を致した事を改めて至誠を以て御詫び申上ます。父兄共に御元氣で御暮し下さいませ様弟妹達も兄の出征を喜んで居る事でせう。弟妹達よ一生懸命に勉強して大きくなつて立派に國家に御奉公致す様(中略)私も中村家の名譽の爲めに立派な覺悟を致して参ります、御安心下さい」云々とあつた。

斯くして九月初め氏は蘆溝橋に於て佐野中隊に合した。然るに幾日ならずして九月七日所屬中隊は蘆溝橋を出發し良郷

方面の第一線に近き妙米店附近に陣地を占領し警備に就いた。氏は屢々斥候勤務或は下士哨勤務に服し常に剛膽且慧敏熱心に服務し以て克く其の重責を完うした。然るに九月十二日午前二時頃より敵の約一箇聯隊が隣接部隊より出されありし我が警戒部隊を包圍し同部隊は苦戦に陥りし爲め佐野中隊は同部隊の左方に進出して敵を攻撃し之が救援方を命ぜられた。茲に於て所屬中隊は同日午前九時行動を起し氏は所屬小隊長と各分隊間の連絡掛を命ぜられ勇躍前進を起した。此の



日天氣晴朗なるも見渡す限り高粱畑が打續きて敵影を認むる能はず折々は敵の迫撃砲彈身邊に落下炸裂したが中隊は一發の應射もなす事なく黙々として前進を續け敵前五百米に達した。此の頃よりして敵の銃砲彈の飛來激烈となり中隊は疎開隊形を以て前進したが彈雨と高粱の密生地帯の爲め指揮連絡は極めて困難であつた。然れども責任觀念燃ゆるが如き氏は勇敢機敏なる行動を以て小隊長と分隊長間の連絡を確保しつゝ、閉古庄の南方約六百米に在る敵陣地の一角より約二百米の線に進出した。今や嵐の如き敵の十字火は身邊の高梁を薙ぎ倒し又轟然たる砲彈の落下炸裂の光景は名狀すべからざる壯烈なものであつた。中隊長は中隊に散開を命じ直ちに射撃を開始せしめた。氏の所屬小隊は左第一線となり全火線は火を吐いて敵陣地を撃ちのめした。氏は此の頃所屬分隊に復し小隊長の後方を前進し敵前五十米に達し火線分隊に加はつた。氏は平時の演習も同様泰然自若正確なる射撃を以て次々と敵を登し機會を看破しては各個躍進に移つた。敵は手榴彈を投げつけ必死の防戦に努めた。中隊は早や敵前二十米今や突撃に移らんとする直前無念なるかな氏は腹部に貫通銃創を受

け打ち倒れた。されど豪氣の氏は之に屈せず尙も四五發を發射したが出血多量にして力盡き折柄起る中隊突撃の喊聲を聞きつゝ氣息奄々たる裡にかすかにも「天皇陛下萬歳」を奉唱して壯烈なる戦死を遂げた。而して所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り同日午後三時十分當面の敵を撃破し同陣地を占領するを得た。

氏や志操高邁にして頭腦明晰常に優秀なる成績を擧げ其の將來を囑目されて居た。一度聖戦に参加するや一家を代表して皇恩の萬分の一にも報ひ奉り又父祖の期待に應へんと勇躍難局に當りて志氣益々旺盛克く至難なる傳令勤務を全うし又散兵として卓越せる射撃技能を發揚して敵に多大なる損害を與へ以て所屬中隊の爲めに突撃の動機を作つた。寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして一般軍人の模範たるものであつた。然るに參戰幾何もなくして此の忠勇義烈の士を喪ふ眞に痛惜の情に堪へずと雖も士は百戦功なき瓦全を耻ぢ一戦功を奏して玉碎名を遺すに如かず。氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史を飾り其の芳名は萬世に誦はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれて神靈尙も皇國の前途を護り又一家の守護神として尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中野良市

#### 死闘十數時間數倍の敵を拒止し西子牙鏢の華と散る

氏は島根縣八束郡本庄村の人にして父を半市母をサトと云ひ大正五年五月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性温良着實不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和六年三月本庄小學校高等科を卒業したが生來電氣學に興味を有し刻苦精勵遂に無線

電信技術者となり遠く臺灣及厦門に派遣され勤務中適齡に達し昭和十二年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し一意専心軍務に精勵して居た。

支那事變起るや同年七月福榮部隊に屬し大野中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くし北支到着以來降雨泥濘の難行軍を續け八月二十九日二堡附近の攻撃には中隊の左第一線火線分隊員として泥濘の高梁畑に敵の猛烈なる彈雨を冒しつ

率先果敢なる前進を行ひ以て所屬小隊の包圍運動を容易ならしめ戰勝の端緒を作つた。續いて孫家堡の攻撃に方りては引續き左第一線の火線分隊員として同部落の敵を掃蕩し河畔に進出するや前岸に占據しありし敵に對し正確迅速なる射撃を加へて之を壓倒し以て所屬小隊の同地獲得を容易ならしめた。



易ならしめた。

九月四日夜所屬小隊は西子牙嶺の確保を命ぜられ同地守備中五日午前二時四十分頃敵兵約二三百名は喊聲を揚げつゝ夜襲して來た。敵の小銃及機關銃手榴彈は雨霰の如く集中して來たが小隊は沈着機敏に部署に就き應戰に努めた。されど敵は數倍の兵力にして見る見る中に十餘名の戰友は或は噎れ或は傷つき剩さへ頼む機關銃は故障を起して發射不能となり緩

かに小銃と手榴彈のみにて應戰せねばならぬ悲惨な狀況となつた。此の際氏は最先頭に乗り出し神色自若として機敏正確なる射撃に依り群がり來る敵を片つ端から射殺して其の包圍行動を阻止した。既にして午前五時三十分頃より第二第三分隊方面に負傷者續出し危險切迫せし爲め小隊長は氏の所屬第一分隊より増加兵二名を差出すべき事を命じた。此の時氏は敢然として立ち上り敵前僅かに數十米而かも篠突く如き敵の彈雨を物とせず壁に沿ひ前進中無念なるかな敵彈飛來腹部に首貫銃創を受け「天皇陛下萬歲」を叫びつゝ午前七時頃竟に壯烈なる戦死を遂げた。然かし所屬小隊は氏等の勇戰奮闘に依り死闘實に十數時間遂に同日午前五時頃敵を撃退し其の重任を全うするを得た。

氏や夙に盡忠報國の志厚く又責任觀念に富み攻撃精神旺盛にして將兵一般の信頼を受けて居た。果然聖戰に参加するや常に志氣旺盛幾多の艱難辛苦を克服し又愈々難戰苦闘に際會するや「生意氣な支那兵め！」と奮戰死闘其の包圍を阻止し更に動かば必死の情況下に於ても小隊長の聲に應じて危殆方面に増援する決意敢行は正に疲れ切つたる戰友等に深き感激と戰闘意識を最高度に昂揚せしめたるもので眞に皇軍歩兵の本領を發揮して遺憾なきものであつた。噫斯かる精神有爲の士を喪へるは痛惜哀悼極まりなしと雖も士の戰場に臨むや素より生還を期せず。而かも氏の累次の赫々たる勳功は不朽にして天晴れ皇軍戰史に輝き芳名は後世に傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 成瀬 松 市

## 石家莊の激戦に勇戦し重傷を負ふも尙奮闘せんとして散華す

氏は愛知縣額田郡下山村の人にして父を定八母をみかと云ひ大正五年一月二十日に生れ未だ獨身であつた。性温順誠實にして特に孝心深く兄弟にやさしく友情に富んで居た。又義務心厚く責務の存する所遂げずんば息まざるの氣概を有し世人の信用極めて厚かつた。昭和六年三月下山小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて専心農業に精勵し入營時に及んだ。昭和十二年一月現役兵として三島野戦重砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや同年八月高橋部隊に屬し武富中隊の砲手として勇躍征途に就いた。北支到着後所屬部隊は京漢線方面に行動し九月中旬に入り永定河畔の敵は津浦線の敗退に依り津浦京漢兩線の中間地區の敵も動搖を來たし且我が軍の猛攻に依り戦況益々不利に陥り續々京漢線方面に退却を初めた。此時京漢線方面の敵は房山涿州の既設陣地を極力固守し皇軍の南下を防止し以て後圖を策したが所屬部隊の兵團主力は九月十五日先づ敵陣地の左翼要點たりし房山北方高地に對し猛攻を開始した。此の時所屬部隊は小柴草附近に陣地を占領し一齊に砲撃の火蓋を切つた。秋空を震はせて轟く砲弾は矢繼早に敵陣地に命中し敵の掩蓋陣地も木葉微塵となつて宙に舞ひ上がった。敵亦此處を必死と迫撃砲及機關銃を以て盛に應戦した。氏は其際第二分隊の四番砲手として敵弾下に泰然として正確迅速なる操作を繼續して適切有効なる射弾を送り以て友軍歩兵の攻撃を支援し見事に當面の敵を撃破するを得た。所屬中隊は機を失せず方須橋方向に向ひ追撃前進に移つたが前進路は起伏甚しき惡道の爲屢々前進を遲滯するに至つたが氏は連日連夜に互り献身的の努力を以て馭者に協力し以て中隊の追撃前進に貢献した。

十月二日完縣吳村出發以來氏は第二分隊の一番砲手を命ぜられ克く分隊長の指揮に従ひ連日連夜追撃前進を行ひ惡道を踏破し粗惡なる給養に堪へ滹沱河の線に進出した。敵は滹沱河の障壁を前にして其南岸の堅固なる既設陣地に據り皇軍を邀撃すべく待ち構へて居た。所屬中隊は同月九日夜悲壯の決意を以て平山縣張家揚村西側に極めて困難なる陣地進入を敢行し以て石家莊の總攻撃に参加した。當時敵は左翼の據點を平山に置き河岸に沿ひ西北山地には湯恩伯の二箇師東方平地



には衛立煌の二箇師石家莊正面には孫連中右翼には關麟徵萬福麟の諸軍を配置し其兵力二十五萬戦線實に二十里に亘る大規模の陣地帯で敵が北支戦線最後の運命をかけた決戦場であつた。所屬部隊は十日曉より西北正面に向へる兵團に協力し猛然として砲火を開いた。此日朝來雲低く寒風を切る砲弾は太行山脈に響し石家莊會戰の幕を切つて落した。敵亦野砲機關銃を以て應戦し砲口銃口火を吐いて嵐の如き猛射を浴びせて來た。彼我の銃砲聲は股々として平山縣一帶の山河に轟き渡り轉た凄慘の光景となつた。所屬中隊は午前八時十分敵彈雨飛の中に第四回目の集中射撃を行つた。氏は其一番砲手たる榮譽を擔ひつゝ滿身の勇を振ひ正確迅速なる射撃を繼續した。威力卓絶せる我砲弾は宛ら百雷の如く白煙土砂材料を中天に吹き上げつゝ忽ちにし敵の重要陣地を粉碎した。悼しいかな其最後の集中射撃中敵砲弾は氏が分隊の砲口前に落下炸裂し氏は其破片を浴びて地上に打倒れた。同時に突如「敵襲！ 頑張れ！」の聲を耳にせる氏は憤然として射撃を繼續せんとしたが力盡き竟に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の勇戦奮闘に依り當面の友軍歩兵は悠々として滹沱河を押渡り直

ちに猛追撃に移り大勝を博するに至つた。

氏や孝悌郷黨の模範となり熱誠眞摯而して其技能克く一般砲手の景仰の的となり上官の信頼特に厚かつた。果然聖戦に参加するや險難の山岳地帯に行動して具さに各種の辛酸を嘗めたが克く之に堪へ敵弾雨飛の下従容として自己の職分に邁進し克く分隊の中堅となり分隊長を輔佐し所屬中隊の戦闘威力の發揚に重大なる貢献を致した。定に是れ皇軍砲兵の精銳にして又一般軍人の模範たる者であつた。今や其慈顔壯容に接する能はずと雖も氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に輝きて其芳名を後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍砲兵上等兵勳八等功七級 中村伊市

#### 難局に決死彈藥補給に任じ竟に正太線の華と散る

氏は新潟縣三島郡日吉村の人にして父を榮吉母をツジと云ひ明治三十六年一月六日に生れ妻ハルノとの間には未だ愛子を恵まれなかつた。性明朗剛毅にして友情に富み體力人に優れ角力剣道に長じ地方競技會にも屢々出場し優秀なる成績を擧げて居た。氏は又義務心厚く一度志せば之を貫徹せざらば息まざるの氣概を持つて居た。大正八年三月日吉小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて家業に精勵するの傍ら青年會員として心身を鍛鍊し入營時に及んだ。大正十三年十二月現役兵として高田山砲兵へ入營し在隊間克く軍務に精勵し歸休除隊時には善行證書を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召星野隊に屬し中隊隊列の取者として勇躍征途に就いた。斯くて北支に上陸し九月二十九日豐臺を出發爾來豫備品班一番取者として強行軍に次ぐに強行軍を以てし保定新樂を経て十月八日漸く戦線に出で沱河々畔の渡河戦に参加するに至つた。其の間通過地域は數十年來北支に稀なる連日の降雨にし往々泥濘馬腹に達し日暮れて道遠く食ふに食なく飲むに水なく人馬共に疲勞其の極に達し征馬前まず人亦語らざるの難行軍に遭遇したが氏は駄馬を勞はり泥中に積載物を背負ふて運搬し克く班長を輔佐し衆の模範となつた。



所屬中隊は十月九日より石家莊附近の戦闘に参加し引續き正太線沿線の戦闘に参加し城子均井陘舊關附近の敵を撃破し十月十四日井陘縣南關に到達し放列陣地に彈藥を補充する事實に十數回に及んだ。其の間行動容易ならざる山地に於て而かも敵の小銃及機關銃彈は雨霰と射注く其の中に氏は率先勇躍戰友を激勵して彈藥補給の重任を全うし以て中隊戦闘の爲め毫も遺憾なからしめた。續いて十月二十六日より舊關湯泉を経て太原平地への追撃戦闘に於ては先遣彈藥分隊の取者として分隊の中堅となり分隊長を輔佐して險難なる山地を踏破し噎れても尙止まざるの意氣と熱とを以て不眠不休の努力を捧げ爲めに獨り分隊の志氣を鼓舞し得たるに止まらず中隊全般の志氣を振作し得たのであつた。

十一月六日所屬中隊は小店鎮西方約二軒に在る沱河右岸に據れる敵陣地を攻撃すべき部隊に協力せんが爲め午前十一時三十分頃同河左岸地區に陣地を占領して戦闘を開始し午後二時頃更に同河右岸地區に陣地を推進し歩兵第一線部隊に直接

協同する事になつた。此の時氏は依然先遣彈藥分隊の馭者として對岸陣地へ彈藥補給の重任に服したが放列陣地は敵前二百乃至五百米の近距離に在りしと橋梁は所々破壊して駄馬の通過不可能なりし爲め左岸より右岸陣地まで約千米突間は臂力運搬に依るの外方法はなかつた。豪膽不敵の氏は敵火を冒して率先彈藥箱を擔ひ橋に差しかゝるや之を認めたる敵は果然氏等に猛射を浴びせかけた。氏は之に屈せず衆を激勵し率先橋梁の中央まで進出せる時對岸至近距離に現出せる敵機關銃の猛火を浴び無念頭部貫通の重傷を受け壯烈なる戦死を遂げた。然れども战友等は氏の勇敢なる行動に深く感激すると共に復讐の念に燃へ午後三時頃所望の彈藥全部の搬送を終了し中隊は之に依り卓越せる砲兵威力を發揚して敵に多大の損害を與へ午後六時頃敵を潰亂敗走せしむるに至つた。

氏は體力氣力共に旺盛にして而かも責任觀念に富み任務の存する所水火をも辭せず常に諸人の愛敬を受けて居た。今次聖戰に参加するや克く聖戰の目的を辨へ全く滅私奉公の至誠を致し幾多の艱難辛苦に堪へ難局に遭ふも志氣愈々旺盛而して戦機を察するや先遣彈藥分隊の重責に鑑み決死挺身彈藥の運搬に任じ遂に兇彈の爲めに墮れた。あゝ何んぞ夫れ行動の壯烈なるや。寔に是れ皇軍砲兵の本領を發揮し得て遺憾なく又一般軍人の模範でもあつた。斯かる勇士を喪へるは痛惜禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝き其の芳名は不朽に傳へらるべく不滅の雄魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍工兵上等兵勳八等功七級 成瀬良雄

#### 正太線渡禮村の敵機關銃を撲滅し戦勝の途を開く

氏は愛知縣東春日井郡勝川町の人にして父を銀太郎母をはなと云ひ大正三年七月十六日に生れ未だ獨身であつた。性豪毅活潑にして孝心極めて深く又幼者を勞はり近隣の少年少女より小父サン々々と慕はれて居た。昭和三年三月郷里の尋常小學校卒業後は同市大曾根町の日比野兼松方へ弟子入りして左官職を見習ひ入營時に及んだが師匠其の他の人々よりも寵愛されて居た。昭和九年十二月現役兵として豊橋工兵大隊へ入營し克く軍務に精勵して屢々精勳章を附與せられ又同十一年十月歸休除隊に方りては善行證書を授けられ歸郷後は再び前職業に精勵して居た。

支那事變起るや間もなく應召大飼部隊に屬し黒田中隊第四小隊員として勇躍征途に就いた。北支到着後は直ちに長辛店附近に到り日夜道路構築補修作業に従事し常に率先奮勵衆兵の模範として將兵一般の信頼を受けた。續いて所屬部隊が涿州保定の會戰に参加するや氏は聯隊本部傳令に選ばれ高粱密生の泥濘地帯に或は濁流首を没する大河を往來し或は急霰驟雨の如き敵彈下を物ともせず迅速正確に傳令勤務を果たし十月初旬より十一月初旬に亘る石家莊及滄陽河附近の會戰に於ては第四小隊第一分隊長の指揮下に平漢沿線の道路構築及補修作業に或は唐河及び不道溝河の架橋作業に従事し終始一貫積極的に任務を遂行し殊に滹沱河の終夜架橋に際しては架柱設置班及橋脚舟班の班員として寒冷身を斬る如き水中に跳び入り作業の進捗に貢献して迅速に架橋を完了し以て軍の追撃に至大なる便益を與へた。

爾後所屬部隊は太原方向に向ひ作戰する兵團の爲め石家莊榆次間の道路補修を命ぜられ十一月二十七日には東漢府西方約一里半の峽谷に架設せる橋梁二箇所が敵手に破壊せられし情報に接し補修の爲め早朝壽陽を出發した。此の日は晴天な

りしも數日來の降雪の爲め路上の積雪は歩行の自由を妨げ白皚々たる連峯より吹き下ろす寒風骨をも刺すが如く殊に午後よりは日も影りて一段の寒氣を覺えた。されど熱血溢るゝ氏には積雪も寒冷も物の數ならず戰友を激勵しつゝ勇躍任務に向ひ邁進した。午後三時二十分中隊は渡禮村に近き部落に差しかゝるや突如快速部隊より「敵兵約四百名は中隊の進路上渡禮村附近を占領しありて邀撃を企圖しあるものゝ如し」との通報を受けた。中隊の將兵は俄かに緊張の色を漲らせ先づ



中隊長は指揮機關を隨へて北側高地に登りて敵情を偵察せる後午後三時五十分より斷乎攻撃前進に移つた。氏は中隊の右翼第一線たりし第四小隊に屬し第一分隊長の指揮下に猛烈なる彈雨を冒して敵に近迫した。敵の機關銃は約百米前方の斷崖上に在りて特に猛進せる氏の所屬小隊を猛射して居た。氏は率先躍進して部隊の前進を誘起し敵前五十米に肉薄した。中隊は火力を最高度に發揚したる後一齊に突撃を開始するや氏は戰友村松一等兵と共に部落内に飛び込み活躍中なりし敵機關銃を撲滅し更に圍壁に據る敵に向はんとする一刹那敵彈飛來左肺尖部右腋窩に至る貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。臨終に方り幽かにも兄に宜敷く！ 萬歳の一語を名残とし絶命した。所屬中隊は氏等の勇敢機敏なる行動に依り同日午後五時前後敵に多大なる損害を與へ同陣地を占領するを得た。

氏は太原方面へ轉進するに當り左の要旨の手紙を兩親宛に差出して居る「太原に向ひ出發する事になりましたから最後の手紙を書く事に致します。今日まで數度の戦闘に参加しましたが何の手柄も樹て得ず皆様に申譯ありません。今度こそ

は立派に手柄を立てる時が來たと思ひますから一生懸命働いて御國の爲め命を捨て、戦ふ積りです。中隊長殿から私の最期の知らせがあつてもお力落なく暮らして下さい。私亡き後の事は出征の時二人の兄へ呉れ呉れも頼んで置きました。云々」と悲壯なる決意の程が窺はれる。あゝ純眞誠忠の士黙々として友軍諸兵種の爲めに橋を架け道路を修理して隠れたる而かも大いなる功績を樹て一度び銃を執り敵に向ふや寡兵挺身して敵機關銃を撲滅し勇猛果敢鬼神も三舍を避くるの概があつた。洵に是れ皇軍工兵の眞價を發揮し得て餘す所もなかつた。斯かる忠勇義烈の士を表へるは痛恨哀悼を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて芳名は後世に響はるべく不滅の英靈護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族等の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 向井 一郎

勇敢なる小銃手、急迫せる情況下に上官を救はんとして玉碎す（長城線）

氏は横濱市神奈川區淺間臺の人にして父を吉五郎亡母をカヨと云ひ大正四年十二月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして孝心深く諸事積極的にして不屈不撓の氣概を有し大事に臨みては沈着果斷であつた。昭和三年三月横濱市岡野尋常小學校を卒業し同十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯爾來軍務に精勵して成績良好七月には一等兵に進級し熱心緊張警備の重任に就いて居た。

支那事變起るや間もなく小林部隊第九中隊に屬し小島小隊第一分隊小銃兵として勇躍北支戦線に出勤した。斯くて八月

上旬所屬中隊は天津附近の掃蕩戦に参加したが氏は熱心精勵克く所命の任務を完うし更に外長城線に移動を命ぜられ八月十三日所屬隊と共に張北に到着直ちに其の南方高地に陣地を占領し攻撃準備中なりしが當時長城線の敵は大兵にして連日連夜執拗に我に向ひ出撃し來り常に撃退せられては復た來襲するといふ状態であつた。八月十八日夜も午前二時三十分約四百の敵夜襲し來るや氏は分隊長の指揮下に勇戦奮闘敵に大なる損害を與へて午前八時三十分遂に之を撃退した。



翌二十日所屬部隊は外長城線の敵を攻撃した。此の時氏の所屬中隊は待望の攻撃命令を受け午前八時長城線に向ひ勇躍行動を起し該線上(ト)の陣地に對して攻撃を開始した。敵は堅固に半永久陣地を構築し我が攻撃前進に伴ひ小銃機關銃等の猛射を浴びせ來りしが氏は此の日中隊傳令として勇猛果敢弾雨を冒し而かも連絡困難なる險峻山岳地帯を東奔西走して中隊小隊間の連絡に努め中隊逐次の前進に伴ひ指揮連繫は益々困難となつたが氏は克く奮勵其の連絡を確保し以て中隊長の意圖の如く攻撃を進捗せしむることを得しめた。而して黄昏より大暴風雨となるや所屬隊は天與の好機として一舉敵陣地を夜襲するに決し夜に入るも尙ほ攻撃を續行し敵の十字火を冒し泥塗れとなりて匍匐前進し漸く敵前二十米に到達するを得た。時正に午前零時十分やがて「突込め」の號令一下猛然敵陣に突入せる氏は率先外壕を攀登し敵手榴彈の猛撃を受くるも意とせず石垣陣地に突撃を敢行突進中敵前十米に於て所屬小隊長小島中尉敵陣に倒れしを認め之を介抱せる際右大腿部に貫通銃創を受けしも之に屈せず更に歩行せんとせしがあゝ無念なるかな次の瞬間には顔面に貫通銃創を受け敵前

僅か五米に於て小隊長と折重つて壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の勇敢なる行動は中隊の志氣を振作し遂に堅固なる敵陣地を奪取することを得た。

氏は家庭に在りては孝心厚く其の一度戦線に立つや勇猛果敢彈雨の下死生を顧みず傳令としては不屈不撓積極的に活躍して重き使命を果たし又散兵としては沈勇果敢克く正確なる射撃を以て敵を壓倒し又愈々突入に方りては勇猛率先敵陣に突入し傷つくも尙屈せず唯々兵の本分に邁進し竟に玉碎した。あゝ盡忠至誠の迸る所何んぞ夫れ壯烈なるや。氏や緒戦に於て惜しくも内蒙の華と散りしも一戦玉碎して以て皇軍の精銳を發揮し開戦勢頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は天晴れ皇軍戦史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も興亞の聖業を守護し又一家の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳七等功七級 室町文吉

### 擲彈筒手、毎發必中の射撃を以て敵機關銃を制壓し竟に大册河畔に玉碎す

氏は栃木縣鹽谷郡片岡村の人にして父を操母をツヤと云ひ大正三年三月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚而かも實行力に富み何事も貫徹せざれば已まず殊に大事に臨みては沈着勇敢であつた。昭和三年三月片岡高等小學校を卒業し爾後家に在りて父母を扶け農業に従事し同九年一月現役志願兵として宇都宮歩兵聯隊に入營直ちに滿洲に派遣せられ泰安に於て初年兵教育を受けた。然かし當時尙匪團横行し教育を受けつゝも日夜警備の任に服し同年五月内地に歸還其の功



により勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。入營以來は熱心勉勵し學術の成績亦良好殊に射撃及銃劍術に秀で其の競技會に於ては成績優等の廉を以て中隊長並に大隊長より賞状を附與せられ同年十月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第四中隊に編入せられ第二小隊第五分隊擲彈筒手として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三、十四は榆垓鎮南方永定河々畔の戰闘に十五、十六日は拒馬河々畔の戰闘に参加し北相部落

に於て敵の逆襲を受くるや機を失せず陣地を占め距離の測定分畫の測合何れも的確之に猛射を浴びせ多大の損害を與へて震駭せしめ中隊の戰闘を有利ならしむるに至つた。

九月十八、十九日京漢線西側地區北義安の敵攻撃に當りては克く分隊長の指揮下に勇戰奮闘分隊長を輔佐して敵を撃退し續いて敵を急追して二十一日夕大冊河々畔に達した。敵は大冊河の障礙を巧みに利用し河中に水雷を敷設し右岸には鐵條網を設け或は地雷を埋め其の後方には水濠を繞らし數線の工事を施し掩蓋銃座を設備する等堅固に陣地を構築し之に各種火器を配備し我が攻撃を拒せんとし



て待ち構へてゐた。所屬大隊は此の堅陣に對し夜襲すべく周到なる準備を整へ二十二日午前零時行動を起し午前二時三十分恰も舊曆十七日の月光を背に浴びて水深胸にも及ぶ大冊河を渡渉し敵前近く迫りしが早くも之を偵知せる敵は死物狂ひとなつて我に猛射を浴びせ來り忽ち死傷續出するに至つた。氏は此の雨下する敵彈下に當時第二小隊の正面に於て猛威を揮ひある敵機關銃に對し直ちに陣地を選定占領し的確なる操作により百發百中の有効なる射弾を浴びせて忽ち之を制壓し

小隊の渡河進出を容易ならしめ次で鐵條網の破壊口を通過し敵陣に突入し奮戦力闘當るを幸ひ敵を刺殺しつゝ前進した。然るに其の前進間惜しくも敵彈左胸部を貫き竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。而して所屬中隊は小隊長以下數十名の死傷者を出したるも氏等の勇戰奮闘と尊き犠牲により遂に午前十時頃頑敵を撃滅しさしも堅固なりし敵陣地を完全に占領することを得た。

氏の征旅に就き選ばれて歩兵の重要火器たる擲彈筒の筒手となるや彈雨の下死生を顧みず誠實沈着其の操作常に的確每發必中の射弾を以て敵を震駭せしめ小隊戰勝の誘因を爲した。而かも敵陣に突入するや特有の武技を發揮し積極果敢敵陣内に奮戦して敵を刺殺す。かくの如きは氏の性格の然からしむる所とは云へ一死奉公盡忠至誠の發露にして洵に軍人の範とすべきである。此の如き勇士を聖戰幾何もなく大冊河々畔の華と散らしめし事は惜みても尙餘りある次第である。然かも氏の赫々の武勳は皇軍戰史に牢記せられ其の勇名と共に千古に輝き其の英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し亦一家の守護神として佑を遺族の上に垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 室 賀 明

### 忠孝兩全の勇士、大冊河畔黃村攻撃に玉碎す

氏は長野縣小縣郡富士山村の人にして亡父を善作母をてつと云ひ大正五年六月六日生れで未だ獨身であつた。資性明朗活潑にして忍耐力に富み如何なる難事に出會ふも不平又は絶望の色を現はさず徐ろに善處打開の途を拓く實行的人であ

つた。又親に孝にして父病に臥するや日夜心痛看護し父病歿後は克く母に仕へ弟妹を慈しみ一家の中堅となつて働いて居た。富士山小學校高等科卒業の後中鹽田村の組合立鹽田公民學校へ入學して昭和九年三月卒業し同十二年一月現役兵として松本歩兵聯隊に入營した。



支那事變勃發するや氏は同年八月遠山部隊に屬し坂田中隊擲彈筒手として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて九月中旬南泊附近及び大石橋派縣附近に於ける戰鬪に参加し勇奮闘能く其の任務を完うした。次いで九月二十一日大冊河々畔黃村附近の戰鬪に際し氏の屬する坂田中隊は聯隊主力の大冊河渡河を掩護すべき命を受け右岸黃村附近の一角を奪取する目的を以て先遣せられた。大冊河は河幅約五十米水深胸部に達し敵は其の右岸黃村附近に堅固なる數線陣地を構築し其の第一線陣地は高さ約五米に達する同河右岸の斷崖上に在つた。

坂田中隊は二十一日午前六時行動を起し大冊河左岸近くに達し攻撃を準備し敵情地形の偵察を行つた。然るに敵の陣地は半永久的の頗る堅固なるものであつた。然かし中隊は聯隊の渡河掩護上其の對岸の敵陣地占領を必要としたが晝間の攻撃は頗る困難なる爲め中隊長は夜襲を以て之を奪取するに決し同夜九時半行動を起して左岸に達した。然るに當夜は月明の爲め敵は我が前進を知るや忽ち我に向ひ猛烈なる銃砲火を浴びせて來た。豫て斯くあるべきを覺悟せる坂田中隊長は直ちに各小隊の擲彈筒手及輕機關銃を以て對岸の敵を制壓せしめ其の掩護射撃の下に強行渡河を決行するに決した。此の時氏は猛烈なる

敵火を冒し他の三筒手と共に河岸に近く筒を据え熾に火を吐く敵の重機及輕機を目標けて連續猛撃を開始した。斯くて交戰約二時間敵の火力稍衰へたる二十二日の正子稍過ぐる頃中隊は一齊に大冊河に跳び込み遮二無二敵陣目がけて進んだが水深胸に達する河中の前進は氣のみ逸つて容易なものではなく殊に斯くと知つた敵は再び我に猛射を浴びせ來り我が近接に伴ひ更に手榴彈を投擲し爲めに我が死傷續出し進退兩難に陥るの狀況となつた。此の時迄左岸に在つて掩護射撃に任じて居た氏等擲彈筒手及機關銃は中隊が敵岸近く迫り援護射撃の不可能となるや共に之亦河中に飛び込み對岸に向つて渡河した。此の時氏は渾身の勇を振り急霰の如き敵彈雨と降る手榴彈を物ともせず率先河中を横ざりて間もなく中隊に追ひつき中隊長以下猛進又猛進遂に對岸に達した。氏は直ちに敵陣地前二三十米の所に筒を据え筒も裂けんばかりに敵陣地に向つて猛射した。此の時突如左前方近く敵の機關銃射撃を開始するや素早く之を見付けた氏は機を失せず之に猛撃を加へて制壓し其の機に中隊は坂田中隊長以下敢然敵陣に突撃した。其の瞬間無念氏は腹部に貫貫銃創を受け續いて又前頭部に貫通銃創を蒙り竟に壯烈なる戦死を遂げた。而して中隊は氏等の神速機敏勇猛果敢なる奮闘と尊き犠牲により遂に敵陣の一角を奪取し聯隊の渡河援護の重任を果たすに至つたのである。

氏や家にあつては孝且勤勉郷内の模範青年として敬愛せられて居た。氏が如何に親思ひであつたかは氏の戦友高地虎雄氏が氏の母に寄せた手紙の一節に「室賀君は何時も貴女の事を思つて居ました御國の爲めに死ぬるは男子の本懐だ併し母の事を思ふ時はと云つて幾度か泣いて居ました」と書いてあるのでもわかる。顧みるに子を思ふ心に優る親心父亡き後の母の慈愛を偲び其の將來を案じたのであらう。併し誤解してはならない氏は母を思ふも卑怯未練の振舞などは斷じてなかつたのである。氏の戰場に臨むや勇猛果敢水火も辭せず進んで死地に入り終始奮闘力戦幾多赫赫たる偉勳を樹てた。之れ蓋し君に盡す忠誠は即ち親への孝なる所以を明識せる爲めで氏の行爲こそは忠孝一如の顯現である。噫聖戰に参加して纒

かに二句此の忠孝兩全の勇士を喪ふ洵に痛恨の極みである。然かし氏の赫々たる武勳は燦として皇國戰史を飾り其の芳名は千載に傳はれ不滅の英靈は護國の神と崇められて神靈尙も皇猷を扶翼し奉り母及弟妹の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。因に氏の所屬大隊は大冊河の戰鬪に武功赫々名譽の感狀を授けられたのであつた。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍工兵上等兵勳八等功七級 村松禮一

#### 正太線渡禮村の敵機關銃を撲滅し戦勝の途を開く

氏は靜岡縣濱名郡篠原村の人にして父を龜太郎母をみつゑと云ひ大正五年一月十八日に生れ未だ獨身であつた。性温良にして沈勇又義務心厚く職責の存する所水火をも辭せざる氣概があつた。昭和四年三月篠原小學校高等科一學年を修業し其後は家庭に在りて家業に精勵して居た。昭和十二年一月現役兵として豊橋工兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ將兵一般の信頼を博しつゝあつた。

支那事變起るや間もなく大飼部隊に屬し黒田中隊第二小隊員として勇躍征途に就いた。北支到着後は降雨泥濘を意とせず難行軍を續け九月中旬永定河北岸地區に進出し永定河渡河作業に方りては所屬山本小隊は折疊舟十隻を以て敵前漕渡を敢行すべき命令を受領したが氏は其際第二渡場長たりし岩本伍長の隸下に第三舟漕手として敵彈雨飛の中を豪膽能く激流を力漕して友軍歩兵を輸送し以て對岸占領を容易ならしめた。

超えて十月下旬よりの石家莊滄陽河附近の會戰に於ては京漢沿線の道路構築或は補修作業に任じ或は敗殘兵隨所に出沒

する地域に於て至嚴なる警戒勤務に服する等終始一貫熱誠且積極的に行動し常に衆兵の模範となつた。特に滹沱河の終夜架橋作業に方りては鐵舟泛水班に屬し凛烈たる寒威を物ともせず率先水中に飛び入りて作業の進捗を容易ならしめ以て軍の追撃行動に至大なる便益を與へた。



爾後所屬部隊は太原方向に作戰する兵團の爲石家莊榆次間の道路補修を命ぜられたが十一月二十七日東漢府西方約一里

半の峡谷に架設せる橋梁二箇所が敵手に破壊せられたる情報に接し補修の爲早朝滄陽を出發した。此日朝來晴天なりしも數日來の降雪の爲路上の積雪は歩行の自由を妨げ白皚々たる連峰より吹き下ろす寒風骨をも刺すが如く殊に午後よりは日もかけりて一段の寒氣を覺えた。併し熱血溢るゝ氏は積雪も寒氣も物の數とせず戰友を激勵しつゝ勇躍任務に向ひ邁進した。午後三時二十九分頃所屬中隊が渡禮村に近き部落に差しかゝるや突如快速部隊より「敵兵約四百名は中隊の進路上渡禮村附近を占領しありて邀撃を企圖しあるものゝ如し」との通報を受けた。中隊の將兵は俄かに緊張の色を漲らせ先づ

中隊長は指揮機關を隨へて北側高地に登りて敵情を偵察せる後午後三時五十分斷乎攻撃前進に移つた。氏は中隊の右翼第一線小隊たりし第四小隊に屬し第一分隊長の指揮下に猛烈なる敵の彈雨を冒して敵に近迫した。敵の機關銃は約百米前方の斷崖上に在りて特に猛進中の所屬小隊を猛射して居た。氏は率先躍進して部隊の前進を誘起し敵前五十米に肉迫した。中隊は茲に於て火力を最高度に發揚したる後一齊に突撃を開始するや氏は決然成瀬一等兵と共に部落内に飛び込み活躍中

なりし敵の機關銃を撲滅し其一敵を刺殺更に圍壁に據る敵に向はんとする一刹那無念胸部より右肩胛骨下にかけて貫通銃創を受け其場に打倒れた。氣丈の氏は銃を杖つき立ち上らんとしたるも及ばず後方に收容され手厚き治療看護を受けたが十月五日竟に北支戦線の華と散つた。

氏や郷に在りて温良誠實の模範青年であり出で軍に従ふや熱血以て軍務に精勵し將兵一般の寵愛を受けて居た。果然聖戦に参加するや黙々として幾多の辛酸を克服し任務の命ずる所肌も凍る水中に飛入りて架橋の進捗を圖り一度銃を執つて敵に向ふや軍の如く敵の陣地に驍進して我に最も危害を加へありし敵機關銃を撲滅した。其勇猛果敢鬼神も三合を避くるの概があつた。洵に是れ皇軍工兵の眞價を發揮し得て餘す所もなかつた。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは痛恨哀悼の情を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 鶴川 江 司

#### 夜襲に方り率先突入敵の輕機を奪取す

氏は群馬縣勢多郡南橋村の人にして父を宇四松母をトヨと稱し大正四年四月一日生れで未だ獨身であつた。資性着實思慮亦綿密にして細事と雖忽せにせず特に義務心厚く時間を嚴守し約束の履行等も確實で世人の信望厚かつた。而かも事に臨みては剛毅果斷遂げずんば已まざるの氣概を持つて居た。昭和四年三月同縣細井小學校高等科を卒業の後三年間家庭に

在つて父母を扶け家事の手傳をなし同七年より前橋市土木建築請負師に就き寫職を修業中同十一年一月現役兵として高崎歩兵聯隊に入營し一意軍務に精勵し翌十二年七月除隊となつた。

支那事變勃發するや間もなく應召森田部隊に屬して反町中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來降雨泥濘を冒して難行軍を續け九月中旬永定河畔に進出し同河畔股家舖門村の敵を撃破し爾來京漢線に沿ひ敵を追撃し拒馬

河畔に東茨村の堅壘を抜き息つく間もなく馬辛莊蔣各莊高里店等同鐵路東西地區の殘敵を掃蕩し愈々京漢線の最堅壘にて敵が難攻不落と誇りし大冊河畔黃村附近の敵陣地を粉碎し九月二十四日保定に入城十月一日より石家莊以南の追撃に移り同二十三日には磁縣南方障河の線に進出した。氏は其間或は率先彈雨を冒して敵前渡河を敢行し且正確機敏なる射撃を以て頑敵を射殺し部隊の戦鬪を容易ならしめ或は剛膽不敵の行動を以て部落内の掃蕩並に徹宵しての警備に任ずる等中隊戦鬪に寄與する所頗る多かつた。

十月二十七日より同三十一日に亘る豐安附近の戦鬪に際し所屬中隊は大隊長今少佐より東梁村の夜襲を命ぜられた。敵は東梁村東北角廟附近に對戰車壕を設け堅固に陣地を構築し守兵約八十名を以て頑強に抵抗して居た。所屬中隊は三十日午後四時三十分行動を起し午後六時日没を待ち敵陣地に肉薄した。氏の所屬分隊は第二小隊長の指揮下に第一線となり東梁村東北角廟附近に在りし敵輕機關銃陣地を奪取すべき特別任務を以て敵陣地に突入せんとするや陣地前なる對戰車壕の障礙と陣地の側防火殊に其猛威を振ふ輕機の爲小隊の突入一時頓挫



の止むなきに至つた。此時氏は敢然猛烈なる敵の十字火を浴びつゝ小圓匙を以て戦車壕の一部を崩壊し小隊の突入路を開設して率先文餘の塹壕を跳び越え猛然火を吐く敵の輕機陣地に突入し同夜午後八時之を奪取した。此勇敢にして機宜に適せる氏の行動は中隊の夜襲成功に貴重なる端緒を與へたものであつた。

所屬大隊は十一月一日以來彰徳の西方約二里に在る西梁村に位置し彰徳方面の敵に對し警戒中であつた。然るに同月三日未明約一箇聯隊の敵は俄然逆襲し來たので大隊長は午前五時三十分丸山中隊を右第一線に氏の屬する反町中隊を左第一線に配し斷乎攻撃を命じた。此頃敵は其攻撃重點を反町中隊の正面に指向し益々兵力を増加して來た。彼我の銃砲聲は曉天の空に轟き渡り地上は嵐の如き彈雨暫しも息まなかつた。附近は一帯の麥畑にて據るべき地物もなく其攻撃前進は眞に壯烈を極はめた。氏の所屬小隊は當初中隊の豫備隊たりしが中隊が敵を壓倒しつゝ水磨北方の小流線に達せる頃同部落東方の無名部落に約四五十名の敵現はれ其重機銃を以て猛烈なる斜射を浴びせ來り中隊は爾後の攻撃前進困難となつた。茲に於て中隊長は氏の屬する分隊を小隊長細野軍曹に指揮せしめ速に之が攻撃を命じた。氏は勇躍分隊の最先頭に前進して敵情地形を適時適切に分隊長に報告し率先小流を徒涉し敵の右側背に肉迫した。此時敵は之を發見して猛射を浴びせて來たが豪膽不敵の氏は毫も之に屈せず分隊の先頭に起ち敢然敵陣地に突入して之を奪取し無名部落の敵兵は多大なる損害を受け潰走し中隊主力の前進は大に容易となつた。然かし惜しいかな氏は此突入に方りて下顎部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。本戦圖は所屬中隊の射耗彈數實に一萬三千發に及びし激戦にして敵は聯隊長を初め將兵數百の死體を遺棄して潰亂敗走するに至つたが氏の勇戦奮闘は實に本戦勝の一素因をなすものであつた。

氏や眞に忠誠にして膽勇の人克く上司の命に違ひ率先衆に範を垂れ任務の前には水火も辭せなかつた。果然聖戦に参加するや踏破戦線實に百數十里其間幾多の辛酸を克服して志氣益々旺盛而かも難局に遭遇するや劍電彈雨の中に必勝を期しつゝ率先果敢なる行動を以て部隊戦勝の基礎を築き上げた。寔に是れ皇軍歩兵の精銳にして一般軍人の範たる者であつた。斯かる忠勇義烈の士を褒ふ洵に痛惜愛悼を禁じ得ざるも氏の勳功たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其芳名を千載に誦はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 内 村 清

#### 優秀なる小銃手、外長城線に奮戦し竟に壯烈地雷に玉碎す

氏は埼玉縣北埼玉郡羽生町の人にして亡實父染三郎氏は歩兵軍曹として日露戦役に従軍し勳七等に叙せられし勇士にして實母はしめ養父は嘉藤養母はまつ子と云ひ氏は大正七年三月一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順眞摯にして表裏なく物事に熱心且積極的であり大事に臨みては沈着勇敢であつた。昭和五年三月羽生尋常小學校を卒業し引續き埼玉實業學校に入り同八年三月同校卒業其後も羽生青年學校に學び在校中十八歳にして現役志願を熱望せるも家事の都合により断念の已むなきに至り翌十二年一月十九歳にして初志を貫徹し現役志願兵として麻布歩兵聯隊に入營同月渡滿し爾來軍務に熱心精勵し内務教練共に成績優良にして上等兵候補者に選拔せられた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第二小隊第二分隊の小銃兵として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。北支戦線到着後家兄に送りし書面中「自分は入營以來壯健にして今回の事變に勇躍して参加が出来たことは本望とする所でありませす。一死報國の念固く生還を期せずと誓つた身です云々」とあり殉忠の決意凛然たるものがあつた。爾後所屬隊は八月

中旬まで天津地方の掃蕩戦或は内蒙古張北附近の警備治安の維持に任せしが此間氏は不眠不休緊張裡に熱心精勵克く其任務を完了した。



八月二十日所屬部隊は外長城線附近に進出せる敵を攻撃した。此の時所屬中隊は張北南方長城線に據れる敵に對し同日午前八時より行動を起し午後二時其主陣地線上(へ)のトイチカ陣地に對し展開第一第二小隊を第一線とし攻撃を開始した。氏は右第一線小隊の右火線分隊内にありて攻撃前進を起すや敵は猛烈なる射撃を浴びせ來りしも之を物ともせず克く分隊長の指揮に従ひ沈着正確なる射撃を以て敵を制壓し其前進に當りては率先勇敢に躍進を續け逐次敵に近接中右側前方より自動火器を有する敵の猛烈なる斜射を受け小隊の前進は頗る困難となつた。かくと見たる氏の分隊長は分隊に此の敵自動火器に對する射撃を命ずるや氏は危険を顧みず身を此方向に乗り出して我小隊に危害を加へつゝある敵の自動火器に對し迅速而かも沈着正確必中の射撃を加へ遂に之を制壓し以て小隊の攻撃前進を容易ならしめかくして逐次敵に近接肉薄し午後七時二十分(へ)火點に對し突撃命令下るや勇敢に突入奮戦格闘の後遂に該火點を奪取した。然るに長城線南側トイチカに據れる敵は小銃機關銃を亂射し猶ほ頑強なる抵抗を續けたるにより中隊は第二第三小隊を第一線とし引續き之を攻撃した。所屬小隊は夕闇暗き谷を越え逐次敵に肉薄し午後八時稍々過ぎ敵前三十米の稜線に進出し敵の猛射を意とせず第一線奪取の餘威を以て一齊に突入此陣地を奪取し數十名の敵を撃退した。此間氏は銃劍を揮つて勇敢に突入り數名を刺

殺し又逃ぐる敵を射殺する等其活躍は實に目覚ましきものがあつた。然るに敵は該トイチカ恢復の爲數次に互り逆襲し來りしが氏は其都度勇戦奮闘之を撃退し遂に該トイチカを確保した。總て小隊は更に前方一軒家の敵を掃蕩することとなり敵火を潜りて之に據れる數名の敵を驅逐し午後九時頃該家屋を占領せしが其の瞬間敵の設置に係る集團地雷爆發し無念小隊長を始め戦友十名と共に全身爆傷を受け竟に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏待望の軍籍に入り時運に際會して征旅に就くや常に必勝の信念を以て敵彈雨飛の下從容として躍進を續け頑敵に遭遇するも卓越せる射撃技能を以て之を倒し遂に白兵を振つて守兵を粉碎し以て小隊戦勝の途を開拓した。是れ皆氏が出陣の際披瀝せる決意の顯現にして實に皇軍歩兵の本領を發揚し又一般軍人の模範たるべき者である。氏や前途有爲の資を以て早くも内蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも其赫々たる武功は千載の下皇軍戦史に輝き又其英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であら。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 碓水 昇

#### 忠勇義烈寡言實行の勇士、娘々廟の一番乗りをなす

氏は長野縣上水内郡柵村の人にして父を喜美三母をなると云ひ大正四年十月五日に生れ未だ獨身であつた。幼時は腕白にして家人を困らせたが小學校へ入學後は性格一變し良く弟妹を勞はり温順無口の少年となり長ずるに従ひ能く家事を手傳ひ不言實行の孝行息子となり青年團修養部長として推舉せらるゝに至つた。曾つて青年大會に於て平素無口の氏が演壇

に立ち音吐朗々時弊を論じ青年の無氣力を嘆じ轉じて農山村の青年に國家の危機を救へと叫ぶ其の至誠熱辯は眞に人の肺肝に徹せしめずには措かなかつた。聽衆は且驚き且感激に滿ち滿堂水を打ちたる如くであつたと云ふ事である。昭和五年三月柵小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて家業に従事する傍ら青年學校へ通學し本科並に研究科の課程を修了したが頭腦明晰にして所謂秀才であつた。昭和十一年一月補缺として松本歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し特に銃劍術の成績優秀にして賞状を與へられ又二回に亘り精勳章を授けられ翌十二年七月歸休除隊に方りては善行證書を附與せられた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召遼山部隊に屬し久保中隊の小銃手として勇躍征除に就いた。北支到着以來は九月中旬南伯、大石橋、涿州の戦闘に参加し或は第一線小隊の火線分隊となり或は豫備隊として勇敢機敏に行動し九月二十一日大冊河黃村附近の戦闘に於ては同日午後六時小曲城南端を占領して大隊主力の渡河を掩護し續いて敵彈雨飛の下に大冊河を渡河し午前四時頃より其の占領陣地を確保して居た。午前五時三十分頃敵は大舉逆襲に轉じ氏等の陣地正面に湖の如く殺到した。豪膽なる氏は少しも動ぜず沈着機敏に猛射を加へ之に多大なる損害を與へて見事に撃退するを得た。

十月上旬漳沱河附近の戦闘に於ては小壁村附近の渡河及敵情偵察に斥候として勇敢機敏に行動斥候長を輔佐し十日午後三時頃同河北岸地區の敵兵退却するや機を失せず敵に尾して漳沱河を渡河し之を急追した。續いて十月中旬所屬中隊が光

蘇鎮の敵を攻撃するや氏は中隊の左第一線火線分隊に屬し有効適切なる射撃に依り敵に大なる損害を與へ之を撃退した。十月二十一日所屬中隊が漳河々畔西保障の敵陣地を攻撃するや氏は中隊の右第一線火線分隊員として西保障の西南方三段高地と稱する階段高地を攻撃し敵の熾烈なる彈雨を冒し率先敵陣地に肉薄し遂に午前七時三十分同高地を奪取した。然るに此の高地は西保障附近の極めて貴重なる要點なりし爲め敵は午前十時三十分頃捲土重來の勢を以て奪回攻撃を企て茲に再び激戦は展開せられた。氏は克く分隊長の指揮下に勇戦奮闘を續けて遂に敵を撃退し午後二時西保障に集結し同地の直接警備に就いた。十一月四日彰德城の總攻撃に方り所屬部隊は彰德西南方より敵の側背を包圍攻撃すべき任務を以て所在の敵を撃破しつゝ敵が最も堅固に守備しありし娘々廟に近迫し午後四時より攻撃を開始した。所屬中隊は當初大隊豫備隊として小銃輕機及迫撃砲彈の彈雨を浴びつゝ第一線に跟随したが敵は此の陣地を失へば直ちに彰德の背後を遮斷するゝに至るを以て我が砲撃を意とせず依然圍壁の銃眼等を利用し頑強に抵抗を續け我が第一線は敵前約五百米に於て早くも豫備隊を使用するの已むなきに至つた。所屬中隊は大隊命令に依り中央第一線となり勇躍前進を起したが敵前三百米に接近するや正面城門の左に現はれたる輕機關銃の猛射に依り第一線部隊の前進はハタと停頓した。中隊長は豫備隊たる第二小隊から第四第六分隊を引抜き左翼に増加して城門の敵を攻撃させた。氏は第四分隊散兵として之に参加するや率先躍進又躍進遂に午後四時四十分突撃號令一下敵機關銃の猛射と手榴彈の雨を冒し敵の輕機關銃目指して殺到すれば敵は其の勢に恐れをなし輕機關銃を打ち捨て後方家屋に遁げ込んだ。中隊は機を失せず娘々廟へ一番乗りをなし午後五時三十分部落内の掃蕩を完了し之を占領した。氏は此の突撃の際敵前咫尺に迫り物凄き喊聲と共に圍壁に駆け登つた其の刹那憎くや左突角銃眼からの敵彈の爲め左大腿部に貫通銃創を受け「しまつたやられた」と打ち倒れたがやがて何クソと立ち上らんとしたが意外の重傷に出血甚しく涙を吞んで後送された。併し流石一番乗りの喜びに傷手も忘れ鬼をも取替かん攻撃精神の

横溢しありしは將兵一同の深く感激する所であつた。衛生隊では懇ろなる治療看護を加へたが命なるかな十一月五日午前五時容態急變し戰友が何か遺言はないかと尋ねしに對し何もないと言私事に及ばず同六時三十分明け行く空に従容として戰場の華と散つた。

氏や志操堅確熟慮果斷の人聖戰に参加以來突破戰線實に百數十里其の間幾多の激戰に遭遇し常に率先頭敵を撃破し赫々たる戰勝の素因を作り又烈々たる志氣は以て戰友等を無言の間に鼓舞激勵した。あゝ斯かる忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜禁ずる能はずと雖も氏が累次の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に誦はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 野中金五郎

輕機射手、重傷を負ふも尙其職責を完遂せんとす

氏は群馬縣高崎市寺尾の人にして亡父を友太郎母をミト養父は喜内と云ひ大正三年十二月二十一日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順正直にして勤勉殊に責任觀念頗る旺盛であつた。昭和四年三月高崎市片岡尋常高等小學校を卒業し引續き片岡補習學校へ入り同十年三月卒業した。小學校在校中は精勤にして學業の成績優良前後五回に亘り精勤章及優良賞を附與せられ補習學校に於ても三回に亘り表彰を受け常に班長に推されて居た。青年團主催講演會に於ても皆勤章を受くる等其の勤勉なる事は一村の模範であつた。昭和十一年一月徵兵として高崎歩兵聯隊に入營し翌十二年七月歸隊除隊した。除

隊後は直ちに帝國在郷軍人會高崎市片岡分會の第四班副班長に推され應召時まで一意専心分會の向上發展に盡瘁してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊第二中隊に編入せられ第二小隊第一分隊輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。北支上陸後早速氏は養父に手紙を認め「今し大陸に立つて其の任重く其の責愈々大なるを痛感致しますと共にひし



／＼と胸を打つものは皆様の熱誠溢るゝ御聲援御鞭撻であります。生々しい感激の思ひ出が次から次へと盡きません。此の上は愈々粉骨碎身以て盡忠報國の誠を致し第一線の重責を完うすると共に誓つて皆々様の御期待に副ふやう念願して居ります云々」と申し述べて居る。斯くて九月十三、十四日永定河々畔辛庄附近の戰鬪に於ては敵と近く永定河を隔てゝ緊張日夜警戒勤務に任じ愈々渡河攻撃に際しては勇戰大に努め克く其の任務を完うし次で十五、十六日拒馬河々畔東茨村附近の戰鬪に際しては第一線となりて終始奮戦力闘以て中隊の任務達成を容易ならしめた。

九月十八日澤畔店附近の戰鬪開始せらるゝや所屬隊は午前十一時三十分より行動を起し午後零時三十分愈々戰鬪を開始した。氏は第一線小隊にありて攻撃前進を起すや敵彈は急激の如くであつた。氏は火線に於て一進一止沈着正確なる射撃を以て敵を制壓しつゝ高梁畑内を或は匍匐し或は躍進し遂に敵前二百五十米にまで近迫することを得た。激戰數時間敵は尙頑強に抵抗し此の頃益々猛烈なる射撃を浴びせ來りしも氏は毫も之に屈することなく沈着克く敵情に注意し我が攻撃前



進を憫ましつゝある敵を求めては逐次的確なる射撃を以て之を制壓し、制壓しては躍進し奮戦大に努めありしが無念敵彈右胸部を貫通し其の場に倒れた。然し剛氣の氏は尙も屈せず銃把を握りたる儘射撃を継続せんと努めたが氣息奄々力盡き身體意の如くならず「後を頼む」の一語を遺して昏倒した。其の後氏は收容せられ衛生部員の手厚き醫務を受けたるも其の甲斐なく翌十九日竟に澤畔店の華と散つた。然し中隊は氏等の勇戦奮闘に依り午後八時三十分さしにも頑強なりし敵陣地を見事奪取することを得た。

氏郷に在るや一村の模範となり出で、征旅に就くや殉忠郷閭の期待に副はんことを誓ふ。果せる哉其の決意の迸る所彈雨の下勇敢沈着選ばれて輕機射手たる重任を痛感しつゝ常に正確なる射撃を以て敵を制壓し皇軍輕機の特銃を發揮して遺憾なかつた。殊に重傷を負ふも銃を離さず其の力盡きて「後を頼む」の一語を遺す。惟ふに此の言や簡なりと雖も第一線の突撃成功を支援するは我等輕機關銃の重責なりとの一念最期の一語として發露せるものにして氏の全魂是れ實に責任觀念の權化とも謂ふべく眞に軍人の鑑とすべきである。聖戦未だ幾何もなくして氏の如き良射手を喪ふ洵に痛恨の極みであるが其の責任觀念の示範と赫々たる武勳とは千載の下皇軍戦史に輝き其の芳名は千古に謳はれ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り遺族の將來を加護照覽するであらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 野口辰之助

勇敢なる歩兵砲手、克く其任を完うして水魁の華と散る

氏は埼玉縣浦和市大谷口の人にして父を彌平母をとみと云ひ大正五年六月二十三日生れで未だ獨身であつた。資性温厚篤實極めて熱のある人であつた。昭和六年三月浦和市第四小學校高等科を卒業の上同市前地の大工職小林仁作氏方に見習として弟子入りし傍ら青年訓練を受け卒業迄一日の缺動もなく熱心勉勵校長より表彰せられ昭和十二年一月徵兵として歩兵第三聯隊に入營した。間もなく所屬隊は滿洲守備の爲め同地に派遣せられ氏は滿洲に於て軍隊教育を受け第一期檢閲後

は歩兵砲手として教育を受けた。

支那事變勃發するや間もなく氏は湯淺部隊野村歩兵砲隊第一小隊第二分隊の四番砲手として北支に出動した。北支到着後所屬隊は豪雨泥濘の中に天津、武清、開平附近の殘敵を掃蕩し八月十九日張北を出發し外長城線の敵を攻撃し氏の屬する歩兵砲隊は十九日狼花溝北側臺上に陣地を占領して敵の重機關銃制壓に奮闘同地に夜を徹し翌二十日には遂に敵陣地鞍部兩側の敵火點を撲滅し伊藤小隊をして「オ」望樓占領の端緒を拓かしめ所屬隊も亦遂に二十一日長城線を奪取するに至つた。此の戰闘間氏は四番砲手として雨下する敵火の



下に沈着正確なる照準を行ひ堅忍奮闘洵に克く其の任を完うした。

續いて所屬隊は敵を追撃し二十二日夜夜襲して水魁を占領した。水魁は溪谷に在る一部落にして其の四周の山上は敵尙占領頑強に抵抗し我が友軍は之を攻撃中にして二十三日朝來彼我入亂れて激戦が續けられた。氏の所屬野村歩兵砲隊は二十三日午後二時頃水魁部落の中央三叉路附近に陣地を推進し右側山頂を占領して猛威を揮ひつゝある敵の迫撃砲に向つて

猛撃を加へた。然るに敵は我が歩兵砲發射と共に我れに猛射を浴びせ來り機關銃彈は霞の如くに射注いて來た。當時氏は其の獲つく如き敵機關銃迫撃砲彈の落下する中に勇敢機敏に活躍し沈着正確の照準を爲し見る見る効果現はれ暫くして敵の迫撃砲は沈黙するに至つたが午後二時三十分頃敵の一彈は惜しくも氏の心臓部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。而して所屬隊は氏等の奪鬪と尊き犠牲に依り敵に多大の損害を與へて潰走せしむるに至つた。

氏は現役兵として入營するや終始一貫些かの表裏なく誠實熱心勉勵し其の成績優秀にして初年兵中の模範兵と謳はれ上下の信望極めて厚かつた。されば將校の當番兵は物慣れた第二年兵中より選定するを例とするに不拘氏は初年兵にて選ばれて中隊長當番を命ぜられた程であつた。氏戦地に到着するや兩親への手紙に「自分も元氣で護國の信念を發揮して家郷に花を咲かせます」と一死報國の覺悟を認めて居る。果せるかな一度戰場に立つや危険も困苦も眼中になく唯だ皇國の爲め身命を捧げて其の本務を完うし家郷の名譽を毀損せざらんとする一念に燃ゆるのみであつた。噫斯かる勇士を聖戰の初期に喪ひし事は洵に痛惜の極みである。然かし氏は百戦功なき瓦全を耻づ。氏早くも水魁の華と散りしも其の赫々たる武勳は燦として戦史を飾り其の芳名は萬世に謳はれ其の英魂は護國の神として不滅に生き神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 野村 光一  
 險難なる北滿山岳地帯に優秀なる匪賊と勇戦し戦勝の途を拓く

氏は愛知縣中島郡千代田村の人にして父を仁藏亡母をなみと云ひ大正五年五月四日に生れ未だ獨身であつた。性質直剛健にして孝心深く又兄弟を慈しみ諸人に對しても親切であつた。氏は又實踐躬行の人にして一度志したる業務は遂げずんば已まざるの氣概を以て邁進し他人の難儀苦勞を見ては同情心抑へ難く進んで之を救済するの美風を有し諸人の愛敬を受けて居た。昭和六年三月千代田尋常小學校を又同八年三月同村立農業補習學校を卒業し其の後は家庭に在りて父母を輔け

家業に精勵し傍ら青年學校本科課程を修了したが成績良好且精勤なりし爲め學校より表彰せられた。同十二年三月現役兵として獨立守備歩兵關部隊に入營し熱心軍務に勉勵して良成績を挙げ殊に射撃及銃劍術に習熟し上司より賞状を與へられた。

關部隊は同年四月以降鐵嶺に移駐し同地方の警備に任じありしが綏南線測量隊の掩護隊として湯原西南部落たる汶附近に宿營中なる眞鍋小隊は十一月十一日午前五時過ぎ匪首不明の匪團約二百名の來襲を受けて死傷者を出し且無線電信機をも破壊せられたるの情報に接し氏の所屬第二小隊は關部隊の命令に基き笠柄中尉の指揮を以て急遽増援の爲め午前十時駐屯地を出發し強行軍を以て現場へ急行し途中險惡極まりなき山地を徹宵跋涉し翌十二日午後二時眞鍋小隊の宿營地へ到着した。然るに幸にも眞鍋小隊は獨力敵を撃退しありし後に同夜は其の地に宿營した。此の時關部隊長よりの新命令に基き笠柄眞鍋兩小隊は干泥中隊長の隸下に復歸し更に匪團の所在をつきとめて之を撃滅すべき新任務に就いた。氏は第二小隊第一分隊列兵として午前八時宿營地を出發し石道河子に向ひ前進中同日午後二時頃トウア



ンチャンツ房子西方約一軒附近に到りたる時左前方に匪團の一部が陣地に就かんとしあるを發見し中隊は直ちに此の敵に對し攻撃を開始した。氏は尖兵小隊の最前線に散開し峻峻なる岩石地帯を巧みに敵に肉薄し岩上要地を占據して我が第一線部隊を猛射中の敵に對し有効適切なる急射を浴びせ之を火制し我が中隊主力の前進を容易ならしめ次で午後三時稍前岩上に據りて頑強に抵抗する敵匪に近接し一舉岩角を攀ち上りて此の敵に突入之を撲滅し續いて第二線陣地に前進せんとし、て斷崖を攀登中無念にも一彈飛來氏は頭部に貫通銃創を受け茲に壯烈なる戦死を遂げた。然かし所屬中隊は氏等の勇戦奮闘に依り其の後間もなく敵匪に殲滅的打撃を與へ之を潰亂敗走せしむるに至つた。

氏や孝心深く常に兩親の安否を尋ね零碎の冗費を節して兩親に送金し又思想正純沈勇果斷の人で出で、軍務に服するや忠誠勇武の良兵として上下の信頼を受け常時不安の情勢下に克く滿洲警備の重任を全うして居たが支那事變の勃發の頃よりして不逞の共匪は抗日反滿の兵匪と合流して滿洲の治安を攪亂し又支那大陸に作戦する皇軍の背後を脅威すべく蠢動し而かも氏等の警備地域は其の共匪の巢窟地であつた。即ち氏等の警備勤務たるや支那事變と密接不可分の重任であり又一觸即發の對蘇關係に依つて更に一段の重責を加へられたのであつた。あゝ兎角人口を牽き難き廣漠たる北滿警備に黙々として隆暑酷暑に堪へ不斷の緊張裡に唯一筋に自己の任務に邁進し遂に小興安嶺山麓に尊き人柱となつた。今や其の壯容に接すべくもないが氏の功績たるや皇軍戦史に牢記せられて其の芳名は不朽に傳へらるべく又不滅の忠魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇軍並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

### 陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 黒田安次

#### 沈着勇敢なる小銃手、其本分を全うし長城線の華と散る

氏は東京市王子區浮間町の人にして亡父を岩五郎母を徳と云ひ大正四年五月七日に生れ未だ獨身であつた。資性温順寡黙しかも氣概に富み責任觀念強く積極的人であつた。昭和六年三月岩淵小學校高等科を卒業し其の後は家庭にありて農業に従事し傍ら青年訓練所に入り學術及心身の鍛錬に努めてゐた。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し一般兵の模範として幹部の信頼を受けてゐた。同年五月滿洲に派遣齊々哈爾及海倫附近の警備に任じ同十二年三月黑龍江省通北縣及龍鎮縣下の匪賊討伐に参加し克く所命の任務を完しうた。

支那事變起るや小林部隊第六中隊に屬し第二小隊第二分隊小銃手として七月末勇躍北支に出動し所屬中隊は直ちに天津附近の掃蕩及警備に任せしが此の間氏は將校斥候の一員となりて武清附近の敵情搜索をなし又開平附近に於て敵の武裝解除に従事する等奮勵努力以て其の任務を完し次いで八月九日獨流鎮の戦闘に際しては第一線となりて参加し爾後同地の警備に服し日夜奮勵以て中隊の任務達成を容易ならしめた。其の後内蒙古張北に轉進し八月十七日より該地の警備に服しつゝある中八月二十日所屬部隊が外長城線附近に進出せる敵を攻撃するや所屬中隊は勇躍午前七時長城線に向ひ行動を起し逐次敵に近接し午後一時長城線上紅花平西方高地のトーチカ陣地に對し展開攻撃を開始した。然るに敵は我が攻撃開始と同時に猛射を浴びせ來りしが氏は之を意とせず絶えず敵線に注意し有利なる目標を捉へ沈着每發必中の射撃を爲し奮戦中最左翼分隊たる自己の左側前方に小隊の攻撃に對し最も危害を與ふる敵重火器のあるを發見し迅速に之を分隊長に報告して對應の處置を講ぜしむる等常に分隊長を輔佐して敵の制壓に努め其の前進に當つては亦勇敢率先して躍進しかくして

遂に敵前百米に近迫した。而して午後七時薄暮に乗じ中隊突撃を敢行するや分隊長と共にトーチカ陣地に果敢なる突入を  
 決行し敵に大打撃を與へ之を占領確保した。越えて二十一日中隊は其の南方(ハ)のトーチカに向ひ第一第三小隊を第一線  
 とし行動を起し午後一時より攻撃を開始せしが此の間氏の屬する第二小隊は昨夕占領せるトーチカ陣地に止まり之が確保  
 に任じ居りしも午後二時第一線兩小隊の中間に増加を命ぜられ再び勇躍して第一線に進出した。敵は制高地點に設備せし



トーチカ及其の側面陣地より猛射を浴びせ來り中隊は其の十字火を  
 受け死傷續出するに至りしが氏は之に屈せず沈着正確なる射撃を以  
 て敵を制壓し其の前進に當りては常に勇敢なる躍進を續け敵前五  
 米に肉薄して突撃準備に着手した。愈々機熟して午後七時薄暮に乗  
 じ突撃を敢行するや氏は分隊長と前後して剛膽衆を勵ましつゝ勇敢  
 に突入せしも敵前二十米に於て無念頭部に盲貫銃創を受け竟に壯烈  
 なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦場に立つや沈着必中の射撃に専念し或は冷靜敵情に注意し  
 て重要目標を發見し或は勇敢率先突入し只管小銃兵たる本分に邁進  
 し小隊の攻撃を有利ならしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは氏が盡忠至誠の發露と謂ふべく其の緒職に於て散りしは  
 痛惜に堪へざるも開戦劈頭一戦玉碎して以て皇軍の精銳を發揮し暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載の下皇軍戰  
 史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。  
 氏は戦死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 熊本 小三太郎

軍民の龜鑑、大谷縣城に敵三人を刺殺し玉碎す

兵は京都市伏見區醍醐辰巳町の人にして父を熊次郎母をせいと云ひ明治四十四年二月二日を以て生れ妻ふじとの間に一  
 女敏子がある。大正十五年三月高等小學校を卒業し其の後は父母を助けて農業に従事して居た。資性極めて温厚眞面目に  
 して殊に親に孝行であつた。昭和七年六月現役兵として朝鮮大邱歩兵聯隊に入營し一等兵に進級同九年四月歸休除隊とな  
 り専心家業にいそしんで居た。

支那事變勃發するや昭和十二年七月三十一日應召鈴木部隊江口隊に編入せられ勇躍北支方面への征途に就いた。  
 斯くて九月上旬より中旬にかけて軍の集中に方りて所屬中隊は長辛店附近に於て集中掩護の爲め陣地を占領し其の間氏は  
 日夜搜索警戒の勤務に服し精勵克く其の職分を果たし十五、十六日琉璃河々畔の陣地攻撃に際しては分隊長と共に斥候に  
 選ばれ危険を顧みず敵情地形を偵察し機を失せず之を報告して攻撃遂行に寄與する所勤くなかつた。續いて十七日より  
 數晝夜に亘り保定南方地區に向つて猛追撃を行ひ二十三日には連日不眠不休の猛追撃に疲労其の極に達せるに拘はらず同  
 夜高荊村を占據せる敵を攻撃し勇戦奮闘中隊の戦勝に大なる貢獻を爲した。

次いで所屬兵團は十月二十一日より山西方面に作戦し嶮巖たる山系に據れる敵を攻撃し或は石窟内の敵を奇襲し難戦苦  
 闘を續け二十八日午後三時頃氏の中隊は兵站輜重の掩護中一大隊以上の敵より包圍攻撃を受けた。此の時氏は沈着剛膽克  
 く戦ひ殊に桂原分隊長と共に機敏に要地を占領し夜を徹して之を確保せし事は翌朝中隊が敵を撃退する爲めに効果あり誠  
 に偉大なる功績であつた。斯くて十一月五日太原平地に進出した。然るに敵は河南省方面にありし中央軍を山西に轉進せ